



Title	中国語結果構文の統語論的研究
Author(s)	邱, 林燕
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第12894号
Issue Date	2017-09-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k12894
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67411
Type	doctoral thesis
File Information	Linyan_Qiu.pdf



博 士 論 文

中国語結果構文の統語論的研究

邱 林燕

2017 年

目 次

第 1 章 序章

1.1 問題提起	1
1.2 先行研究と本研究の着眼点	3
1.3 理論的枠組み	10
1.4 本研究の構成	15

第 2 章 自動詞型結果構文と原因型結果構文の構造構築

2.1 はじめに	17
2.2 非対格の構造の分析	18
2.3 二種類の自動詞型結果構文と原因型結果構文の成立条件	23
2.3.1 再帰構造を持つ自動詞型結果構文	23
2.3.2 原因型結果構文における原因項と動詞 V との関係	25
2.4 軽動詞併合に基づいた新たな構造の分析	28
2.5 まとめ	39

第 3 章 非対格の他動詞型結果構文と所有者上昇

3.1 はじめに	40
3.2 CAUSE 型とされてきた他動詞型結果構文の構造分析	41
3.3 非対格の他動詞型結果構文の構造構築と所有者上昇	45
3.4 中国語非対格の他動詞文の形成に関する先行研究の再検討	54
3.4.1 いわゆる「所有者上昇」分析の問題点	54
3.4.2 「所有者上昇」分析が直面する問題点の再検討	57
3.4.3 「所有者上昇」と「下接の条件」	59
3.5 非対格の他動詞文と格付与	62
3.5.1 部分格付与と「定性の効果」	63
3.5.2 部分格付与と「部分読み」	66
3.6 まとめ	76

第 4 章 動作主主語の他動詞型結果構文と 3 層分裂 VP 構造

4.1 はじめに	78
----------	----

4.2	CAUSE 型としての他動詞型結果構文の構造分析	79
4.2.1	他動詞型と原因型を区別しない Sybesma (1999)	79
4.2.2	他動詞型と原因型を区別しようとする Huang (2006)	80
4.2.2.1	Huang (2006) が主張する他動詞型と軽動詞併合	81
4.2.2.2	他動詞型において区別される動作主と原因項	82
4.3	逆行束縛から見る動作主と原因項	87
4.4	中国語動作主主語の他動詞型結果構文の構造構築	92
4.4.1	中国語における機能範疇 μ	92
4.4.2	動作主主語の他動詞型結果構文と 3 層分裂 VP 構造	96
4.5	まとめ	99
第 5 章	移動様態動詞の場所変化結果構文の構造構築と非対格性	100
5.1	はじめに	100
5.2	中国語場所変化結果構文の構文的特徴	101
5.3	中国語場所変化表現の構造的分析	104
5.4	英語移動様態動詞の場所変化結果構文の構造分析	110
5.4.1	英語場所変化結果構文の構文的特徴と語彙的立場の分析	110
5.4.2	英語移動様態動詞の場所変化結果構文の構造構築と軽動詞 GO	112
5.5	中国語の場所変化結果構文の構造構築	118
5.5.1	非対格の特性が顕在的主要部に由来する場合	119
5.5.2	非対格の特性が非顕在的主要部に由来する場合	122
5.6	まとめ	126
第 6 章	終章	128
6.1	各章の概要	128
6.2	本研究の意義	134
6.2.1	中国語結果構文の研究における意義	134
6.2.2	理論的含意	135
参考文献		137
謝辞		144

凡例

- (1) 本論文では、例文は章ごとに番号を振り直す。
- (2) 例文の文頭に付された「*」は該当例文が非文法的であること（括弧に「*」をつけた表記は、括弧内要素を省略することができないこと）、「?」は不自然であること、「#」は該当文脈に適切ではないことを示す。
- (3) 中国語の例文を提示する際に、一行目は中国語、二行目は単語ごとに日本語のグロス、そして三行目は対応する日本語訳文を示す。また、アスペクトを表す「了」を「ASP」と表示する。
- (4) 引用例の出典は、例文の後の()内に示す。例文出典が明記されていないものは作例である。

第1章 序 章

1.1 問題提起

中国語の特徴として、以下の例 (1) が示すように、「打碎 (叩く・粉々になる)」のように行為と結果を複合した構造 (Verb-Resultative Complement Compound、以下、VR 構造、構造表示の際は、便宜上 V1-V2 とする) が豊富に用いられることが挙げられる (朱 1982、龚 1984、袁 2001、石 2003、沈 2003、2004、张 2006、施 2005、2006、2007、2013 など)。

(1) 张三 打 碎 了 花瓶。

張さん 叩く・粉々になる-ASP 花瓶

張さんは花瓶を粉々に割った。

中国語の VR 構造に関しては古くから多くの議論が展開されてきている。たとえば、VR 構造における前項動詞 V と後項の結果述語 R の意味指向の分析など数多くの記述的研究が行われている (龚 1984、沈 1993、王 1995、郭 1995、2002、袁 2001、施 2005、2006、2007、2013 など)。また、結果構文の研究が盛んに行われている中 (Simpson 1983、Levin & Rappaport Hovav (以下 L & RH) 1995、影山 1996、2006、Washio 1997、小野 2007、2009、2012 など)、中国語についても (1) のような VR 構造を述語に持つ文を結果構文として、各々のアプローチから議論が展開されている (Li 1990、1993、1995、1999、Cheng & Huang 1994、Tang 1997、Sybesma 1999、石村 2000、2011、王 2001、Lin 2004、Huang 2006、宋 2007、楊 2008、申 2007、2009、申・望月 2009、沈 2013、于 2015 など)。そして、他の言語の結果構文と対照して、中国語の結果構文は非常に特異な性質を見せることが、しばしば指摘されている。たとえば、中国語の結果構文を英語や日本語と対照してみると、次のように様々な特徴が観察される。

(2) a. 张三 打 碎 了 花瓶。

張さん 叩く・粉々になる-ASP 花瓶

b. 太郎は花瓶を粉々に割った。

c. John broke the vase into pieces.

(3) a. 张三 跑 破 了 鞋子。

張さん 走る・破れる-ASP 靴

b. *張さんは靴をボロボロに走った。

- c. John ran his shoes threadbare.
- (4) a. 张三 跑 累 了。
張さん 走る・疲れる-ASP
- b. 太郎は走り疲れた／太郎は走って疲れた。
- c. John ran *(himself) tired.
- (5) a. 马拉松 跑 累 了 张三。
マラソン 走る・疲れる-ASP 張さん
(意図する意味：マラソンを走ったことが原因で張さんは疲れた。)
- b. *マラソンが太郎をクタクタに走った。
- c. *The marathon ran John tired.

(2) と (3) のような結果構文を見る限り、中国語は英語と類似し、前項述語が結果を
含意するか否かにかかわらず、結果を表す述語が付け加えられて結果構文が広く成立可能
となっている。一方、日本語では結果構文の成立が制限されている。(2b) のように動詞自
体の意味に結果を含意する「割る」からは結果構文が成立するが、動詞本来的に結果を含
意しない「走る」のような動詞からは、(3b) のような結果構文は成立しない(影山 1996、
Washio 1997、申 2007、申・望月 2009)。¹ しかしながら、(4) が示す中国語、英語、日
本語の結果構文を対照してみると、今度は、中国語は日本語と共通しているように見える。
中国語と日本語では、(4a、b) が示すように、結果を表す述語が一見動作主主語の状態変
化を表していても、結果構文が成立する。それに対し、英語では (4c) が示すように、見
せかけの目的語「himself」がなければ非文となる。² さらに、(5) の対照を見ると、中国
語では、英語や日本語ではいずれも存在しないタイプの結果構文が成立することが分かる。

(5a) が示すタイプの結果構文は「原因型結果構文」と呼ばれている(Cheng & Huang 1994、
Sybesma 1999、Huang 2006、石村 2011)。この文では、動詞「跑(走る)」の対象が主語

¹ 影山(1996、2001、2006)など一連の研究では、動詞の意味に結果が含意される場合の結果構文が「本
来的結果構文」(Washio(1997)では「Weak Resultatives」とされ、動詞の意味に結果が含意されない
結果構文は「派生的結果構文」(Washio(1997)では「Strong Resultatives」と区別されている。そして
日本語では本来的結果構文は成立するが、派生的結果構文は許容されないと主張されている。

² 英語では結果構文の成立において、結果を表す述語が直接目的語と叙述関係を持たなければならないと
いう「直接目的語制約(Direct Object Restriction、以下 DOR)」が観察されている(Simpson 1983、L &
RH 1995)。(4c) のような非能格動詞の結果構文の成立に見せかけの目的語が要求されるのは DOR によ
るということである。なお、結果述語が状態変化ではなく場所変化を表しているという意味で、「John ran
into the room」のような場所変化の結果構文では DOR の妥当性が問われる動きがある。たとえば、場所
変化結果構文の現象を受け、Rappaport Hovav & Levin(1999、2001)は DOR を見直し、DOR の代わ
りに事象構造(event structure)の立場から結果構文の成立を解釈し直している。しかし、DOR を批判的
に論じている研究に対してさらにそれに対する反論が見られる(Mateu 2005、加賀 2007 等)。場所変化の
結果構文に関しては第 5 章において議論する。

位置を占め、動作主が目的語になっている。一見非能格動詞「跑（走る）」が語彙的使役化を引き起こしているように見られる（Huang 2006）。

以上の例から観察される現象は中国語結果構文の特徴の僅かな一部分である。日本語や英語の立場からはこれらの例だけからも中国語の結果構文が複雑で捉えどころがなさそうに見え、中国語は非常に特質な言語だとみなされるかもしれない（石村 2011）。しかし、中国語では、冒頭でも述べたように、VR 構造を述語に持つ結果構文が豊富に用いられている。中国語も人間が操ることばである以上、その深いレベルでは整然とした体系や規則性があるに違いない。

では、中国語の結果構文がこのような特徴を呈するのはなぜか。中国語の結果構文はどのようなメカニズムで成立し、どのような体系をなしているだろうか。この課題の解明は、中国語の結果構文の研究だけではなく、上述の英語や日本語などの結果構文との対照研究にも意義を有すると考えられる。本研究では、中国語の結果構文に観察されている様々な現象はその構造構築に関連すると主張する。中国語の結果構文の構造構築を体系的に解明できれば、それに関わる様々な現象が自然に説明されたと考える。具体的には、軽動詞理論に基づき、中国語の結果構文における主語名詞句と動詞 V1 の意味役割関係が動詞 V1 と軽動詞との併合（merge）に関与することに着眼する。そして、V1 と軽動詞との併合の仕方を分析することによって、中国語結果構文の構造構築を体系的に解明できることを本稿は論じる。それと同時に、結果構文に観察されている様々な付随的な現象が説明されること、そして従来の研究に残されていた問題が解決できることを示す。

次節の 1.2 節からはこの課題に関して、統語的アプローチを取る先行研究を中心に概観する。その上で、中国語の結果構文の構造構築を考察する際に、主語名詞句と動詞 V1 との意味役割関係を考慮に入れるという本研究の着眼点を改めて明らかに示す。その後、1.3 節では本研究が用いる理論的枠組みとしての軽動詞理論を紹介し、本研究における軽動詞の捉え方を定める。最後に、1.4 節において、本研究の構成と概略を述べる。

1.2 先行研究と本研究の着眼点

中国語の結果構文について統語的アプローチから構造的分析を行う研究は少なくない（Sybesma 1999、王 2001、Lin 2004、Huang 2006、沈 2013 など）。しかし、結果構文の構造を体系的に考察する研究は決して多いとは言えない。中国語の結果構文の構造構築を体系的に考察しようとする先行研究の代表として Sybesma（1999）、Huang（2006）が挙げられる。本研究は基本的に Sybesma（1999）、Huang（2006）の分析を踏まえ、統語的アプローチから中国語の結果構文の形成と構造を体系的に分析する。したがって、これ

らの先行研究が提案する構造分析については、第2章以降の各章の議論を行う際に詳細に検討する。ここではこれらの先行研究の構造分析に見られる共通点、特にそれらの構造分析の妥当性に影響を与える点のみを指摘する。その上で本研究の着眼点を明らかに示す。

Sybesma (1999) を始め、Sybesma・沈 (2006)、沈・司马翎 (2010)、沈・Sybesma (2012) など一連の研究は、小節 (Small Clause、以下 SC) 分析を採用して結果述語がその叙述対象と小節をなすとする。文の表面に項が一つしか現れない「自動詞型結果構文」では、その唯一の項は結果述語 V2 と小節をなし、前項 V1 は非対格動詞であろうと非能格動詞であろうと、外項を取らない非対格動詞になっているとする。そこで、Sybesma (1999) などでは、自動詞型結果構文は一律に (6a) のような「非対格の構造」をなすことになる。これを便宜上、「非対格型」と呼ぶ。一方、文の表面に項が二つ現れる結果構文に関して、Sybesma (1999) などでは、非対格の構造をなす自動詞型結果構文の構造に、軽動詞 CAUSE³ が加えられた拡張型と分析されている。このタイプの結果構文では (6b) が示すように、主語は V1 と構造上の意味関係を持たず、軽動詞 CAUSE によって導入される原因項 (Causer) であると主張されている。便宜上、これを「CAUSE 型」と呼ぶ。

(6) a. 非対格型

[_{VP} V1 [_{SC} X V2]]

b. CAUSE 型

[_{CAUSE} X CAUSE [_{VP} V1 [_{SC} Y V2]]]

このように、Sybesma (1999) は中国語の結果構文に関して、文の表面に現れる項の数が一つか二つかによって「非対格型」と「CAUSE 型」に分けた構造的な分析を主張している。そして様々に記述されている中国語結果構文の特徴を二種類の構造から捉えた。統語的分析の優越性を主張している。

一方、Huang (2006) は中国語結果構文の構造について、軽動詞併合の分析を提案している。動詞 V1 が様態付加詞 (manner adjunct) として軽動詞 BECOME か CAUSE と併合する構造が分析されている。Huang (2006) においても結果構文の構造の区別に、文の表面に現れる項の数が関与することが観察される。Huang (2006) では項が一つしか現れない自動詞型結果構文について、その唯一の項が結果述語 V2 と叙述関係を持ち、動詞 V1

³ Sybesma (1999) では「CAUS」と表記されているが、Huang (2006) に用いられる「CAUSE」と同様の機能を果たす軽動詞である。本研究は統一を図るため Huang (2006) に従い「CAUSE」を用いることにする。

が軽動詞 BECOME の様態付加詞 (manner adjunct) として併合するという、(7a) のような構造が提案されている。また、文の表面に項が二つ現れる結果構文に関しては、Huang (2006) では基本的に CAUSE 型とされているが、動詞 V1 と軽動詞との併合によって二種類が区別されている。すなわち、CAUSE 型には動詞 V1 が軽動詞 CAUSE と併合するかどうかによって、Pure causative (原因型結果構文) と、Causing with a manner (他動詞型結果構文) が区別され、それぞれ (7b)、(7c) のような構造が提案されている。⁴

(7) a. Inchoative (非対格型)

[BECOME_P BECOME-V1 [V_{2P} X V2]]

b. Pure causative (原因型)

[CAUSE_P X CAUSE [BECOME_P BECOME-V1 [V_{2P} Y V2]]]

c. Causing with a manner (他動詞型)

[CAUSE_P X CAUSE-V1 [BECOME_P BECOME [V_{2P} Y V2]]]

このように、Huang (2006) は動詞 V1 と軽動詞 (BECOME か CAUSE) との併合の観点から中国語結果構文の構造を体系的に考察している。そして、この構造分析によって、中国語と英語の結果構文に見られる差異が説明できると主張している。たとえば、英語では非能格動詞が用いられる結果構文は直接目的語制約 (Direct Object Restriction)⁵ によって制限され、(4c) のように「himself」がなければ成立しない。それに対し、中国語では項が一つしか現れない結果構文は、動詞 V1 が非能格動詞か非対格動詞かに関わらず、軽動詞 BECOME と併合する (7a) のような非対格の構造をなす。そのため、(4a) は自然に成立する。また、英語では存在しない原因型結果構文も、(7b) のように軽動詞 CAUSE によって原因項が導入されるため、中国語では存在する。さらに、中国語において (7) のような構造分析が可能であるのに対し、英語においては同様の構造分析ができないということに関して、それは両言語に関わるより広い範囲のパラメータによると Huang (2006) は主張している。すなわち、これらの違いは、分析的言語 (analytic language) と総合的言語

⁴ Huang (2006: 26-27) はこれらの構造を次のように示している。

(a) Inchoative : [BECOME_{<V>} [X <STATE>]]

(b) Pure causative : [X CAUSE [BECOME_{<V>} [Y <STATE>]]]

(c) Causing with a manner : [X CAUSE_{<V>} [BECOME [Y <STATE>]]]

この示し方は語彙概念構造の示し方と似通って誤解される恐れがあるため、本研究は統一を図り、(7) のように示すことにする。また、議論に応じ、樹形図を用いて示すこともある。

⁵ 注 2 (p.2) を参照。

(synthetic language)の違いによる帰結であるということである。具体的に言うと、分析的言語である中国語において、動詞は語彙レベルで軽動詞と併合しない。統語レベルに入るときは意味概念だけを持つ **pure verb** であり、どのような軽動詞とも併合することが可能となる。⁶ 一方、総合的言語である英語においては、動詞は語彙レベルで軽動詞と併合し、語彙レベルで文法特徴 (**grammatical features**) が決まる。たとえば、非能格動詞（または活動動詞 **activity verb**）であれば、レキシコンにおいて既に **[+Agent]** を持つという特徴が決まる。そのため、英語では、非能格動詞（または活動動詞 **activity verb**）は統語レベルで軽動詞 **BECOME** と併合することはできない。このように、Huang (2006) は中国語と英語の結果構文に見られる違いを言語類型的違いから捉え、魅力的な構造分析を提案している。本研究は、基本的に Huang (2006) の考察と主張に準拠し、議論を推し進めている。

以上のように、Sybesma (1999)、Huang (2006) は、分析の仕方がそれぞれ異なるものの、中国語結果構文の構造を体系的に分析しようとする研究として評価できる。以下では、両研究に見られる、中国語結果構文の構造を分析する際の基本的な観点と捉え方の共通点を指摘し、これらの共通点から両研究の構造分析の妥当性が問われることを示す。まず、上述した両研究の構造分析に基づき、両研究の主張の共通点を (8) のようにまとめる。

(8) 両研究の主張の共通点:

- a. 結果構文の表面に現れる項の数が構造分析の手がかりとなっている。
 - a1. 項が一つ現れる自動詞型結果構文が一律に「非対格型」である。
 - a2. 項が二つ現れる結果構文の構造に一律に軽動詞 **CAUSE** が存在する。
- b. どのタイプの結果構文においても、主語名詞句は **V1** と構造上の意味役割関係を持たない。
 - b1. 項を一つ持つ結果構文では主語名詞句が結果述語 **V2** と叙述関係を持つ。
 - b2. 項を二つ持つ結果構文では主語名詞句が **CAUSE** によって導入される原因項である。

(8) が示すように、両研究に見られる共通点として大きく a、b の 2 点が挙げられる。この 2 点では、b が示す観点によって、a のような二種類の構造分析が導かれると考えられ

⁶ 中国語において動詞と軽動詞との併合が統語レベルで行われることに関しては Lin (2001) でも考察されている。

る。すなわち、両研究において、結果構文の主語名詞句は、動詞 V1 と構造上の意味役割関係を持たないという捉え方が示されている。たとえば、Sybesma (1999) などは、主語名詞句と動詞 V1 と意味役割関係を持つと解釈できるとしても、百科事典的知識による語用論的意味解釈 (shadow interpretation) であると主張している。

しかし、中国語結果構文の構造を分析する際に、主語名詞句と動詞 V1 との意味関係を構造に反映させなければ、中国語結果構文に見られる多くの事実について説明ができない。このことを示す詳しい議論は各章において展開するが、ここでは、二つの事実だけを提示する。

まず、項が一つしか現れない自動詞型結果構文について、(9a、b) が示すように、両研究ではいずれもその唯一の項が結果述語 V2 だけと叙述関係を持つ構造が示されている。

(9) a. [VP V1 [sc X V2]] (Sybesma 1999)

b. [BECOME_P BECOME-V1 [V2P X V2]] (Huang 2006)

しかし、石村 (2011) などによっても指摘されているように、その唯一の項と動詞 V1 との意味役割関係によって自動詞型結果構文は異なる統語的振る舞いを示す現象が観察されている。以下の例を見てみよう。

(10) a. 张三 跑 累 了。

張さん 走る・疲れる・ASP

張さんは走って疲れた。

b. 马拉松 跑 累 了 张三。

マラソン 走る・疲れる・ASP 張さん

マラソンを走ったことが原因で張さんは疲れた。

(11) a. 花瓶 打 碎 了

花瓶 叩く・粉々になる・ASP

花瓶が粉々に割れた。

b. *他们的争吵 打 碎 了 花瓶。

彼らの喧嘩 叩く・粉々になる・ASP 花瓶

(意図する意味: 彼らの喧嘩が原因で花瓶が粉々に割れた。)

c. 他们 打 碎 了 花瓶。

彼ら 叩く・粉々になる・ASP 花瓶

彼らは花瓶を粉々に割った。

(10a)、(11a) は共通して項を一つ持つ自動詞型結果構文である。しかし、主語名詞句が結果述語の叙述対象であると同時に、V1 の動作主体でもある (10a) からは、(10b) のように原因型結果構文が成立する。一方、主語名詞句が結果述語の叙述対象であり、V1 の (対象ではあるが) 動作主体ではない (11a) からは、(11b) のように無生物の原因項主語の原因型結果構文は成立しない。そこでは (11c) のように動詞 V1 から動作主意味役割を受ける名詞句が主語となることが要求される。このように、自動詞型結果構文には、主語名詞句と動詞 V1 との意味関係によって、CAUSE 型結果構文の成立において異なる振る舞いを見せる構文が存在する。⁷ もし主語名詞句と動詞 V1 の意味役割関係が単なる百科事典的知識による語用論的意味解釈だけであるとするなら、なぜ主語名詞句と動詞 V1 の意味役割関係がこのように異なる統語的振る舞いに影響するのかが問題となる。

次に、上述の (10)、(11) が示す原因型結果構文の成立において見られる違いから、Sybesma (1999) や Huang (2006) が提案している、項を二つ持つ結果構文に対する構造分析の妥当性が問われる。Sybesma (1999) や Huang (2006) では、項を二つ持つ結果構文に関して、その主語は動詞 V1 と構造上の意味関係を持たないとする。⁸ そして、それは (12)、(13) が示すように、軽動詞 CAUSE によって導入される原因項 (Causer) だとされている。

(12) CAUSE 型

[_{CAUSE} X CAUSE [_{VP} V1 [_{SC} Y V2]] (Sybesma 1999)

(13) a. Pure causative (原因型)

[_{CAUSEP} X CAUSE [_{BECOME_P} BECOME-V1 [_{V2P} Y V2]]]

b. Causing with a manner (他動詞型)

[_{CAUSEP} X CAUSE-V1 [_{BECOME_P} BECOME [_{V2P} Y V2]]]

(Huang 2006)

⁷ Cheng & Huang (1994) では (10a) と (11a) のような自動詞型結果構文が区別されているが、Huang (2006) では両者の区別については言及されていない。

⁸ (13b) が示すように、Causing with a manner (他動詞型) では動詞 V1 が軽動詞 CAUSE と併合している。この構造によって、他動詞型の場合では主語名詞句と動詞 V1 の構造上の意味役割関係が示されると考えられるかもしれない。しかし、Huang (2006) では軽動詞と併合する V1 は様態付加詞とされて、構造上意味役割の付与に関与するか否かについては言及されていない。CAUSE 型に V1 と軽動詞の併合の仕方によって二種類が区別されているが、主語名詞句が「原因項」であるという主張は Sybesma (1999) と共通する。この点についての詳しい議論は第 3 章、第 4 章において行う。

(10b)の主語は軽動詞 CAUSE によって導入される原因項と言ってもよいように見える。しかし、実際には「跑马拉松 (マラソンを走る)」という表現が成立するように、V1 から目的語 (対象) の意味役割を与えられている。もし V1 から目的語の意味役割を与えられない名詞句が原因項主語となると、(14) が示すように、原因型結果構文としては成立しない。

(14) * 教练 跑 累 了 张三。

コーチ 走る・疲れる-ASP 張さん

(意図する意味：コーチが張さんを走らせて、疲れさせた。)

中国語では「*跑教练 (*コーチを走る)」という表現は成り立たない。原因項名詞句「教练 (コーチ)」は V1「跑 (走る)」から意味役割を与えられないため、(14) は非文となる。もし、原因項名詞句と V1 の意味役割関係が単なる百科事典的知識による語用論的意味解釈だけだとするなら、なぜ原因項名詞句が V1 と意味役割関係を持つか否かによって原因型結果構文の文法性が異なるのかが問題となる。⁹ さらに、(11b) と (11c) の対照からも、主語名詞句が動詞 V1 の動作主であるか否かによって文の成立が左右されることが示唆される。更なる事実と議論に関しては第 2 章以降の各章において提示する。

以上提示した二つの事実から明らかなように、主語名詞句と動詞 V1 の意味役割関係は単なる百科事典的知識による語用論的意味解釈だけではなく、結果構文の統語的振る舞いに影響を与えている。したがって、結果構文の構造を分析する際に、主語名詞句と動詞 V1 との意味役割関係を考慮に入れなければ、上述の中国語結果構文に観察される様々な現象について説明ができない。本研究は、基本的に Huang (2006) が提案する軽動詞併合の分析を採用する。しかし、これらの先行研究の持つ問題点を避け、そしてより妥当性を持つ構造分析を提案するためには、本研究は先行研究とは異なる着眼点から中国語結果構文の構造を分析すべきことを主張する。

(15) 本研究の着眼点と目的

主語名詞句と動詞 V1 の意味役割関係が動詞 V1 と軽動詞との併合に関与することに着眼し、V1 と軽動詞との併合の仕方を分析することによって、中国語結果構文の構造構築を体系的に解明することを目的とする。

⁹ (10b) のような原因型結果構文の成立に、原因項名詞句が軽動詞 CAUSE 単独によって導入されるのではなく、動詞 V1 との意味役割関係が要求されることに関しては第 2 章において詳述する。

本研究では、主語名詞句と動詞 V1 との意味役割関係を軽動詞併合の分析に取り入れることによって、中国語結果構文の構造構築を体系的に解明するとともに、結果構文に観察されている様々な現象が説明されること、そして従来の研究に残されていた問題が解決できることを示す。さらに、従来の研究では結果構文とされていなかった「方向補語」についても、場所変化の結果構文として同様の考え方にに基づき、軽動詞併合の分析によって構造的な分析が可能であることを論じる。

次節では、本研究が用いる理論的枠組みとしての軽動詞理論について確認し、本研究における軽動詞の捉え方を定める。

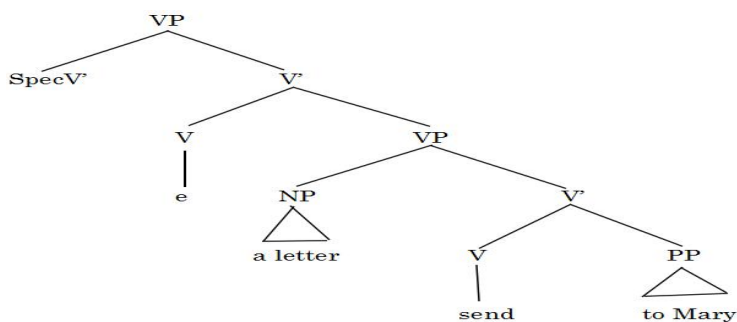
1.3 理論的枠組み

軽動詞理論 (Light Verb Theory) はミニマリスト・プログラム理論に発展してきた生成文法の枠組みにおいて重要な理論の一つである。以下では、統語構造において軽動詞がどのように捉えられ、そしてどのように機能するかを中心に、軽動詞理論について紹介する。

生成文法の枠組みにおいて、軽動詞理論の雛形として、Larson (1988) が英語の二重目的語構文を分析する際に提案している、「VP-Shell」構造が挙げられる。たとえば、(16a) のような二重目的語文は、(16b) のように 2 層の VP 構造と分析されている。

(16) a. John sent a letter to Mary.

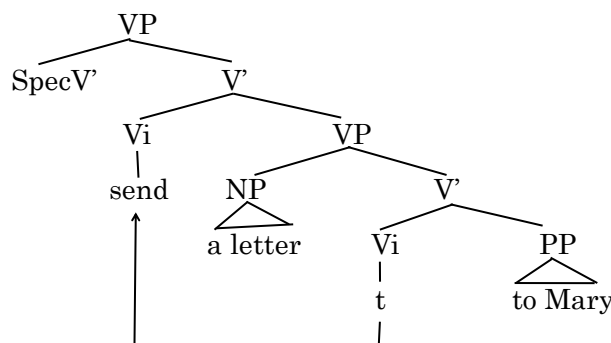
b.



(Larson 1988: 342)

この構造では、下位の VP が上位の VP の補部 (complement) となる。下位 VP の主要部 V は語彙的動詞 (send) であり、上位 VP の主要部 V は音韻形態を持たない空範疇「e」となっており、いわゆる VP shell と呼ばれている。文が派生される際には、(16c) が示すように、下位にある語彙的動詞 V (send) が上位の V (e) に移動 (head-to-head movement) して (16a) のような語順の二重目的語文が産出される。

(16) c.

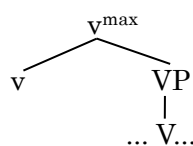


(Larson 1988: 343)

このように、Larson (1988) の VP shell 構造は、二重目的語構文の構造問題を解決するために提案されている 2 層分裂 VP 構造である。Larson (1991) では「John promised Mary to return home 5:00 p.m.」のような ‘*promise* 構文’ についても、二重目的語構文として同様の VP shell の構造分析 (p.107-108) を提案している。Larson (1988, 1991) では軽動詞という概念は使われておらず、VP shell と呼ばれているが、この構造における上位の VP shell は Chomsky (1995) が提案する軽動詞 *v* (語彙的動詞 *V* と区別して、*v* と表示される) の統語構造上の雛形と考えられる。

Chomsky (1995) は二重目的語構文だけではなく、外的 θ 役割 (外項) を取らない非対格動詞のみが単純な VP 構造となり、他動詞、非能格動詞は軽動詞 *v* が含む 2 層分裂 VP 構造となると主張し、(17) のような構造を提示している。

(17)



(Chomsky 1995: 315)

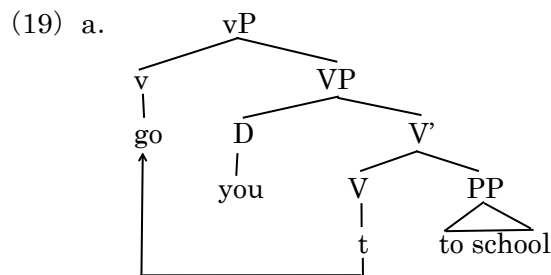
この構造では、軽動詞 *v* が動詞的接辞を必要とする場合 (上掲書 p. 321) は、語彙的動詞 *V* が軽動詞 *v* に移動して併合して、 $[_v V v]$ を形成する。外的 θ 役割 (外項) は、他動詞 (語彙的動詞 *V*) が付与するのではなく、*v*-VP の配置の特性であるということになる (同書 p. 315)。外項は他動詞 (語彙的動詞 *V*) によってライセンスされるのではなく、軽動詞 *v* によって選択されるということは Hale & Keyser (1993) によっても指摘されている。

さらに、Radford (1997) は Chomsky (1995) を踏まえ、非対格動詞も含む語彙的動詞 (lexical verbs) 全般の構造に軽動詞 *v* の組み込みを提案している。たとえば、Radford (1997) では (18a) のような非対格動詞文の成立と、(18b) のような他動詞文 (非能格

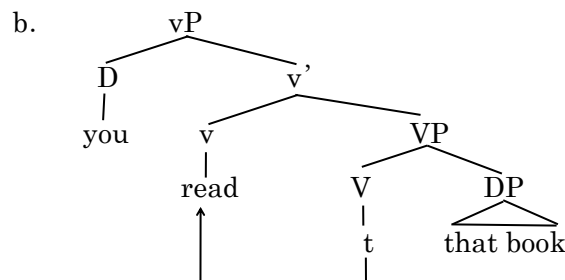
動詞文) の不成立について、それぞれを (19a)、(19b) のように軽動詞 *v* が含む分裂 VP 構造に基づいて分析している。

(18) a. Go you to school!

b. *Read you that book! (You read that book!)



(Radford 1997: 215)



(Radford 1997: 216)

まず、(18a) のような語順で非対格動詞 *go* が用いられる現象に関して、語彙的動詞 *go* の上位に音韻形態がゼロである軽動詞 *v* を仮定すると、(19a) のような構造となる。文が派生される際には、語彙的動詞 *go* が音韻形態がゼロである軽動詞 *v* に移動して併合する。そして、表面には (18a) のような語順の文が産出されるのである。一方、(18b) が示すように、同様の語順の他動詞文は成立せず、括弧内が示す語順で表現しなければならない。これは、Chomsky (1995) が主張するように、外的 θ 役割の項は VP 内部にあるのではなく、軽動詞 *vP* の指定部に基底生成するためである。すなわち、(19b) が示す構造から分かるように、動作主 (*you*) が *vP* の指定部に基底生成しているため、V (*read*) がその上位の軽動詞 *v* に移動し併合した場合でも、動作主 (*you*) は V (*read*) の後ろに現れる語順は成り立たず、括弧内が示す語順としかならないのである。

このように、Radford (1997) は他動詞 (非能格動詞) に限らず、非対格動詞も含む語彙的動詞全般の構造分析に軽動詞 *v* を組み込むことを提案している。そして、他動詞 (非能格動詞) を選択する軽動詞 *v* と、非対格動詞を選択軽動詞 *v* とが外的 θ 役割 (外項) をライセンスするか否かという点において異なることが示唆されている。このことに関して、

Chomsky (2001) は、非対格動詞を選択する（外項をライセンスしない）軽動詞を *v*、他動詞（非能格動詞）を選択する（外項をライセンスする）軽動詞を *v** と表記し、両タイプの軽動詞を区別している。他動詞（非能格動詞）を選択する軽動詞と非対格動詞を選択する軽動詞が外項をライセンスするか否かという点において異なるということは、Collins (1997)、Nishiyama (1998) でも指摘されている。Collins (1997)、Nishiyama (1998) では軽動詞 *v* が使われておらず、Tr (transitivity) と表記されている。

ここまでは、軽動詞 *v* がもつばら統語構造を分析する際の道具立てで、意味には関与しないように見られる。他方、統語構造における機能を踏まえ、軽動詞が担う意味機能も統語構造の分析に組み込む研究がある。その代表として Hale & Keyser (1993)、Huang (1992、1994、1997、2006) などが挙げられる。以下では、Huang の研究を中心に軽動詞が担う意味機能を述べる。

Huang (1992、1994、1997、2006) は、語彙分解 (lexical decomposition) に基づき抽出した動詞の共通の意味を、軽動詞が構造で担う意味であると考えている。すなわち、Huang の研究では、Dowty (1979) の語彙分解に基づいた四分類の動詞が、軽動詞が担う構造的意味の種類と関係づけられている。そして、軽動詞は (20) が示すように、DO、BECOME (OCCUR/COME ABOUT)、BE/HOLD、CAUSE の四種類として区別されている。Huang の研究で提案されている軽動詞は、事象構造を決定する構造的意味を持ち、事象述語 (eventuality predicates) と呼ばれている。

- (20) a. ku ‘cry’:
 [x DO [x ku]]
 b. kan shu ‘read books’:
 [x DO [x kan shu]]
 c. pang ‘besome fat’:
 [OCCUR/COME ANOUT [x pang]]
 d. pang ‘fat’:
 [BE/HOLD [x pang]]
 e. xihuan ‘like’:
 [BE/HOLD [x xihuan y]]
 f. qi-si ‘to anger someone to death’:
 [x DO [x CAUSE [COME/ABOUT [y qi-si]]]]

(Huang 1997: 9)

音韻形態的にゼロである軽動詞は音声化する必要がある、その下位に存在する語彙的動詞 V の移動を引き起こす。軽動詞のそういった統語構造上の特徴を踏まえ、Huang (1994, 1997)、黄 (2008) などは中国語に観察されている、一見統語と意味のミスマッチが起こる一連の現象について、それらの派生を分析するとともに、軽動詞が統語構造に存在することを主張している。Huang の研究では、使役構文 (Causative constructions)、所有者目的語構文 (Possessive object constructions)、量化事象構文 (Constructions involving event quantification)、所有格動作主構文 (Genitive agent constructions) といった一連の現象が考察されている。ここではその中の一つである使役構文 (Causative constructions) を例として Huang の分析を紹介する。

- (21) a. nei-jian shi ji-dong-de Zhangsan liu-chu-le yanlei.
that-CL matter excited-DE Zhangsan came-to tears
That metter got Zhangsan so excited that he came to tears.
- b. nei-jian shi [_{VP} CAUSE [_{VP} Zhangsan ji-dong-de liu-chu-le yanlei]]
that-CL matter ↑ Zhangsan excited-DE came-to tears

(Huang 1997: 11、下線と矢印は筆者による)

(21a) のような使役構文には、(21b) が示すように、2 層の VP 構造 (double-decker VP shell) が含まれ、上層の VP は軽動詞 CAUSE が主要部となっている。下位の VP 構造は
 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100
 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200
 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300
 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400
 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500
 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600
 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700
 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800
 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900
 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000
 1001 1002 1003 1004 1005 1006 1007 1008 1009 1010 1011 1012 1013 1014 1015 1016 1017 1018 1019 10

統語構造に存在する軽動詞によって語彙的動詞の移動が引き起こされる現象のほか、さらに、Huang (2006) は主要部移動を経ず、構造形成の最初から語彙的動詞が軽動詞の形態付加詞として併合することを主張する。そして 1.2 節で示した (7) ((22) として再掲) のような中国語の結果構文の構造的分析を提案している。

- (22) a. Inchoative (非対格型)
 [B_{BECOME_P} BECOME-V1 [V_{2P} X V₂]]
 b. Pure causative (原因型)

[_{CAUSEP} X CAUSE [_{BECOME_P} BECOME-V1 [_{V2P} Y V2]]]

c. Causing with a manner (他動詞型)

[_{CAUSEP} X CAUSE-V1 [_{BECOME_P} BECOME [_{V2P} Y V2]]]

(22) が示すように、動詞 V1 が構造上軽動詞 BECOME か CAUSE と併合することによって中国語の結果構文には三種類の構造が提案されている。しかし、先述の通り、(22) が示す中国語結果構文の構造分析では説明できない言語事実が観察されている。本研究は基本的に Huang が提案する軽動詞の捉え方を応用するが、中国語の結果構文については新たな構造的な分析を提案する。

また、Huang の研究で提示されている構造的意味による軽動詞の分類に関して、本研究は基本的に賛成する。しかし同時に、これらの構造的意味を表さない軽動詞も存在することは否定しない。すなわち、純粋に構造上の機能範疇としてある素性（意志性など）を導入する軽動詞が存在することが考えられるのである。このことは本研究第 4 章で考察する。また、軽動詞の様態付加詞として動詞が併合することを考えると、軽動詞には四種類の構造的意味を表す軽動詞のほか、他の属性を持つもの、たとえば、移動を表す軽動詞 GO も存在することが考えられる。このことは本研究第 5 章で考察する。

以上、この節では軽動詞が統語構造で果たす機能とそれの持つ意味機能を中心に軽動詞理論について紹介した。そして先行研究を踏まえ、本研究における軽動詞の捉え方を定めた。次節では本論文の構成を説明する。

1.4 本研究の構成

本研究は、前節で紹介した軽動詞理論に基づき、中国語の結果構文の構造構築を体系的に解明することを目的とする。1.2 節ですでに述べたが、本研究は、中国語の結果構文において、前項動詞 V1 と軽動詞との併合に主語名詞句と動詞 V1 の意味役割関係が関与すると考える。この考えに基づいて中国語結果構文の構造を分析する際には、結果構文の表面に現れる項の数ではなく、主語名詞句と動詞 V1 との意味役割関係を手がかりとして体系的に考察していく。以下、第 2 章以降の論文の構成と各章の概要について述べる。

第 2 章では、文の表面に項が一つしか現れない、いわゆる自動詞型結果構文、及び原因項主語を取る原因型結果構文の構造について分析する。従来の研究 (Sybesma (1999)、Huang (2006)) で一律に非対格の構造と分析されている自動詞型結果構文は、実際には一律の構造をなさないこと、そして、原因型結果構文では、原因項主語が pure CAUSE によって導入されるのではないことを論じる。その上で、自動詞型結果構文と原因型結果構文

について新たな構造的分析を提案する。第 3 章と第 4 章では、文の表面に主語と目的語の二項が現れる、いわゆる他動詞型結果構文について構造的分析を行う。第 3 章では、主語名詞句と目的語名詞句の間に「人とその人の体の部分」のような「譲渡不可能所有」関係を持つ他動詞型結果構文について分析する。このタイプ he 動詞型結果構文の構造構築には「所有者上昇 (Possessor Raising)」のプロセスが関わることを示す。第 4 章では、主語名詞句が動詞 V1 の動作主である他動詞型結果構文について構造的分析を行う。そして、動作主と原因項を構造上区別すべきであることを、動作主主語の他動詞型結果構文と原因項主語の結果構文において見られる「逆行束縛 (backward binding)」に対する許容度の違いに基づき示す。その上で、動作主主語の他動詞型結果構文について 3 層分裂 VP 構造の分析を提案する。第 5 章では、非対格の特性を示す移動様態動詞の場所変化結果構文について、軽動詞併合によって構造的分析ができることを日本語や英語との対照分析をもとに示す。最後に第 6 章で第 1 章から第 5 章にかけての内容をまとめ、本研究の意義を述べる。

第2章 自動詞型結果構文と原因型結果構文の構造構築

2.1 はじめに

本章¹は、(1a)のような文の表層に項が一つしか現れない、いわゆる自動詞型結果構文と、(2a)のような主語位置に原因項が生起する、いわゆる原因型結果構文について構造的な分析を行う。以下の例が示すように、日本語や英語にはこれらに対応する表現が非文となることが多い(Cheng & Huang 1994、Sybesma 1999、Huang 2006、石村 2011 など)。

- (1) a. 张三 跑 累 了。
張さん 走る・疲れる-ASP
b.*張さんはクタクタに走った。
c. John ran *(himself) tired.
- (2) a. 馬拉松 跑 累 了 张三。
マラソン 走る・疲れる-ASP 張さん
b.*マラソンは張さんをクタクタに走った。
c.*The marathon ran John tired.

中国語に対応する日本語(1b)は、「走る」の意味概念に結果が含意されないため、結果構文として成り立たない(影山 1996 など)。他方、英語の結果構文には結果述語が直接目的語と叙述関係を持たなければならないという直接目的語制約(Direct Object Restriction)がある。そのため、(1c)は直接目的語となる「himself」がなければ非文となる(Simpson 1983、L & RH 1995)。また、(2a)に対応する日本語や英語は存在しない(Huang 2006、石村 2011)。この文では、動詞「跑(走る)」の対象が主語位置を占め、動作主が目的語になっている。そして非能格動詞「跑(走る)」が語彙的使役化を引き起こしているように見られる(Huang 2006)。

中国語の結果構文がこのような特徴を呈するのはなぜか、その形成と構造はどのようなものか、といった問題は興味深い課題であり、盛んに議論が行われてきた(Sybesma 1999、Huang 2006 など)。これらの先行研究では、自動詞型結果構文の構造は一律に、主語が結果述語と叙述関係を持つ内項であるという非対格の構造とされる。そして、原因型結果構文は自動詞型結果構文に軽動詞 CAUSE が加えられて成立する拡張型だとされている。

¹ 本章は、邱(2017)「中国語結果構文の構文構築と軽動詞併合」の論考にもとづき、加筆修正をしたものである。

本章はこの二種類の結果構文の形成と構造について、Huang (2006) が提案する軽動詞併合の構造分析を採用し、主語名詞句と動詞 V1 の意味役割関係に着眼して動詞 V1 と軽動詞 (BECOME か CAUSE) との併合を分析する。

本章の構成は以下の通りである。まず、2.2 節で、中国語の結果構文の形成と構造を分析する先行研究の代表として、Sybesma (1999) や Huang (2006) を検討し、それらの問題点を指摘する。2.3 節では、この二つの結果構文の成立に関する記述的事実を考察する。2.2 節と 2.3 節の考察を踏まえ、2.4 節では、Huang (2006) が主張する軽動詞併合の分析を推し進める。具体的には、自動詞型結果構文には、動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合するタイプと軽動詞 CAUSE と併合するタイプの二種類の構造があることを主張する。そして原因型結果構文の形成には、動詞 V1 が BECOME と併合してさらに CAUSE に上昇するというプロセスを仮定する。さらに、本研究が提案する構造の分析はこれまでの研究で問題となる言語事実を自然に説明することができ、理論的にも経験的にも支持されることを示す。最後に、2.5 節で本章の分析をまとめる。

2.2 非対格の構造の分析

Sybesma (1999) や Huang (2006) は (1a) (2a) のような結果構文の成立を統一的に説明しようとし、自動詞型結果構文の構造は主語を内項とする非対格の構造であると分析している。たとえば、小節 (Small Clause、以下 SC) 分析を採用する Sybesma (1999) は、自動詞型結果構文はその主語が結果述語 V2 と小節をなし、動詞 V1 が外項を取らない非対格動詞にシフトする構造であると分析する。軽動詞併合 (merge) 分析を主張する Huang (2006) は、自動詞型結果構文はその主語が結果述語 V2 と叙述関係を持ち、動詞 V1 が様態付加詞 (manner adjunct) として軽動詞 BECOME と併合すると主張する。

(3) 自動詞型結果構文の構造 (1a を例とする)

- a. [VP 跑 [SC 张三 累了]] (Sybesma 1999)
- b. [BECOME_{VP} BECOME-跑 [V2P 张三 <累了>]] (Huang 2006)

このように Sybesma (1999)、Huang (2006) は、分析のしかたがそれぞれ異なるが、共に自動詞型結果構文の主語は動詞 V1 と直接選択関係を持たない構造であると主張する。そして主語が結果述語 V2 と直接叙述関係を持つ項となり、非対格の構造を持つと主張する点で両研究は共通する。

さらに、原因型結果構文に関しても両研究ともその主語が動詞 V1 と構造上の意味関係を

持たないとする。そこでは自動詞型結果構文に軽動詞 CAUSE が加えられ、それによって原因項が導入されると主張している。

(4) 原因型結果構文の構造 (2a を例とする)

- a. [CAUSEP 马拉松 CAUSE [VP 跑 [SC 张三 累了]] (Sybesma 1999)
b. [CAUSEP 马拉松 CAUSE [BECOME_P BECOME-跑 [V₂P 张三 <累了>]]
(Huang 2006)

(4) が示すように、原因型結果構文は自動詞型結果構文に軽動詞 CAUSE が加えられる拡張型と考えられる。このように、Sybesma (1999) や Huang (2006) は、自動詞型結果構文を非対格の構造と分析し、原因型結果構文の成立も統一的に説明することが可能であると主張している。

ところが、自動詞型結果構文を一律に非対格の構造と分析するなら、次の (5) のような自動詞型結果構文からも (6) のように原因型結果構文が成立すると予測することになる。

(5) 花瓶 打 碎 了。

花瓶 叩く-割れる-ASP

花瓶は叩いて割れた。

(6) * 他们的争吵 打 碎 了 花瓶。

彼らの喧嘩 叩く-割れる-ASP 花瓶

(意図する意味：彼らの喧嘩が原因で花瓶が叩かれて割れた。)

原因型結果構文は、自動詞型結果構文に軽動詞 CAUSE が導入されて拡張された構文であると両先行研究は仮定する。すると、(5) のような自動詞型結果構文からも (6) のように原因型結果構文が成り立つと予測される。しかしながら、実際には (6) は非文となる。(5) のような自動詞型から原因型結果構文が成立しないということは、後述する石村 (2011) でも述べられている。この問題に関しては、自動詞型結果構文を一律の構造と分析する Sybesma (1999) や Huang (2006) では説明することはできない。²

また、原因型結果構文 (6) が非文となるのに対し、以下 (7) のような動作主が主語位置に生起する他動詞型結果構文は成立する。このことは、動作主主語の他動詞型結果構文

² 実際、Sybesma (1999) や Huang (2006) では、自動詞型結果構文から必ずしも原因項主語の原因型結果構文が成立しないという現象は言及されていない。

と原因項主語の原因型結果構文は同様の構造を持つと主張する Sybesma (1999) などによって、重大な反例となる。

- (7) 张三 打 碎 了 花瓶。
 張さん 叩く・割れる-ASP 花瓶
 張さんは花瓶を粉々に割った。

Sybesma (1999) を始め、Sybesma・沈 (2006)、沈・司马翎 (2010)、沈・Sybesma (2012) などの一連の研究は、他動詞型結果構文 ((7) など) と原因型結果構文 ((2a) など) を区別せずに同じ構造を持つと主張する。そして、他動詞型において主語が動作主の意味解釈が可能なのは、あくまでも百科事典的知識による解釈 (shadow interpretation) に過ぎないとする。そして、構造上、他動詞型と原因型とは同様であり、いずれにおいても主語は V と直接意味関係を持たず、(8a) の構造が示すように軽動詞 CAUSE から意味役割をもらう原因項 (Causer) だと統一的に説明している。

- (8) a. [CAUSEP NP [CAUSEP CAUSE [VP V1 [SC NP V2]]]]
 b. [CAUSEP 他们的争吵 [CAUSEP CAUSE [VP 打 [SC 花瓶 碎了]]]]
 c. [CAUSEP 张三 [CAUSEP CAUSE [VP 打 [SC 花瓶 碎了]]]]

もし、Sybesma らの一連の研究で主張される通り、他動詞型と原因型が共通の構造 (8a) を持つのであれば、(6) も (7) もそれぞれ (8b) (8c) の構造を持ち、正しく成立するはずである。しかし、事実は上で述べたように (6) は非文となる。

他方、Huang (2006) は、Sybesma (1999) らと異なり、他動詞型結果構文と原因型結果構文の構造を、動詞 V1 と軽動詞との併合の仕方が違っているとして区別している。

- (9) a. Causing with a manner (他動詞型)
 [CAUSEP X CAUSE-V1 [BECOMEP BECOME [V2P Y V2]]]
 b. Pure causative (原因型)
 [CAUSEP X CAUSE [BECOMEP BECOME-V1 [V2P Y V2]]]

他動詞型結果構文の方は、動詞 V1 が軽動詞 CAUSE の様態付加詞として併合する構造だ

とする。³ 一方、原因型結果構文は、動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合する自動詞型からの拡張型であり、軽動詞 CAUSE は何も併合されない pure causative とする。

Huang (2006) の考え方に従えば、他動詞型と原因型を区別しているため、同一の自動詞型結果構文から他動詞型結果構文と原因型結果構文がともに成立するのではないことになる。たとえば、動作主主語の他動詞型結果構文 (7) は、(10a) のように動詞 V1 (「打(叩く)」) が軽動詞 CAUSE と併合する構造をなす。一方、pure causative の原因型結果構文は、(10b) のように動詞 V が軽動詞 BECOME と併合する構造となる。

- (10) a. [CAUSEP 张三 CAUSE-打 [BECOME_P BECOME [V_{2P} 花瓶 <碎了>]]
b.* [CAUSEP 他们的争吵 CAUSE [BECOME_P BECOME-打[V_{2P} 花瓶 <碎了>]]

もし (10a) の他動詞型結果構文と (10b) の原因型結果構文がともに成立するのであれば、それに対応する自動詞型結果構文 (5) では動詞 V1 (「打(叩く)」) が軽動詞 BECOME と CAUSE と併合することになる。この構造は Huang (2006) が主張する自動詞型結果構文の構造と矛盾する。したがって、Huang (2006) のように他動詞型結果構文と原因型結果構文の構造を区別すれば、(6) (7) が示すように他動詞型と原因型が同時に成立することができないということを正しく予測することができる。本研究は、Huang (2006) に賛成し、他動詞型と原因型を構造上区別すべき立場で議論を進める。⁴ しかし、なぜ (5) のような自動詞型と対応するのが原因型ではなく他動詞型であるのか、言い換えれば、どのような自動詞型から原因型が成立するのかについては Huang (2006) では言及されていない。

また、原因型結果構文において、その主語が動詞 V1 と意味関係を持たず、pure CAUSE によって導入される原因項であると Huang (2006) は分析している。そうすると、語用論上意味解釈が可能であれば、原因型結果構文として成立すると予測することになる。

- (11) a. 马拉松 跑 累 了 张三。
マラソン 走る・疲れる・ASP 張さん
マラソンが原因で張さんは走って疲れた。

³ Huang (2006) では他動詞型結果構文は (9a) のように一律に動詞 V1 が軽動詞 CAUSE と併合する構造をなすと分析されている。他動詞型結果構文の形成と構造については第 3 章、第 4 章において詳しく議論を行う。

⁴ 他動詞型と原因型を構造上区別すべきこと、及び、他動詞型と原因型を構造から区別しようとする Huang (2006) に残されている問題点について第 4 章 (4.2 節) において詳述する。

b. *教练 跑 累 了 张三。

コーチ 走る・疲れる-ASP 張さん

(意図する意味: コーチが原因で張さんは走って疲れた。)

(12) a. 烈酒 醉 倒 了 张三。

強い酒 酔う・倒れる-ASP 張さん

強い酒が原因で張さんは酔って倒れた。

b. *郁闷的心情 醉 倒 了 张三。

うっせつした気持ち 酔う・倒れる-ASP 張さん

(意図する意味: うっせつした気持ちが原因で張さんは酔って倒れた。)

しかしながら、上の例が示すように、(11b) (12b) は (11a) (12a) と同様に語用論上十分あり得る状況を表しているが、原因型結果構文としては成り立たない。そこで、(11b) (12b) が非文となるのは、語用論上の問題ではないことになる。実際、このことは、音声化される pure CAUSE である使役動詞「使」と共起すると、(11b) (12b) も (11a) (12a) と同様に文法的な文となり、原因使役文が自然に成立するようになるということから裏付けられる。

(13) a. 马拉松 使 张三 跑 累 了。

マラソン 使 張さん 走る・疲れる-ASP

マラソンが原因で張さんは走って疲れた。

b. 教练 使 张三 跑 累 了。

コーチ 使 張さん 走る・疲れる-ASP

コーチが原因で張さんは走って疲れた。

(14) a. 烈酒 使 张三 醉 倒 了。

強い酒 使 張さん 酔う・倒れる-ASP

強い酒が原因で張さんは酔って倒れた。

b. 郁闷的心情 使 张三 醉 倒 了。

うっせつした気持ち 使 張さん 酔う・倒れる-ASP

うっせつした気持ちが原因で張さんは酔って倒れた。

Pure CAUSE となる使役動詞「使」を用いた構文では、(13b) (14b) が示すように原因型結果構文の原因項になれない「教练 (コーチ)」「郁闷的心情 (うっせつした気持ち)」

も主語になりうる。(11) (12) と (13) (14) との対照からわかるように、原因型結果構文の原因項が「使」に対応する無音の軽動詞 pure CAUSE によって導入されるという分析は説得力を欠く。

以下 2.3 節では、この節で指摘した問題を踏まえ、どのような自動詞型から原因型結果構文が成立可能か、そして、原因型結果構文の主語となる原因項は構造上どのような特徴を持つかについて考察を進める。

2.3 二種類の自動詞型結果構文と原因型結果構文の成立条件

2.3.1 再帰構造を持つ自動詞型結果構文

石村 (2011) は自動詞型結果構文を一律に扱う先行研究 (Sybesma 1999) を批判し、二種類の自動詞型結果構文を区別している。一つは動詞 V1 の動作主と結果述語 V2 の叙述対象とが一致する、または両者の間に人とその人の体の部分という「譲渡不可能所有」の関係を表す「再帰構造を持つ自動詞型」(15a、b) である。もう一つは他動詞型からの脱使役化によって成り立つ自動詞型で、「受動型の自動詞型」(16) と呼んでいる。

(15) a. 李四 醉 倒 了。 (石村 2011: 166)

李さん 酔う-倒れる-ASP

李さんは酔っ払って倒れた。

b. 我的肚子 吃 坏 了。 (石村 2011: 166)

私のお腹 食べる-壊れる-ASP

私のお腹は食べて壊れた。

(16) 玻璃杯 打 破 了。 (石村 2011: 146)

グラス 叩く-割れる-ASP

グラスが叩いて割れた。

(15a) では、「醉 (酔う)」の意味上の主語と「倒 (倒れる)」の叙述対象が同一の名詞句「李四 (李さん)」によって表されている。そのため、再帰構造を持つ自動詞型結果構文とされる。一方、(15b) では、「吃 (食べる)」の意味上の主語 (「我 (私)」) と「坏 (壊れる)」の叙述対象 (「肚子 (お腹)」) は (15a) のような同一の名詞句ではない。しかし、両者の間には人と身体部分の「譲渡不可能所有」の関係が成り立っている。したがって、再帰的な意味構造を想定できるとし、再帰構造を持つ自動詞型とされる。それらに対し、(16) では、V (「打 (叩く)」) の動作主は明示されない「誰か」であり、

V2（「破（割れる）」）の叙述対象は「玻璃杯（グラス）」である。そのため、「再帰構造の自動詞型」ではなく、他動詞型結果構文から脱使役化を経て成り立つ「受動型の自動詞型」としている。

さらに、原因型結果構文の成立条件について「再帰構造を持つ自動詞型」が要求されるということを指摘している。

(17) 这杯伏特加 醉 倒 了 李四。 (石村 2011: 193)

このウォッカ 酔う・倒れる-ASP 李さん

このウォッカで李さんは酔いつぶれた。

(18) 那顿饭 吃 坏 了 我的肚子。 (石村 2011: 189)

あのご飯 食べる・壊れる-ASP 私のお腹

あのご飯で私のお腹は食べて壊れた。

(19) *这个球 打 破 了 玻璃杯。

このボール 叩く・割れる-ASP グラス

(意図する意味: 誰かがこのボールを叩いたことが原因でグラスが割れた。)

再帰構造を持つ自動詞型である(15a、b)からはそれぞれ(17)(18)の原因型結果構文が成立する。一方、再帰構造ではない(16)からは原因型結果構文(19)は産出されない。このように考えれば、(2a)((20b)として再掲)のような原因型結果構文が成立するのに対し、(6)((21b)として再掲)が成立しないことが説明できる。つまり、元となる自動詞型が「再帰構造を持つ自動詞型」であるか否かが成立条件となるのである。

(20) a. 张三 跑 累 了。 = (1a)

張さん 走る・疲れる-ASP

張さんは走って疲れた。

b. 马拉松 跑 累 了 张三。 = (2a)

マラソン 走る・疲れる-ASP 張さん

マラソンが原因で張さんは走って疲れた。

(21) a. 花瓶 打 碎 了。 = (5)

花瓶 叩く・割れる-ASP

花瓶は粉々に割れた。

b. *他们的争吵 打 碎 了 花瓶。 = (6)

彼らの喧嘩 叩く-割れる-ASP 花瓶

(意図する意味：彼らの喧嘩が原因で花瓶を粉々に割った。)

石村 (2011) によると、(20a) は、V1 (「跑 (走る)」) の動作主と V2 (「累 (疲れる)」) の叙述対象とが一致し、ともに「张三 (張さん)」であるため、「再帰構造を持つ自動詞型」とされる。そのため、それに対応する (20b) の原因型結果構文が成立する。一方、(21a) は V1 (「打 (叩く)」) の動作主は明示されない「誰か」である。V2 (「碎 (割れる)」) の叙述対象は「花瓶 (花瓶)」であるため、「再帰構造の自動詞型」とはならない。したがって、それに対応する (21b) は原因型結果構文として成立しない。このように石村 (2011) は、二種類の自動詞型結果構文のうち、再帰構造を持つ自動詞型のみから原因型結果構文が成り立つと主張する。そうすることで、自動詞型結果構文を一律に非対格の構造と分析する Sybesma (1999) や Huang (2006) の分析で予測できない問題を正しく説明することができるのである。

しかし、原因型結果構文の成立になぜそのような条件が必要なのだろうか。言い換えれば、なぜ再帰構造を持つ自動詞型結果構文からのみ原因型結果構文が成立するのか。再帰構造を持つ自動詞型結果構文と受動型の自動詞型結果構文はそれぞれどのような構造を持つのか。原因型結果構文は再帰構造の自動詞型結果構文からどのようなプロセスを経て成立するのか。これらの点は石村 (2011) では分析が行われていない。これらのことについての議論 (2.4 節) に入る前に、次節では 2.2 節で提示した二つ目の問題、つまり、原因型結果構文の成立における原因項の特徴について考察する。

2.3.2 原因型結果構文における原因項と動詞 V との関係

石村 (2011) によると、原因型結果構文の成立には再帰構造をもつ自動詞型結果構文が要求される。しかし、再帰構造を持つ自動詞型結果構文であっても、(11) (12) (22) (23) として再掲) が示すように、原因項の意味特性によっては原因型結果構文として成り立たないものがある。

(22) a. 马拉松 跑 累 了 张三。

マラソン 走る-疲れる-ASP 張さん

マラソンが原因で張さんは走って疲れた。

b. *教练 跑 累 了 张三。

コーチ 走る-疲れる-ASP 張さん

(意図する意味: コーチが原因で張さんは走って疲れた。)

- (23) a. 烈酒 酔 倒 了 张三。

強い酒 酔う・倒れる-ASP 張さん

強い酒が原因で張さんは酔って倒れた。

- b. *郁闷的心情 酔 倒 了 张三。

うっせつした気持ち 酔う・倒れる-ASP 張さん

(意図する意味: うっせつした気持ちが原因で張さんは酔って倒れた。)

上で述べたように、これらの文ではいずれも語用論上の意味解釈は十分あり得る。しかし、(22a) (23a) が成立するのに対し、(22b) (23b) は成り立たない。結局、原因型結果構文の原因項が **pure CAUSE** によって導入されるという単純な分析は妥当性を欠く。そこで、原因項となる名詞句 NP が構造上何によって制限されるのかを分析する必要がある。

原因型結果構文が成り立つ VR 構造と原因項となる名詞句 NP との関係を調べると、原因項名詞句 NP が VR 構造の前項動詞 V1 によって制限されることが分かる。たとえば「走(歩く)、跑(走る)、吃(食べる)、喝(飲む)、看(見る／読む)、写(書く)、听(聞く)」などのような動作主の意志によってコントロールできる動詞(他動詞または非能格動詞)が前項動詞 V1 に生起する場合は、原因型の主語となる名詞句 NP は動詞 V1 の目的語になり、動詞 V1 と「V NP」という文法関係を持つことになる。⁵

- (24) a. 这本书 写 累 了 李四。

この本 書く・疲れる-ASP 李さん

この本を書いたことが原因で李さんは疲れた。

- b. *出版社の催促 写 累 了 李四。

出版社の催促 書く・疲れる-ASP 李さん

(意図する意味: 出版社の催促が原因で李さんは書いて疲れた。)

- (25) a. 这瓶烈酒 喝 醉 了 张三。

この強い酒 飲む・酔う-ASP 張さん。

⁵ 中国語では動詞の目的語位置にくる名詞は必ずしも対象の意味役割が付与されるわけではない。例えば「吃食堂(食堂で食べる)」「切大刀「大きな包丁で切る」などのように場所や道具も目的語位置に置くことができる。動詞から必ずしも対象意味役割を受けないが、典型的な「目的語」と同様の文法的な振る舞いを保ち、同様の統語位置(動詞の目的語位置)を占める(Barrie & Li 2015: 184-188)。中国語の文法では「V NP」は一律に「动宾关系(動詞目的語関係)」と扱われている。本稿も動詞 V の補語位置を占める名詞句 NP を典型的、非典型的を問わず一律に「目的語」とする。

強い酒が原因で張さんは酔って倒れた。

b. *郁闷的心情 醉 倒 了 张三。

うっせつした気持ち 酔う-倒れる-ASP 張さん

(意図する意味: うっせつした気持ちが原因で張さんは酔って倒れた。)

中国語では「醉于酒（酒に酔う）」という表現が成立するのに対し、「*醉于郁闷的心情（うっせつした気持ちに酔う）」という表現は成り立たない。この違いが原因型結果構文の成立に関与する。すなわち、動詞 V1 と「V 于 NP」という文法関係が成り立つ NP が主語位置に置かれた (26a) は原因型結果構文として成立する。それに対し、動詞 V1 と「V 于 NP」という文法関係が成り立たない NP が主語位置に置かれた (26b) は非文となるのである。

以上、この節では、二種類の自動詞型結果構文と原因型結果構文の成立条件について考察した。要約すると、原因型結果構文の成立には、まず、再帰構造をもつ自動詞型結果構文が要求される。そして次に、原因項となる名詞句 NP は「V NP」、「V 于 NP」のような文法関係で動詞 V1 の補語（目的語）になることが可能でなければならない。

以下 2.4 節では、ここで考察した二つの言語事実を踏まえ、原因型結果構文の成立にはなぜそのような条件が要求されるのかを考察し、自動詞型結果構文と原因型結果構文の形成と構造についてさらに分析を進める。

2.4 軽動詞併合に基づいた新たな構造の分析

この節では、前節で挙げた言語事実を踏まえ、中国語の自動詞型結果構文と原因型結果構文の形成と構造について考察する。そして、Huang (2006) が主張する軽動詞併合の分析を援用し、新たな構造の分析を提案する。

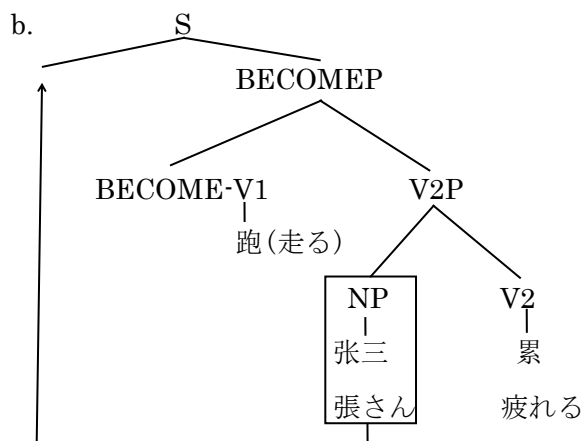
まず、前述のように、自動詞型結果構文の構造を、その主語 NP が動詞 V1 と構造上の関係を持たず、一律に非対格の構造と分析する Sybesma (1999) や Huang (2006) の研究は妥当性が欠ける。本研究は結果構文の構造を分析する際に、主語 NP と動詞 V1 との関係を構造分析に取り入れる必要があることを主張する。石村 (2011) で考察された (15a、b) のような再帰構造を持つ自動詞型結果構文は、以下例示した (27a) (28a) と同様に、主語名詞句が結果述語 V2 と叙述関係を持つほか、動詞 V1 と「動詞 V1 の主体、または主体の体の部分」といった意味関係を持つ。そのため、このタイプの自動詞型結果構文では、動詞 V1 が、主語名詞句と局所的 (local) 関係を持つ軽動詞 BECOME と併合すると考えられる。局所的関係は θ 役割を付与する要素とその θ 役割を受け取る要素が占める構造上

の関係である（中村ほか 2001:78）。そのため、動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合し、それらの局所的関係によって動詞 V1 と主語名詞句との意味関係が保たれるのである。そうすると、再帰構造を持つ自動詞型結果構文は Huang (2006) が主張する非対格の構造をなす自動詞型結果構文に相当する。このタイプの自動詞型結果構文については Huang (2006) の分析を踏襲する。⁷ それぞれの構造を (27b) (28b) のように示す。なお、アスペクトマーカー「了」の位置を省くことにする。以下、同様である。

(27) a. 张三 跑 累 了。

張さん 走る-疲れる-ASP

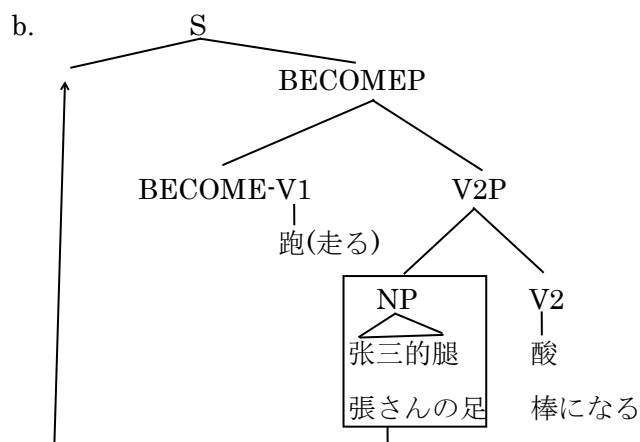
張さんは走って疲れた。



(28) a. 张三的腿 跑 酸 了。

張さんの足 走る-棒になる-ASP

張さんの足が走って棒になった。



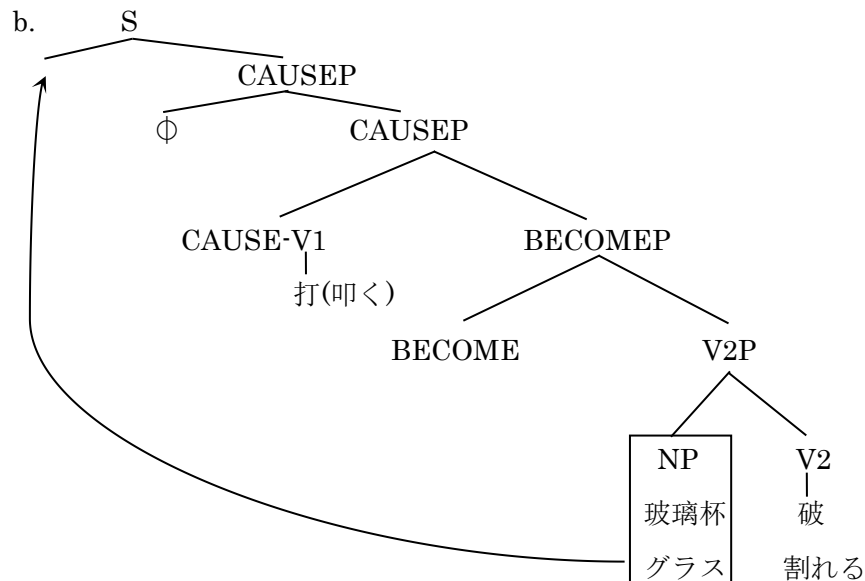
⁷ 中国語では動詞 V1（非能格動詞か非対格動詞かにかかわらず）が軽動詞 BECOME と併合することが可能なことに関しては Huang (2006) を参照されたい。

一方、受動型の自動詞型結果構文 (29a) は、動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合せず、CAUSE と併合する構造をなすと主張する。

(29) a. 玻璃杯 打 破 了。

グラス 叩く・割れる-ASP

グラスは叩いて割れた。



(29a) タイプの自動詞型結果構文は、軽動詞 CAUSE が含まれ、さらに音形的に表現されない「Φ」の外項が含まれる構造をなす。⁸ (29a) のタイプの自動詞型結果構文の構造に動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合せず⁹、CAUSE と併合することを支持する証拠は後述の原因型結果構文の構造を議論する際に提示する (例 (43) を参照)。ここではまず、

⁸ 構造上に「Φ」の外項 (例えば空代名詞 pro) があるなら、pro が主語になり、目的語は主語にならないはずだという指摘もある。つまり、(29a) のような結果構文は「花瓶_i pro 打碎了 t_i」のようにみなすのである。しかし、(29a) タイプの結果構文では、文頭の名詞句が主題ではなく主語だということはすでに Cheng & Huang (1994: 208 - 211) で検証されている。詳しくは Cheng & Huang (1994: 208 - 211) を参照されたい。また、「VP 内主語仮説を採った場合には、文主語位置に目的語など主語以外の要素が出現しても、本来の主語を基底位置に生起されておくことができる。これにより、従来、レキシコン内で充足されるために統語構造上には投射されないと仮定された含意的外項 (implicit external argument) を、統語的にも実在するものとして議論することが可能となる。」(藤田・松本 2005: 97) との主張もある。よって、本研究で扱う (29a) タイプの結果構文の構造に「Φ」となる外項が存在し、目的語の名詞句が主語になると考えるのは理論的に可能であろう。

⁹ このタイプの自動詞型結果構文の構造において動詞 V が軽動詞 BECOME と併合しないということは、動詞 V が主語位置に移動する名詞句 NP と局所的関係を持たず、名詞句 NP に意味役割を付与しないことを意味する。このタイプの自動詞型結果構文には「手帕哭湿了 (ハンカチが泣いて濡れた)」のように主語名詞句「手帕 (ハンカチ)」と動詞 V1「哭 (泣く)」が明らかに意味関係を持たない例がある。したがって、(29a) においても主語名詞句「玻璃杯 (グラス)」は動詞 V1「打 (叩く)」と意味関係を持たないと考えることが可能である。

(29a) タイプの自動詞型結果構文の構造に外項が存在することを支持する事実を提示する。

たとえば、英語の能格動詞「break」、日本語の反使役化の自動詞（影山 1996 の呼び方）「割れる」、中国語の状態変化の非対格自動詞「破（割れる）」（徐 2001）など、主語名詞句それ自体が起因となることができ、構造上の外項（外的原因）が存在しない動詞の場合は、以下の例が示すように、外的原因の不在を明記する表現「all by itself、自分で／勝手に、自己」と共起することができる（影山 1996: 151、189、藤田・松本 2005: 118、Huang 2015: 7 など）。

(30) a. The glass broke all by itself.

b. グラスが勝手に割れた。

c. 玻璃杯 自己 破 了。

グラス 自分で／勝手に 割れる・ASP

一方、主語名詞句それ自体は起因要素ではなく、構造に外項が存在する場合は、外的原因の不在を表す「all by itself、自分で／勝手に」とは共起しない（影山 1996、藤田・松本 2005）。たとえば、英語の中間構文では対象が主語になり、動作主は文の表面に現れないが、構造上存在する。¹⁰ そのため、(31a) のように「all by itself」と共起しない（藤田・松本 2005: 118）。また、対象が主語になる日本語の「てある」構文においても動作主は表面上姿を現さず、統語構造にゼロの形式で存在する（影山 1996: 187）。そのため、(31b) のように「自分で／勝手に」とは共起しない。

(31) a. * This boat sinks easily all by itself.

b. * 窓が勝手に壊してある。

これらのことを踏まえ、(29a) のタイプの自動詞型結果構文において対象が主語になり、構造上ゼロ形態の外項が存在すると仮定してみよう。すると、(29a) のような自動詞型結果構文は英語の中間構文や日本語の「てある」構文と同様に、外項（外的原因）の存在を

¹⁰ 動作主の存在を明示する語句（たとえば意図を表す副詞「intentionally」など、目的を表す不定詞節など）と共起しないことから、中間構文の持つ含意的動作主は統語構造上は存在せず、語彙意味的にのみ存在すると主張する立場もある。一方、意図を表す副詞や目的を表す不定詞節と共起しないことから、構造上、動作主が存在しないとは言えないとの反論もあり、中間構文にも構造上動作主が存在すると主張する立場もある。具体的には影山（2001: 184-192）、藤田・松本（2005: 94-122）及びそれらで挙げられた参考文献を参照されたい。本研究は影山（2001）や藤田・松本（2005）と同様に後者の立場を支持することを前提に、議論を行う。

否定する「自己（自分で／勝手に）」と共起しないことになる。

(32) * 玻璃杯 自己 打 破 了。

グラス 自分 叩く・割れる-ASP

(意図する意味：グラスが勝手に叩いて割れた。)

事実は予測の通りで、(29a)の自動詞型結果構文は、(32)が示すように「自己（自分で／勝手に）」と共起することはできない。

以上、要約すると、(29a)のタイプの自動詞型結果構文の構造は、(32)が示すように「自己（自分で）」と共起することができない。これにより、このタイプの結果構文は、BECOME だけが含まれる非対格の構造ではなく、動詞 V1 が外項（外的原因）を導入する軽動詞 CAUSE と併合している構造であると考えられる。外項がΦであるため、対象名詞句が主語位置に移動して(29a)タイプの自動詞型結果構文が派生されることが考えられる。¹¹ 本研究は石村（2011）に従い、この種の構文を「受動型の自動詞型結果構文」と呼ぶ。

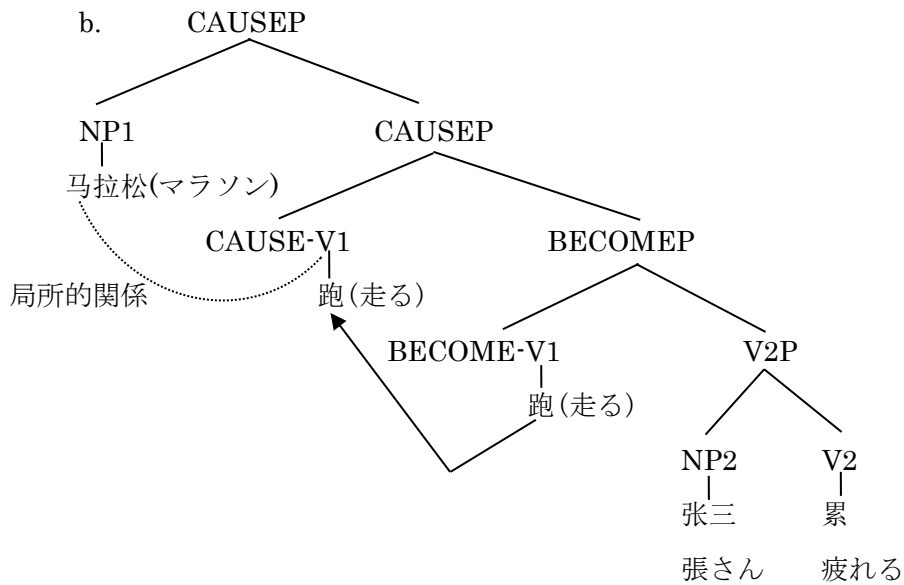
次に、原因型結果構文の形成については、動詞 V1 が BECOME と併合してから、さらに CAUSE に上昇するというプロセスを仮定し、次のように提示する。

(33) a. 马拉松 跑 累 了 张三。

マラソン 走る・疲れる-ASP 張さん

マラソンを走ったことが原因で張さんは疲れた。

¹¹ (29b) が示す構造では、対象意味役割を付与される名詞句（たとえば、「玻璃杯（グラス）」）は軽動詞 CAUSE から「対格」を付与されると一般的に考えられる。そのため、もしさらに主語位置に移動して主語となると、「主格」も付与されることになる。そうすると、一つの名詞句が「対格」と「主格」を同時に担うことになってしまい、格の重複の問題が生じるように見られる。この問題が生じないことを第4章の4.4.1節で立ち戻って論じる。



この構造によって、石村（2011）が提案する「原因型結果構文の成立に再帰構造を持つ自動詞型結果構文が要求される」という原因型結果構文の成立条件を説明することができる。(33b)が示すように、原因型結果構文の成立過程では、動詞V1が最初に軽動詞BECOMEと併合する。また、(27b) (28b)で示したように、再帰構造を持つ自動詞型結果構文は動詞V1が軽動詞BECOMEと併合する非対格の構造をなす。そのため、再帰構造を持つ自動詞型結果構文からは原因型結果構文が成立可能となる。一方、上で議論したように、(29a)タイプの自動詞型結果構文の構造にはゼロ形態の外項が存在し、動詞V1が外項を導入する軽動詞CAUSEと併合する。そうすると、受動型の自動詞型結果構文では動詞V1がそもそもBECOMEと併合しないため、原因型結果構文は成立不可能となるのである。

そして、この構造を仮定することで、原因型結果構文の原因項となる名詞句NPが動詞V1の補語（目的語）でなければならないということを構造的に説明することができる。BECOMEと併合した動詞V1は、さらに軽動詞CAUSEに上昇するというプロセスが仮定されている。そのため、原因項となるNPはpure CAUSEによって導入されるのではなく、動詞V1が併合した軽動詞CAUSEによって導入されたものと考えられる。そこでは、原因項名詞句NPが動詞V1と構造上、局所的（local）な関係を持つことになる。したがって、動詞V1と構造上、局所的関係を持つ原因項NPは動詞V1によって制限され、動詞V1と文法的関係を持たなければならないことになる。たとえば、上述(22a, b) (34a) (35a)として再掲)は次のような構造を持つとみなすことができる。

- (34) a. 马拉松 跑 累 了 张三。
 マラソン 走る・疲れる-ASP 張さん
 マラソンを走ったことが原因で張さんは疲れた。
- b. [CAUSEP 马拉松 CAUSE-跑[BECOMEP BECOME-跑[V2P 张三 <累了>]]]
 局所的關係
- (35) a. *教练 跑 累 了 张三。
 コーチ 走る・疲れる-ASP 張さん
 (意図する意味：コーチが原因で張さんは走って疲れた。)
- b. *[CAUSEP 教练 CAUSE-跑[BECOMEP BECOME-跑[V2P 张三 <累了>]]]
 局所的關係

(34b) が示すように、BECOME から CAUSE に上昇してきた動詞 V1 (「跑 (走る)」) は、原因項 NP (「马拉松 (マラソン)」) と局所的關係を持つ。そして「跑马拉松 (マラソンを走る)」という表現が成立するように、この場合の動詞 V1 (「跑 (走る)」) と原因項 NP (「马拉松 (マラソン)」) には「動詞・補語」の關係が保たれる。したがって、原因型結果構文として成立するのである。一方、(35b) においても動詞 V1 (「跑 (走る)」) と原因項 NP (「教练 (コーチ)」) は同様の局所的關係を持つ。しかしながら、「*跑教练 (コーチを走る)」という表現は成り立たず、「動詞・補語」の關係が保たれない。そのため (35a) は原因型結果構文の構造からは産出されず、原因型結果構文として非文となる。

また、上述の (23a、b) ((36a) (37a) として再掲) の文法性の違いについても同様に説明することができる。

- (36) a. 烈酒 醉 倒 了 张三。
 強い酒 酔う・倒れる-ASP 張さん
 強い酒が原因で張さんが酔って倒れた。
- b. [CAUSEP 烈酒 CAUSE-醉[BECOMEP BECOME-醉[V2P 张三 <倒了>]]]
 局所的關係
- (37) a. *郁闷的心情 醉 倒 了 张三。
 うっせつした気持ち 酔う・倒れる-ASP 張さん
 (意図する意味：うっせつした気持ちが原因で張さんが酔って倒れた。)
- b. * [CAUSEP 郁闷的心情 CAUSE-醉[BECOMEP BECOME-醉[V2P 张三 <倒了>]]]
 局所的關係

(36a) (37a) は、V1 が経験主の意志によってコントロールできない動詞「酔（酔う）」が用いられる場合である。2.3.2 節で論じたように、V1 が経験主の意志によってコントロールできる動詞（たとえば「跑（走る）」）である場合に要求される「V NP」の「動詞・補語」の関係と類似し、V1 が経験主の意志によってコントロールできない動詞である場合は、原因項 NP が V1 と「V1 于 NP (NP に V1)」の「動詞・補語」の関係を持つことが要求される。そこで、(36a) (37a) の文法性の違いについても (34a) (35a) の対照と同様に説明することができる。

(36b) が示すように、BECOME から CAUSE に上昇してきた動詞 V1（「酔（酔う）」）は原因項 NP（「烈酒（強い酒）」）と局所的関係をなす。そして「酔于烈酒（強い酒に酔う）」という表現が成立するように、この場合の動詞 V1（「酔（酔う）」）と原因項 NP（「烈酒（強い酒）」）には「動詞・補語」の関係が保たれる。したがって、原因型結果構文として成立する。一方、(37b) においても、BECOME と併合した V1 が CAUSE に上昇する。すると、動詞 V1（「酔（酔う）」）と原因項 NP（「郁闷的心情（うっせつした気持ち）」）も局所的関係を持つ。しかしながら、「*酔于郁闷的心情（うっせつした気持ちに酔う）」という表現が成り立たないように、「動詞・補語」の関係は保たれない。そのため (37a) は原因型結果構文の構造からは産出されず、原因型結果構文として非文となるのである。

以下、ここで提案する構造は理論的にも経験的にも支持されることを述べる。

まず、軽動詞理論では、音形を持たない軽動詞（空動詞、またはゼロ動詞とも呼ばれる）は文中で音韻形態的に独立して存在することができず、動詞の移動を引き起こし、音声化する必要があるとされている。そこで、原因型結果構文の構造にある軽動詞 CAUSE が何も併合されない pure CAUSE であるという主張は、軽動詞理論に従って考えると望ましくない仮説だといわざるを得ない。音形を持たない軽動詞 CAUSE は音声化する必要があるのである。したがって、BECOME と併合した V1 がさらに CAUSE に移動して併合するというプロセスは、軽動詞の音声化による自然な操作であると考えられる。

ところが、軽動詞の音声化要求の仮説に従って考えれば、BECOME と併合した V1 がさらに CAUSE に上昇していくとするなら、音韻形態を持たない軽動詞 CAUSE の音声化は実現されるが、今度は BECOME の音声化が問題として問われるかもしれない。また、上で提案した (29b) のような受動型の自動詞型結果構文の構造において動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合しないという分析にも問題があるように見られる。ここでは、動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合するか否かに関わらず、V2P にある結果述語 V2 (R) は動詞 V1 と複合し「VR」構造になるためには、軽動詞 BECOME と併合するということを指摘して

おく。軽動詞 BECOME が結果述語 V2 によって音声化されるということは次のような事実によっても支持される。

中国語の結果構文において、結果述語 V2 になるものは、動詞であれば、変化を表す非対格動詞¹²に限られる（朱 1982: 126、沈 1993: 14 など）。たとえば、「走」という動詞は、「歩く」という活動的な意味もあれば、「離れる」という非対格的な意味もある。しかし、(38) が示すように、結果述語 V2 に生起した場合は、「離れる」のような非対格的な読みだけを持ち、「歩く」という活動的な意味はない。

(38) 妹妹 哭 走 了 客人。

妹 泣く-離れる-ASP 客

妹が泣いて、客が離れた。

変化を表す非対格動詞のほか、結果述語 V2 になるものは、ほとんどが形容詞である（朱 1982）。しかし、形容詞といっても、すべての形容詞が結果述語 V2 になるわけではない。張（1995）は、「+/-static」の意味特徴により、形容詞を、変化の意味が語彙的に含意される「動態形容詞」と、変化の意味を持たず、恒常な状態を表す「静態形容詞」の二種類に大別することができるとしている。以下の例が示すように、変化の意味が含まれる「動態形容詞」はアスペクトの「了」と共起することができるのに対し、恒常な状態を表す「静態形容詞」はアスペクトの「了」と共起することはできない（張 1995、2006）。

(39) a. 墙壁 白 了。

壁 白い-ASP

壁が白くなった。

b. *墙壁 雪白 了。

壁 真っ白-ASP

（意図する意味：壁が真っ白になった。）

「白（白い）」と「雪白（真っ白）」は一見大した意味の違いがないように思われるが、「雪白（真っ白）」は事物の恒常な静的状態を表す静態形容詞であるのに対し、「白（白

¹² VR 構造の結果述語 V2 としてよく見られる動詞は主として次のようなものが挙げられる。「走（離れる）、跑（逃げていく）、動（動く）、倒（倒れる）、翻（ひっくり返る）、病（病気になる）、死（死ぬ）、見（見える）、懂（分かる）、成（なる）、完（終わる）、通（通る）、穿（突き抜ける）、透（-し尽くす）」（朱 1982: 126）。

い)」は事物のダイナミックな状態変化を表す動体形容詞である(張 2006)。そして、結果述語 V2 になるのは(40a)が示すように「動態形容詞」のほうだけであり、(40b)のように「静態形容詞」が用いられると許容されない非文となる。

(40) a. 张三 涂 白 了 墙壁。

張さん 塗る・白い・ASP 壁

張さんは壁を白く塗った。

b. *张三 涂 雪白 了 墙壁。

張さん 塗る・真っ白・ASP 壁

(意図する意味：張さんは壁を真っ白に塗った。)

結果述語 V2 に生起する動詞や形容詞には、なぜこのように「変化」の意味が含まれなければならないだろうか。結果述語が BECOME と併合するということを考えれば、変化の意味が語彙的に含意されない形容詞は BECOME と性質的に整合性がないため、結果述語になることができないと考えられる。したがって、原因型結果構文において、BECOME と併合した V1 が CAUSE に上昇していったとしても、また、上述(29a)のタイプの自動詞型結果構文において、V1 が BECOME と併合していなくとも、結果述語 V2 が BECOME と併合するため、BECOME の音声化要求には違反していないと言える。

次に、ここで提案する原因型結果構文の形成と構造を支持する経験的事実として、音形を持つ軽動詞「使」構文との対照が挙げられる。もし BECOME と併合した V1 が CAUSE に上昇しないとすれば、音声化された「使」が pure CAUSE の音声実現として挿入される。すでに提示したように、pure CAUSE の「使」構文では、原因項 NP は動詞 V1 と文法的関係を持つ必要はない。このことは原因型結果構文と対照的である。

(41) a. 马拉松 使 张三 跑 累 了。 = (13a)

マラソン 使 張さん 走る・疲れる・ASP

マラソンが原因で張さんは走って疲れた。

b. 教练 使 张三 跑 累 了。 = (13b)

コーチ 使 張さん 走る・疲れる・ASP

コーチが原因で張さんは走って疲れた。

c. [CAUSEP 马拉松 / 教练 CAUSE (使)

[BECOME_P BECOME・跑 [V_{2P} 张三 <累了>]]]

(42) a. 烈酒 使 张三 醉 倒 了。 = (14a)

強い酒 使 張さん 酔う・倒れる-ASP

強い酒が原因で張さんは酔って倒れた。

b. 郁闷的心情 使 张三 醉 倒 了。 = (14b)

うっせつした気持ち 使 張さん 酔う・倒れる-ASP

うっせつした気持ちが原因で張さんは酔って倒れた。

c. [CAUSEP 烈酒 / 郁闷的心情 CAUSE (使)

[BECOME_P BECOME-酔 [V_{2P} 张三 <倒了>]]]

上で述べたように、原因型結果構文では動詞 V1 が原因項と局所的関係を持つため、原因項 NP は動詞 V1 によって制限される。(35a) (37a) では「*跑教练 (コーチを走る)」、 「*醉于郁闷的心情 (うっせつした気持ちに酔う)」という表現が成り立たないため、(35a) (37a) は原因型結果構文として非文となる。それに対し、(41c) (42c) が示すように pure CAUSE の「使」構文では、原因項となる NP は動詞 V1 と局所的な関係を持たない。そのため、動詞 V1 による制限はない。そこで、(35a) (37a) の原因型結果構文の主語となれない「教练 (コーチ)」「郁闷的心情 (うっせつした気持ち)」といった名詞句も、(41b) (42b) が示すように pure CAUSE の「使」構文の主語になることができる。

さらに、ここでの分析は、上で提案した受動型の自動詞型結果構文の構造からも傍証が得られる。受動型の自動詞型結果構文では動詞 V1 が CAUSE と併合する。この点は原因型結果構文の構造と共通する。しかし、受動型の自動詞型結果構文 (たとえば (29a)) では動詞 V1 は BECOME と併合せずに、最初から CAUSE と併合するとの分析を本稿は提案する。もしこの分析が正しいとするなら、受動型の自動詞型結果構文には pure CAUSE を表す「使」を導入することができないことになる。

(43) (张三／这把铁锤) *使 玻璃杯 打 破 了。

(張さん／この金槌) 使 グラス 叩く・割れる-ASP

(43) が示すように受動型の自動詞型結果構文が「使」構文の補語になることができないという事実は、王 (2001: 68) でも指摘されている。

以上、本節では軽動詞併合分析を応用し、中国語結果構文の形成と構造について分析を行った。自動詞型結果構文は、動詞 V1 が軽動詞 BECOME と CAUSE のいずれかと併合するかによって二種類の異なる構造をなすと分析した。原因型結果構文に関しては、軽動

詞 BECOME と併合した V1 がさらに CAUSE に上昇するというプロセスを仮定した。本章で提案した構造分析は、先行研究の考察で問題となってきた言語事実を自然に説明することができる。そして理論的にも経験的にも支持されることを示した。

2.5 まとめ

本章は自動詞型結果構文と原因型結果構文を中心にそれぞれの形成と構造について軽動詞併合の観点から分析を進めた。自動詞型結果構文は二種類に分かれる。そして再帰構造を持つ自動詞型結果構文のみから原因型結果構文が成り立つという石村（2011）で観察された言語事実に加え、本章はさらに、原因型結果構文の原因項となる名詞句 NP が動詞 V1 によって制限されるということを明らかにした。これらの言語事実を踏まえて、本章は Huang（2006）が主張する軽動詞併合分析の提案をさらに推し進め、結果構文の主語名詞句 NP と動詞 V1 との意味関係が軽動詞の併合分析に関与することを主張した。自動詞型結果構文については、動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合する非対格構造をなす自動詞型と、動詞 V1 が軽動詞 CAUSE と併合する受動型の自動詞型の二種類の構造を仮定した。さらに、原因型結果構文の成立に関しては、軽動詞 BECOME と併合した動詞 V1 がさらに軽動詞 CAUSE に上昇するというプロセスを仮定した。本章で提案した新たな構造の分析を通して、これまで問題となってきた言語事実を自然に説明することができた。そして、音形を持たない軽動詞は音声化する必要がある、動詞の移動を引き起こすという軽動詞理論の主張と、本章が提案した構造の分析は合致し、理論的に合理的な帰結となった。さらに、音形を持つ pure CAUSE の軽動詞「使」の構文との対照からも本章の提案が経験的にも支持されることを示した。

次章の第 3 章と第 4 章では本章で考察した自動詞型結果構文と原因型結果構文の構造構築を踏まえ、他動詞型結果構文の形成と構造について議論を行う。

第3章 非対格の他動詞型結果構文と所有者上昇

3.1 はじめに

中国語の結果構文の研究では、第2章で考察した自動詞型結果構文と原因型結果構文の他に、以下の例が示すような文の表層に主語、目的語の二項が現れる結果構文が他動詞型結果構文として研究されてきた (Cheng & Huang 1994, Sybesma 1999¹、王 2001、Huang 2006、石村 2011 など)。

- (1) a. 张三 打 哭 了 李四。
張さん 殴る・泣く・ASP 李さん
張さんは李さんを殴って泣かせた。
- b. 张三 跑 酸 了 腿。
張さん 走る・棒になる・ASP 足
張さんは走って足が棒になった。

そして、他動詞型結果構文の構造については、これまでの先行研究は軽動詞 (CAUSE または CAUSE にあたる *v*) のみによって外項 (原因項)² が導入される構造であると分析している (Sybesma 1999、王 2001、Lin 2004、Huang 2006、沈 2013 など)。もし他動詞型結果構文がすべて同一の構造であるとするなら、文法上の振る舞いに関しても同じであると予測される。しかし、たとえば受動化に関しては、以下 (2) が示すように、(1a、b) のような他動詞型結果構文は振る舞いが異なる。

- (2) a. 李四 被 张三 打 哭 了。
李さん 受身マーカー 張さん 殴る・泣く・ASP
李さんは張さんに殴られて泣いた。
- b. * (张三的) 腿 被 张三 跑 酸 了。
(張さんの) 足 受身マーカー 張さん 走る・棒になる・ASP

¹ Sybesma (1999) など一連の研究では、文の表層に二項が現れる結果構文が他動詞型か原因型かを問わず一律に CAUSE 型 (Sybesma らの研究では「CAUS」) とされている。本研究は他動詞型と原因型を構造上区別すべきとの立場を取る。このことに関しては第4章において詳述する。ここで言及する二項を持つ他動詞型結果構文は原因型結果構文以外のものを指す。

² 軽動詞理論で扱われる「外項」とは、動詞句 VP 内にある「内項」と異なり、動詞句 VP の外にあり、動詞 V から直接意味役割を与えられず、軽動詞 *v* によって意味役割 (external θ -role) が与えられる項を指す (Hale and Keyser 1993、Nishiyama 1998 など)。

(意図する意味: (張さんの) 足は張さんに走られて棒になった。)

(2) が示すように、(1a) のような他動詞型結果構文からは受身文 (2a) が成立するが、(1b) のような他動詞型結果構文からは受身文 (2b) は成立しない。一律に他動詞型とされてきている結果構文がこのように受身文の成立で異なるのはなぜか、また他動詞型結果構文は本当に一律なものなのか、といった問題が議論すべき課題となる。

本章と次章の第 4 章では、これまで一括されてきた他動詞型結果構文は一律の構造をなすのではなく、(1a)、(1b) のような他動詞型結果構文は構造的に異なるものとして区別すべきだと主張する。本章は上述 (1b) のような受身文が成立しないタイプの他動詞型結果構文を、次章の第 4 章では (1a) のような受身文が成立する他動詞型結果構文をそれぞれ取り上げ、構造分析を行う。

本章の構成は以下の通りである。まず、3.2 節で、他動詞型結果構文を一律の構造と分析する先行研究の代表として Sybesma (1999)、Huang (2006) を概観する。そして、彼らの一律の構造分析は (1b) のような受身文が成立しないタイプの他動詞型結果構文が存在するため、適切ではないことを示す。3.3 節では、受身文が成立しない (1b) タイプの他動詞型結果構文について具体的に構造分析を行う。このタイプの他動詞型結果構文は、動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合する非対格の構造をなし、所有者が目的語の所有格の位置から主語位置に上昇して派生される「非対格の他動詞型結果構文」であることを論じる。³ 3.4 節では、中国語非対格の他動詞文の形成に関する研究を再検討し、本研究が採用する「所有者上昇」の分析が有効であることを示す。3.5 節では、「部分格」の付与について議論を行い、中国語非対格の他動詞文の目的語位置名詞句が部分格を付与されることを検証する。3.6 節は本章のまとめである。

3.2 CAUSE 型とされてきた他動詞型結果構文の構造分析

Sybesma (1999)、Huang (2006) に代表される軽動詞を用いた他動詞型結果構文の分析は、(1b) のような受身文が成立しないタイプの他動詞型結果構文の分析には適切ではないことを本節は示す。

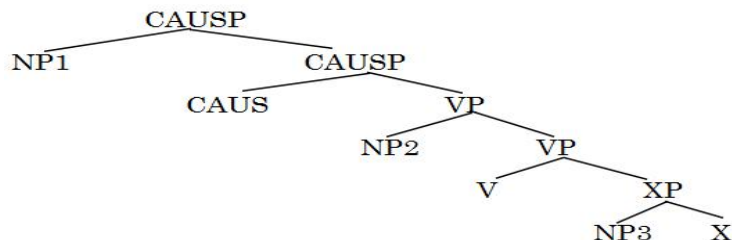
Sybesma (1999) をはじめ、Sybesma・沈 (2006)、沈・司马翎 (2010)、沈・Sybesma (2012) などの一連の研究は、小節 (Small Clause、以下 SC) ⁴ 分析を採用している。そ

³ 本章で扱う「非対格の他動詞型結果構文」や「非対格の他動詞文」とは、非対格動詞 (構造) が表層に二項を取るあたかも他動詞文のように振る舞う構文を指し、「表層二項文」とも呼ばれる。詳しい議論は 3.3 節以後で行う。

⁴ Sybesma (1999: 180) の樹形図では (3) のように XP と標示されている。

して、二項を持つ結果構文を、CAUSE 型 (Sybesma (1999) では「CAUS」と表記されている) として、次のような構造を示している。

(3) CAUSE 型の構造

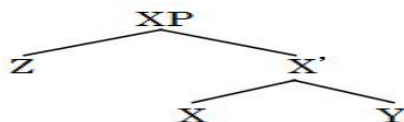


(Sybesma 1999: 180)

(3)では NP1 は構造上、V から直接意味役割が与えられる関係になっておらず、⁵ CAUSE によってのみ意味役割が付与される原因項 (Causer) とされている。中国語では軽動詞 CAUSE が「把」によって音声化される場合は、NP3 が NP2 に移動する。⁶ そこで、NP2 と NP3 は名詞移動によって関係づけられ、NP3 は NP2 の trace とされる。

また、軽動詞併合の分析を採用している Huang (2006) は、他動詞型結果構文では V1 が軽動詞 CAUSE の様態付加詞として併合すると分析している。Huang (2006) が提案する他動詞型結果構文の構造は次のように示すことができる。⁷

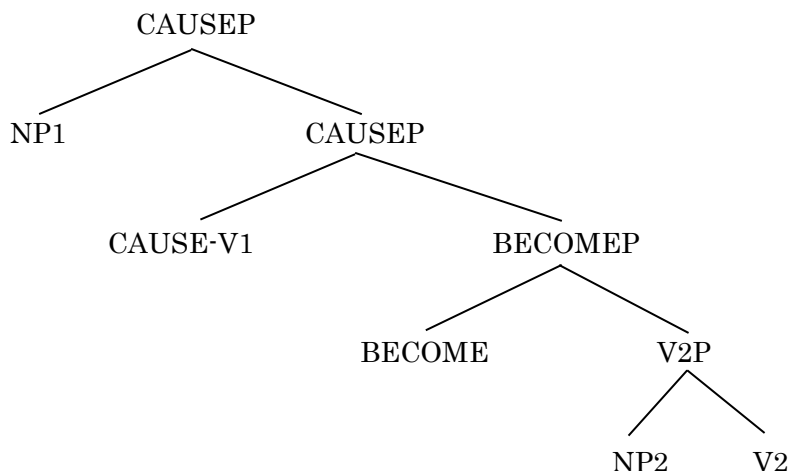
⁵ この議論は θ 理論の規定を前提にするものである。 θ 理論では、意味役割を付与する要素とその意味役割を受け取る要素の間の構造上の関係は局所的 (local) 関係に限定される (中村・金子・菊地 2001: 78)。樹形図に基づき説明すると、次のようになる。以下の樹形図で、主要部 X (V など) によって意味役割付与が行われるのは、主要部 X と局所的関係にある要素、すなわち、主要部 X と姉妹関係にある位置—Y 位置と、主要部 X の指定部である Z 位置の要素に限られる。



⁶ Sybesma (1999) では「把」が軽動詞 CAUSE の音声化だとされているが、この観点に関して疑問を示す事実が存在することはすでに Huang ほか (2009) などで指摘されている。本研究第 2 章で論じたように中国語では軽動詞 CAUSE の音声化は「使」とみなすことができる。本研究では「把」に関する議論には立ち入らないことにする。詳しくは Huang ほか (2009) の第 5 章を参照されたい。

⁷ Huang (2006: 27) では [x CAUSE<UNERGATIVE> [BECOME [y <STATE>]]]と表記されている。本章の議論に影響を与えないため、V1 が非能格動詞か非対格動詞かを区別しないことにする。V1 の性質と構造の関係に関しては第 4 章において詳述する。

(4) 他動詞型結果構文の構造



このように Sybesma (1999) などの一連の研究や Huang (2006) はそれぞれ分析のしかたが異なるが、他動詞型結果構文の主語が軽動詞 CAUSE によって導入される原因項であるという主張は共通している。⁸ しかしながら、他動詞型結果構文の構造を一律に CAUSE 型とする分析には次のように解決すべき問題がある。

まず、一つ目は受身文の成立に見られる異なる振る舞いの問題である。すでに冒頭でも述べたように、項を二つ持つ結果構文が、一律に CAUSE によって原因項（外項）が導入される他動詞型構造であるとするなら、同様の統語的振る舞いを示すことが予想される。そして、外項を持つ構造からは受身文が成立可能であるとされている（L & RH 1995、影山 2002）。さらに、中国語では受身文の成立要件として限界性を表す表現（結果表現または量的限定）の付加が要求されることが一般的に指摘されている（木村 1981、2000、2004 など）。結果構文は結果表現が含まれるため、中国語受身文の成立に関する意味的制約を満たしている。したがって、これまでの先行研究の構造分析に基づいて考えるなら、他動詞型結果構文からは一律に受身文が成立すると予測される。しかし、事実は予測に反して（1a）（（5a）として再掲）のような他動詞型結果構文からは（5b）のように受身文が成立するが、（1b）（（6a）として再掲）の他動詞型結果構文からは（6b）が示すように受身文は産出されない。（5a）（6a）の構造を Huang (2006) の構造分析に従って示す。

- (5) a. 张三 打 哭 了 李四。
 張さん 殴る・泣く・ASP 李さん
 張さんは李さんを殴って泣かせた。

⁸ この点については第 4 章（4.2.2 節）においてさらに詳述する。

[CAUSEP 张三 [CAUSEP CAUSE-打 [BECOMEP BECOME [V2P 李四 哭了]]]]

b. 李四 被 张三 打 哭 了。

李さん 受身マーカー 張さん 殴る・泣く・ASP

李さんは張さんに殴られて泣いた。

(6) a. 张三 跑 酸 了 腿。

張さん 走る・棒になる・ASP 足

張さんは走って足が棒になった。

[CAUSEP 张三 [CAUSEP CAUSE-跑 [BECOMEP BECOME [V2P 腿 酸了]]]]

b. * (张三的) 腿 被 张三 跑 酸 了。

(張さんの) 足 受身マーカー 張さん 走る・棒になる・ASP

(意図する意味: (張さんの) 足は張さんに走られて棒になった。)

二つ目の問題は、(1b) タイプの他動詞型結果構文における主語名詞句と目的語名詞句の間の意味関係の制限の問題である。受身文が成立する (1a) (=5a) タイプの他動詞型結果構文と、受身文が成立しない (1b) (=6a) タイプの他動詞型結果構文では、主語名詞句と目的語名詞句の間の意味関係において違いが見られる。

(7) * 张三 跑 酸 了 李四的腿。

張さん 走る・棒になる・ASP 李さんの足

(意図する意味: 張さんが走って李さんの足が棒になった。)

受身文が成立する (1a) タイプの他動詞型結果構文では、主語名詞句 (「张三 (張さん)」) と目的語名詞句 (「李四 (李さん)」) との間には特別な意味関係は要求されない。一方、(1b) タイプの他動詞型結果構文では、(7) が示すように主語名詞句と目的語名詞句の間に「人とその人の身体部分」のような「譲渡不可能所有」の関係が要求される。⁹ 他動詞型

⁹ この関係は (i) のような中国語の状態変化を表す非対格動詞の他動詞文にも観察されている (楊 1999)。

(i) a. 张三 瞎 了 眼。

張さん 失明する・ASP 目

張さんは目が失明した。

b. *张三 瞎 了 李四的眼。

張さん 失明する・ASP 李さんの目

*張さんは李さんの目が失明した。

(ia) では状態変化を表す非対格動詞「瞎 (失明する)」が用いられており、目的語位置に名詞句が現れ、一見他動詞文のように見える。(ib) が非文となるように、このような文では主語名詞句と目的語位置の

を一律な構造と分析する Sybesma (1999) や Huang (2006) ではいずれもこの現象に関しては言及されていない。

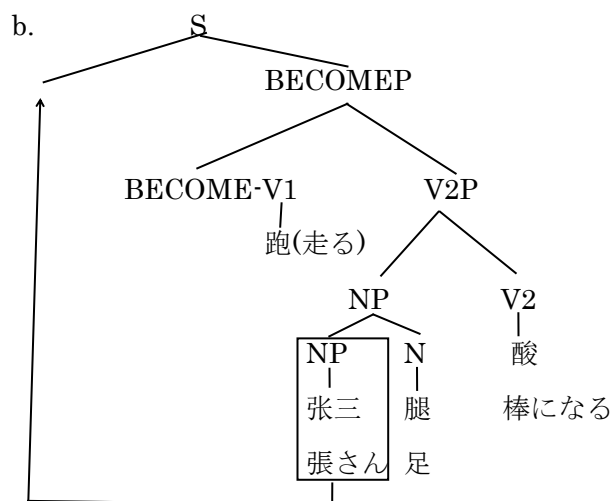
以上、受身文の成立、主語名詞句と目的語位置の名詞句の間の意味関係の制限という 2 点から、これまで CAUSE 型とされてきた他動詞型結果構文の構造分析上の問題点を指摘した。次の 3.3 節では、この節での考察を踏まえ、受身文が成立しない (1b) のタイプの他動詞型結果構文は軽動詞 CAUSE を含まず、動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合する非対格の構造をなすと主張する。さらに、所有者が目的語の所有格の位置から主語位置に上昇して派生される非対格の他動詞型結果構文であることを示す。

3.3 非対格の他動詞型結果構文の構造構築と所有者上昇

この節では、これまでの先行研究で議論されてこなかった、受身文が成立しない (1b) のような他動詞型結果構文の構造構築に関して分析を行う。受身文が成立しないこのタイプの他動詞型結果構文は、上述のように、文の表層には主語と目的語の二項が現れるけれども、主語位置を占める名詞句と、目的語位置を占める名詞句の間に「人とその人の身体部分」のような「譲渡不可能所有」の関係が保たれることが特徴的である。このタイプの他動詞型結果構文は、動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合する非対格の他動詞型結果構文であると本研究は主張する。そして、(8b) が示すように所有者上昇 (Possessor Raising) によって派生されるという構造構築の分析を提案する。そこではアスペクトマーカ「了」の位置を省略し、以下同様に提示することとする。

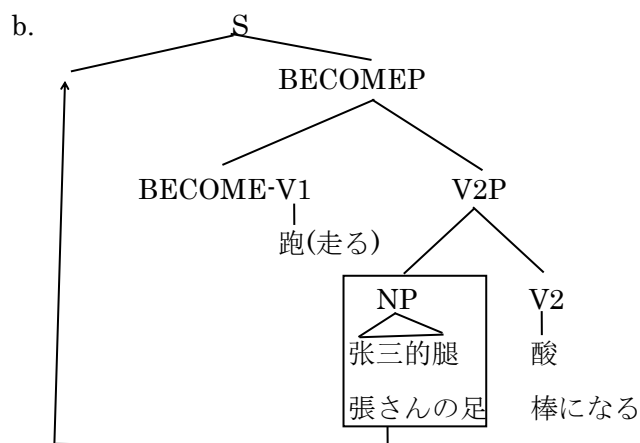
- (8) a. 张三 跑 酸 了 腿。
張さん 走る・棒になる・ASP 足
張さんが走って足が棒になった。

名詞句の間に「人とその人の身体部分」の関係を持たなければならない(楊 1999: 42)。本稿が議論する (1b) タイプの他動詞型結果構文と (ia) のような非対格動詞文との共通性に関しては後述する 3.3 節の議論を通して明らかとなる。



第2章（2.4節）においてすでに議論したように、再帰構造（動詞 V1 の主体と結果述語 R（V2）の主体とが同一、または人とその人の体の部分というような「譲渡不可能所有」の関係）を持つ自動詞型結果構文は、（9b）のように動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合する非対格の構造をなす。

- (9) a. 张三的腿 跑 酸 了。
 張さんの足 走る・棒になる・ASP
 張さんの足が走って棒になった。



（8）に示した主語名詞句と目的語名詞句が「譲渡不可能所有」の関係を持つ（1b）のような他動詞型結果構文も、（9）と同様に非対格の構造をなすと本研究は主張する。（9a）では、所有者と所有物名詞句全体が主語位置に置かれ、文の表層に一項しか現れない、いわゆる自動詞型結果構文として産出されている。一方、（8b）では、所有物名詞句を目的語位置に残し、所有者だけが主語位置に上昇している。そして（8a）は文の表面に主語、

目的語の二項が現れる、いわゆる他動詞型結果構文となっているが、実際には、動詞 V1 が BECOME と併合した非対格の構造を持つ。そのため、本研究はこのタイプの他動詞型結果構文を「非対格の他動詞型結果構文」と呼ぶことにする。

(8b) の構造を仮定することによって、このタイプの他動詞型結果構文において主語名詞句と目的語名詞句の間に「譲渡不可能所有」の関係が生じることは、(9b) と共通した構造から自然に説明することができる(第2章2.4節を参照)。また、(9b) が示す非対格構造に基づき、このタイプの他動詞型結果構文から受身文が成立しないことも自然に説明される。非対格動詞は一般に受身文が成立しないということは多くの言語によって指摘されている(Burzio 1986、L & RH 1995、影山 1996、2002 など)。中国語もその例外ではなく、非対格動詞¹⁰ である「死(死ぬ)」が用いられる(10a) から受身文(10b) は成立しない。

- (10) a. 父亲 死 了。
父 死ぬ-ASP
父が死んだ。
- b. *张三 被 父亲 死 了。
張さん 受身マーカー 父 死ぬ-ASP
(意図する意味: 張さんは父に死なれた。)

したがって、冒頭で挙げた(2b) ((11b) として再掲) のような非対格の他動詞型結果構文から受身文が成立しないということは、(8b) が示す非対格の構造から自然に予測されることになる。

- (11) * (张三的) 腿 被 张三 跑 酸 了。
(張さんの) 足 受身マーカー 張さん 走る-棒になる-ASP
(意図する意味: (張さんの) 足は張さんに走られて棒になった。)

以上のように、このタイプの他動詞型結果構文の主語は、身体部位である対象の項の所有格の位置から分離して主語位置に上昇してきたと分析できる。そして、そうした分析が基本的に正しいことを示す証拠が他にも存在する。

¹⁰ 中国語で非対格動詞と非能格動詞が区別される現象については楊(1999)、Sybesma(1999)、徐(1999、2001)などの研究で述べられている。中国語の非対格動詞については3.5節において詳述する。

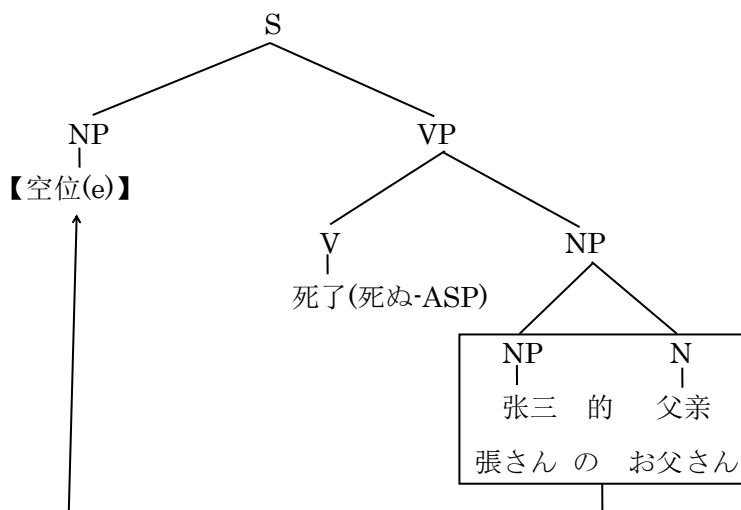
たとえば、(12b) が示すように中国語には非対格動詞が他動詞型構文に用いられる現象がある。この現象について徐 (1999、2001、2005、2008) は所有者上昇の分析を提案している。

- (12) a. 张三的父亲 死 了。
 張さんのお父さん 死ぬ-ASP
 張さんのお父さんが死んだ。
- b. 张三 死 了 父亲。
 張さん 死ぬ-ASP お父さん
 張さんはお父さんが死んだ。

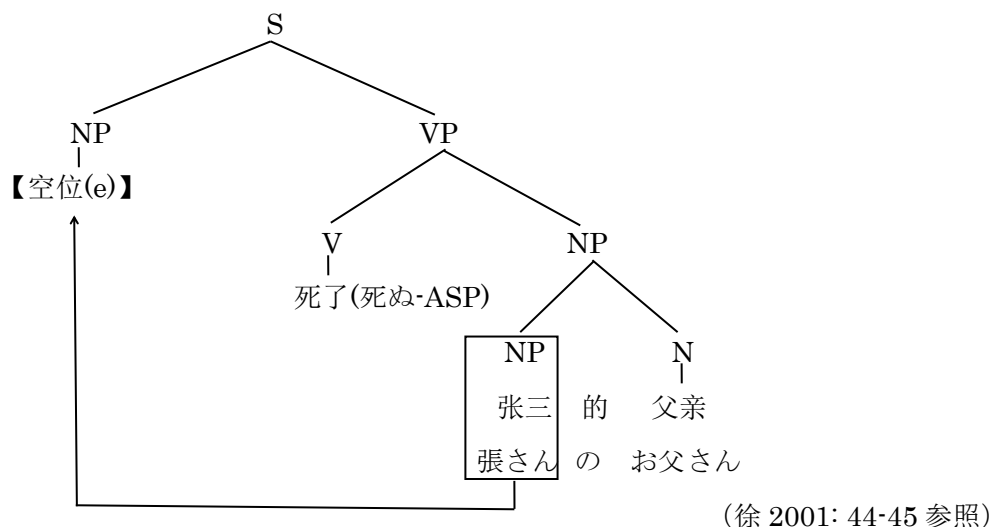
(徐 1999: 19)

「死 (死ぬ)」は非対格動詞である (楊 1999、Sybesma 1999、徐 2001 など)。しかし、(12a) のように自動詞型構文の他、(12b) のように文の表面に主語、目的語の二項が現れる他動詞型構文にもこの動詞が用いられることがある。(12b) が示すような現象について、徐 (1999、2001、2005、2008) は所有者上昇の分析を提案している。(12a、b) はともに非対格の構造であるが、文が派生される際に、(13a、b) が示すように主語位置に移動する名詞句が所有物名詞句全体か、所有者だけかという違いが両者にある。そのため、文の表面では自動詞文か他動詞文として現れると分析している。

- (13) a. 非対格の自動詞文



b. 非対格の他動詞文



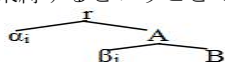
さらに、所有者上昇の分析を支持する証拠として、徐の研究では、適正束縛条件 (Proper Binding Condition、以下 PBC) に基づいた検証が行われている。すなわち、所有者上昇の分析が正しいとするなら、(12b) の目的語位置の名詞句の内部には (14) が示すように、所有者が移動した痕跡 (またはコピー) (trace、以下 t_i) が残されるはずである。そして主語位置に上昇した所有者はその痕跡の先行詞となる。痕跡 (t_i) と主語名詞句の右下に「i」を標示し、両者が同一であることを示す。

- (14) 张三_i 死 了 t_i 父亲。
 張さん 死ぬ-ASP t_i お父さん
 張さんはお父さんが死んだ。

PBC¹¹ によれば、痕跡は派生のどの段階においてもその先行詞によって束縛されなければならない (Chomsky 1981 など)。¹² 言い換えれば、痕跡はその先行詞を束縛する位置に行ってはいけないということである。ここの議論に関して言うと、もし目的語名詞句内に主語名詞句の痕跡が存在しない普通の「主語－動詞－目的語」の構造であれば、中

¹¹ この条件は Fiengo (1977) によって最初に提案されている。

¹² α が β を支配 (domination) せず、 α を支配するすべての r が β を支配する場合、 α は β を C-command (C 統御) するという (Chomsky 1986)。 α が β を C-command (C 統御) し、 α と β が同一の指標を付与されている場合、 α は β を束縛するという。たとえば、次のような樹形図に示されている α と β の位置関係について言えば、 α が β を C-command (C 統御) している。そして α と β が同一の指標「i」を付与されているため、 α は β を束縛するということである。



国語では、目的語位置の名詞句を主語の前（左側）に移動することが可能となる（徐 2001: 47）。

(15) a. 张三 吃 了 那块蛋糕。

張さん 食べる-ASP あのケーキ

張さんはあのケーキを食べた。

b. 那块蛋糕_i 张三 吃 了 _{t_i}。

あのケーキ 張さん 食べる-ASP

あのケーキは張さんが食べた。

そうすると、(13b) が示す所有者上昇の分析が正しいとするなら、PBC により、痕跡を含む目的語名詞句は、その痕跡の先行詞である主語名詞句の前に移動してはいけないということが予測される。

(16) * _{t_i} 父亲 张三_i 死 了。

_{t_i} お父さん 張さん_i 死ぬ-ASP

(意図する意味：張さんのお父さんは死んだ。)

(16) では、所有者上昇による痕跡が「父亲（お父さん）」を含む名詞句内に残っている。それが先行詞である「张三（張さん）」により適正に束縛されていないので文法的ではないと徐（1999、2001）は説明している。

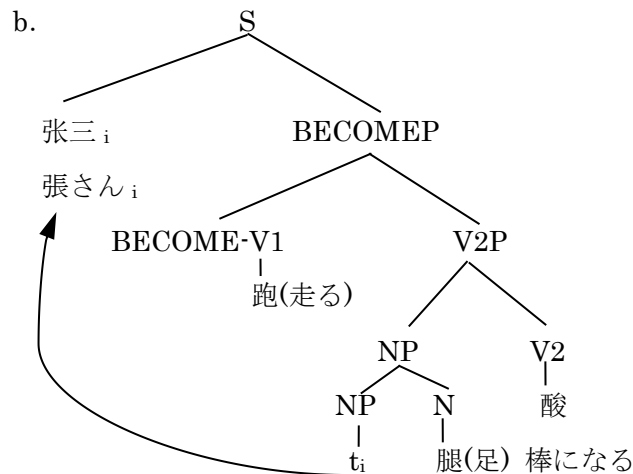
このように、徐の研究は、PBC に基づき、(12b) のような非対格の他動詞文に対する所有者上昇の分析を裏付けている。以下では、徐の分析は、本稿が主張する (8) のような非対格の他動詞型結果構文の分析にも当てはまることを示す。

非対格の他動詞型結果構文が所有者上昇によって派生されたという分析が正しいとするなら、目的語名詞句の内部に主語に上昇した所有者名詞句の痕跡 (t) が残されているはずである。所有者上昇によって残された痕跡 (t) とその先行詞の関係は (17b) の樹形図で示される。

(17) a. 张三_i 跑 酸 了 _{t_i} 腿。

張さん_i 走る-棒になる-ASP _{t_i} 足

張さんが走って足が棒になった。



そして、徐の分析で検証されているように、PBCによって、主語名詞句の痕跡を含む目的語名詞句は主語名詞句の前（左側）に現れることができない。

(18) * t_i 腿 张三_i 跑 酸 了。

t_i 足 張さん_i 走る・棒になる-ASP

（意図する意味：（張さんの）足は張さんが走って棒になった。）

(18) が許容されないことに関しては、徐の分析と同様に説明できる。(18) では、所有者上昇による痕跡が「腿（足）」を含む名詞句内に残っている。それが先行詞である「张三（張さん）」により適正に束縛されていないため、文法的ではないと説明がつく。

さらに、所有者上昇の分析は以下の事実によっても裏付けられる。もし目的語を主語名詞句の左側に持っていくのではなく、主語名詞句によって適切に統率される位置に置けば、文法的な文となると予測される。

(19) 张三_i t_i 腿 跑 酸 了。

張さん_i t_i 足 走る・棒になる-ASP

張さんは足が走って棒になった。

非文法的である(18)と対照的に、(19)は自然な文である。この文法性の違いは所有者上昇により残された痕跡がその先行詞によって適正に束縛されているか否かによると考えられる。(19)では一見主語名詞句は所有格の標示「的（の）」が省略された「张三腿（張さんの足）」と解釈することも可能なように見える。もしそうだとすると、(19)

には上述した (9a) と同様に所有者上昇のプロセスがない。そのため、(19) が文法的な文であることも、所有者上昇を支持する証拠とはならないことになる。しかし、(19) は (9a) と異なる構造であることを示す証拠が存在する。以下の例を見てみよう。

(19') 张三_i 昨天 t_i 腿 跑 酸 了。

張さん_i 昨日 t_i 足 走る・棒になる-ASP

張さんは昨日足が走って棒になった。

(9') a. * 张三 昨天 的 腿 跑 酸 了

張さん 昨日 の 足 走る・棒になる-ASP

(意図する意味: 張さんの足は昨日走って棒になった。)

b. * 张三的 昨天 腿 跑 酸 了。

張さんの 昨日 足 走る・棒になる-ASP

(意図する意味: 張さんの足は昨日走って棒になった。)

c. 张三的腿 昨天 跑 酸 了。

張さんの足 昨日 走る・棒になる-ASP

張さんの足は昨日走って棒になった。

所有者と所有物が一つの名詞句「张三的腿 (張さんの足)」となっている場合は、(9'a、b) が示すように、その間に「昨天 (昨日)」などの副詞要素を入れることはできない。その場合、(9'c) のように表現する必要がある。それに対し、(19') が示すように、「张三 (張さん)」と「腿 (足)」の間には時間副詞などの要素の生起が許容される。このことから、(19) の「张三 腿 (張さん 足)」は所有格の標示「的 (の)」が省略された名詞句ではないと言える。非文法的である (18) と対照的に、(19) では目的語「腿 (足)」の前にある痕跡がその先行詞「张三 (張さん)」によって適正に束縛されているので、この文は自然な文となると考えられる。¹³

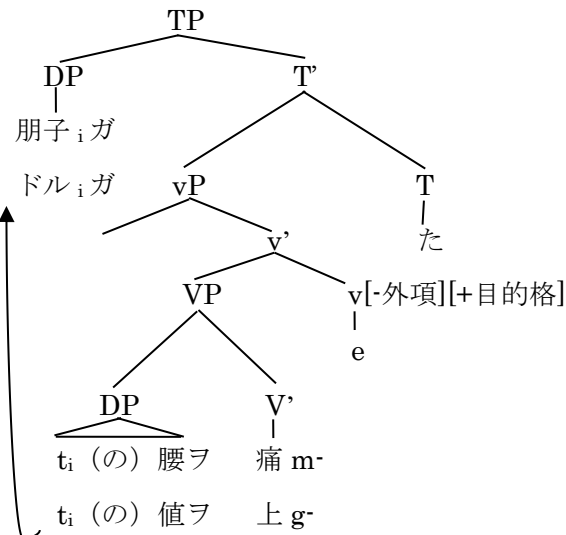
所有者上昇という構造構築に関しては、日本語の研究にも同様な議論が見られる。長谷川 (1999、2002、2007)、Hasegawa (2004a, b) など一連の研究は以下のような日本語

¹³ 徐の研究で分析されている (14) のような非対格の他動詞文でも同様に、目的語位置の名詞句は主語名詞句によって束縛される位置への移動が可能である。そして、主語名詞句との間に「去年 (去年)」などのような副詞要素の生起が許容される。

(i) 张三_i (去年) t_i 父亲 死 了。
張さん_i (去年) t_i お父さん 死ぬ-ASP
張さん_i は (去年) t_i お父さんが死んだ。

の「非対格の他動詞文」¹⁴ について (20c) が示すように所有者上昇の分析を提案している。

- (20) a. 朋子が腰を痛めた。(朋子の腰が痛んだ。)
 b. ドルが値を上げた。(ドルの値が上がった。)
 c.



(長谷川 2007: 27 参照)

(20a、b) はそれぞれ括弧内に示されている非対格の自動詞文と同様の意味を表す (長谷川 2002、2007)。(20c) は、所有者がその所有物である項の所有格の位置から分離して主語位置に上昇したことを示している (長谷川 1999、2002、2007)。この分析は、上述した中国語の所有者上昇の構文と同様に、所有者がその痕跡を適正に束縛しなければならないという原則によって裏付けられる。

- (21) a. ?*_{ti}腰を 朋子_iが 痛めた。
 b. *_{ti} 値を ドル_iが 上げた。
 c. 顔を 花子が 洗った。(←花子が顔を洗った。)

(21c) に対応する通常の動作主主語の他動詞文では、動作主主語は目的語とは独立に生成されるため、目的語名詞句内には所有者上昇による痕跡はない。(21c) は目的語をかき混ぜ (Scrambling) により文頭へ移動させたと考えることができる。それに対し、所有者

¹⁴ 長谷川 (2002、2007) など一連の研究では「非動作主主語他動詞文」「所有他動詞文」などの用語が使われている。本研究は統一を図るため、上述した中国語の非対格の他動詞文の現象も含め、日本語のこれらの構文を影山 (2002)、杉岡 (2002) に従い、「非対格の他動詞文」と呼ぶことにする。

上昇が関わると分析される(20a、b)に対応する(21a、b)ではかき混ぜは許容されない。この文法性の違いは、かき混ぜされた目的語名詞句内に所有者上昇によって残された痕跡があるか否かによると長谷川の研究は主張している。すなわち、(21a、b)では、所有者上昇の痕跡が「腰」「値」の左側に残っている。それが先行詞である「朋子」「ドル」によって適正に束縛されていないため文法性を欠くと説明されている。このことは、上述した中国語の所有者上昇構文の説明と同様である。

以上、本章で分析する非対格の他動詞型結果構文は、中国語や日本語で観察されている非対格の他動詞文と平行性を持つことを見た。痕跡は派生のどの段階においてもその先行詞によって適正に束縛されなければならないという適正束縛の条件(PBC)に基き、(8)が示すような非対格の他動詞型結果構文は、所有者上昇によって派生されるという本研究の提案が経験的に支持されることを示した。

さて、上述の(12b)のような中国語非対格の他動詞文に関して徐(1999、2001、2005、2008)は所有者上昇分析を提案している。しかし、それに対して先行研究では多くの問題点が指摘されている。次節では、それらの問題点を検討し、本研究が採用する所有者上昇の分析が有効であることを改めて検証する。

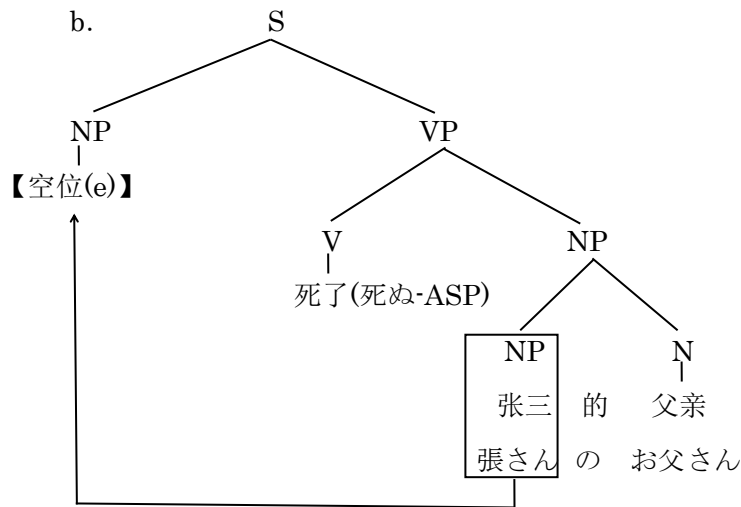
3.4 中国語非対格の他動詞文の形成に関する先行研究の再検討

3.4.1 いわゆる「所有者上昇」分析の問題点

「所有者上昇」分析に関しては、主に以下の二つの面で解決すべき問題が指摘されている。それは、所有格の標示「的(の)」に関わる問題、非対格の他動詞文における格付与の問題(主語名詞句の格重複の問題、目的語位置名詞句の格付与の問題)である。

まず、所有格の標示「的(の)」に関わる問題がある(孫・伍 2003、朱 2005、潘・韩 2005、2008、沈 2006、王 2006、程 2007、杨 2008 など)。たとえば、(12b) ((22a)として再掲)のような非対格の他動詞文に関して、徐(1999、2001)は(13b) ((22b)として再掲)のような派生の構造を提案している。そこでは、所有者名詞句と所有物名詞句の間に所有格の標示「的(の)」が存在する。

- (22) a. 张三 死 了 父亲。
張さん 死ぬ-ASP お父さん
張さんはお父さんが死んだ。



しかし、中国語では、(23) が示すように、所有格の標示「的 (の)」を伴う所有者の移動はできない。

- (23) a. *张三的_i 死 了 t_i父亲。
張さんの_i 死ぬ-ASP t_iお父さん
(意図する意味: 張さんはお父さんが死んだ。)
- b. *张三_i 死 了 t_i的父亲。
張さん_i 死ぬ-ASP t_iのお父さん
(意図する意味: 張さんはお父さんが死んだ。)

したがって、もし (22a) のような非対格の他動詞文が (22b) から所有者上昇によって派生されるとするなら、「的 (の)」はどこに行ったのか、または、なぜ所有者の移動に伴い、所有格の標示「的 (の)」が義務的になくなるのかという問題が生じる。

「的 (の)」の行方の問題に加え、主語位置名詞句に格重複 (Case conflict) の問題が生じると指摘されている (朱 2005、潘・韩 2005、2008 など)。(22b) の構造が示すように、所有者名詞句「张三 (張さん)」は基底構造の位置で所有格を付与されている。もし (22a) のような非対格の他動詞文が所有者上昇によって派生されるとするなら、所有者名詞句「张三 (張さん)」は主語位置に上昇して、主語位置で主格も付与されることになる。そうすると、同一の名詞句が所有格と主格の両方を持つことになり、格の重複の問題が生じると指摘されている。¹⁵

¹⁵ 主語名詞句が二つの格を担う問題と類似して、「所有者上昇」の分析では主語名詞句が複数の θ 役割 (基底では所有者 *possessor*、主語位置では受影者 *affectee*) を担い、 θ 基準に違反する問題があると指摘する

さらに、主語名詞句の格重複の問題に加え、目的語位置名詞句の格付与が問題となる。この問題は「所有者上昇」の分析のみにある問題ではないが、非対格の他動詞文を分析する際に直面する問題である。「所有者上昇」の分析を主張する徐 (1999、2001、2005、2008) の研究は、Belletti (1988) が分析する「部分格 (Partitive Case)」を応用して、非対格の他動詞文の目的語位置名詞句は「部分格」を付与されると主張している。¹⁶ しかし、中国語非対格の他動詞文では、以下 (24) が示すように、目的語位置に「所有的亲人 (すべての親族)」のように強決定詞「所有 (すべて)」を伴う表現、「那颗正中央的门牙 (あの真ん中の前歯)」のような定表現なども現れる。

- (24) a. 张三 死 了 所有的亲人。 (潘・韩 2008: 515)
 張さん 死ぬ-ASP すべての親族
 張さんはすべての親族が死んだ。
- b. 张三 掉 了 那颗正中央的门牙。

研究がある (朱 2005、程 2007)。しかし、ここの批判の前提となる θ 基準それ自体が必ず義務的に守らなければならない原則なのか、疑問が残る。

実際、 θ 位置から θ 位置への移動を主張する研究は少なくない (Bošković 1994、Hornstein 1999 など)。たとえば、Hornstein (1999) は不定詞節について、 θ 位置への移動の分析を主張している。不定詞節の主語位置にある PRO を NP-trace とする。それは不定詞節の主語位置の θ 役割を受けて主節の主語位置に移動し、さらに主動詞から θ 役割を受けると主張している。例えば、「John hopes to leave」の構造構築は [IP John [VP John [hopes [IP John to [VP John leave]]]]] (p.79) のように分析されている。主語 NP (John) の意味役割は leaver と hoper の複合体 (matrix) であり、John λx [x hopes x leave] (p.80) のように示されている。これらの研究に従って考えれば、所有者上昇の分析において主語名詞句が二重の θ 役割 (possessor、affectee) を担うことは必ずしも問題とならない。

さらに、長谷川 (2011) など一連の研究では、「文中に現れる要素は、全てその生起が構造的に保証され、意味ある要素として解釈されなければならない」 (p.98) と主張されている。(所有者分離) 移動について言えば、分離前の「所有者」の意味役割に加え、分離後には、その位置に応じた対応の「意味解釈」や「機能」を受けなければならない (p.99) という。したがって、長谷川 (2011) に従って考えれば、所有者上昇の分析において、主語位置に移動した所有者名詞句が、「所有者 possessor」の意味役割のほか、移動先の主語位置で「受影響者 affectee」として意味解釈されるのは、所有者上昇による自然な結果と考えられる。

¹⁶ 「所有者上昇」の構造構築を主張している他の研究、たとえば韓 (2000)、温・陈 (2001)、陈・肖 (2007) などは目的語名詞句の格付与に関してそれぞれ主張が異なる。たとえば、韓 (2000) は、「格転送 (case transmission)」の分析を提案している。すなわち、所有者が主語位置に移動して主格を付与された後、目的語位置に残された痕跡 (trace) を含む名詞句全体に主格を転送するという分析である。しかし、「格転送」の分析はミニマリスト・プログラムの理論から考えれば理論的に問題があり、経験的にも問題があることが指摘されている (陈・肖 2007: 10 など)。また、格理論において議論を行う徐 (1999、2001)、韩 (2000) と異なり、温・陈 (2001)、陈・肖 (2007) はミニマリスト・プログラムにおいて、素性チェックの観点から所有者上昇を分析している。つまり、温・陈 (2001)、陈・肖 (2007) の分析では、所有者上昇は、目的語位置を占める名詞句の格の問題を解決するためではなく、EPP 素性のチェックによるということである。目的語位置を占める名詞句は、主語名詞句と同様に主格を付与されるとされている。しかし、非対格の他動詞文において目的語位置の名詞句が主語位置の名詞句と同様に主格を付与されるという主張には、何故他の言語において非対格動詞が目的語位置の名詞句に主格を与えないのかという問題、非対格性の仮説と理論的にも整合しないといった問題が生じる。所有者上昇の非対格他動詞型構文における目的語名詞句の格付与の問題に関しては、本研究は徐の研究が主張する「部分格」を支持する立場で議論する。具体的には 3.5 節において詳しく論じる。

張さん 落ちる-ASP あの真ん中の前歯

張さんはあの真ん中の前歯が落ちた。

このことは、Belletti (1988) が分析する「部分格」に観察されている「定性の効果」(Definiteness Effect) と整合しないと見られる。¹⁷ 徐の研究では中国語非対格の他動詞文の目的語位置名詞句に「部分格」の付与を主張しているが、なぜ定性の効果を示さないのかについては説明していない。そのため、先行研究は徐の一連の研究で主張されている「部分格」の付与を批判している(韓 2000、孫・伍 2003、潘・韓 2005、2008、程 2007 など)。

このように、「所有者上昇」の分析には以上のように解決すべき問題が残ると指摘されてきた。次節の議論では、先行研究で指摘されている「所有者上昇」分析の問題点について再検討し、指摘されてきた問題点は、いずれも理論的かつ経験的に説明がつくことを示す。さらに、「所有者上昇」の分析から自然に説明することができるが、これまでの他の提案ではいずれも言及されておらず、うまく説明することができない事実についても、中国語非対格の他動詞文の形成に関する「所有者上昇」の分析が有効であることを改めて主張する。

3.4.2 「所有者上昇」分析が直面する問題点の再検討

この節では上述した、いわゆる「所有者上昇」分析が直面する、「的(の)」の行方の問題と主語名詞句の格重複の問題について議論する。目的語位置名詞句の格付与の問題に関しては、次の 3.5 節において詳しく論じる。

「的(の)」に関して、Huang (1982: 57) は次のように示している。

(25) 「的(の)」挿入

[NP XP N] → 1 的 2

1 2

(25) が示す「的(の)」の挿入の図式で、N の補部となるのは名詞句 NP に限らず、XP であることが示されている。¹⁸ 中国語では、名詞句 NP が主要部名詞 N を修飾し、そ

¹⁷ 「部分格」の付与と「定性の効果」に関しては 3.5 節において詳述する。

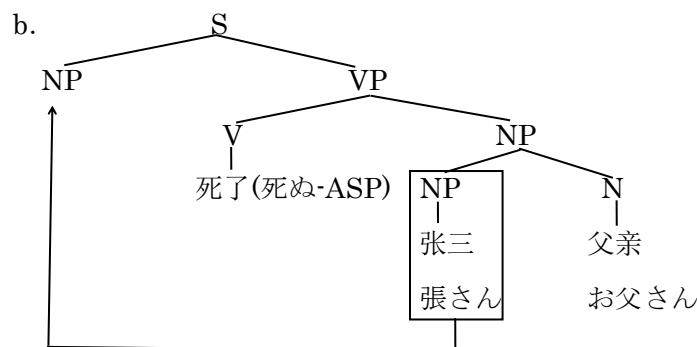
¹⁸ ただし、Huang (1982: 90, 100) でも指摘されたように、中国語では数量詞句 QP が N の修飾語になる場合は、「的(の)」の挿入は許容される場合と許容されない場合がある。このことは、Saito, Lin & Murasugi (2006) が議論するように「的(の)」が占める構造位置と関連すると考えられる。詳しくは Saito, Lin & Murasugi (2006) を参照されたい。

して NP・N の語順で文の表層に現れるには、「的 (の)」挿入によって補部 NP に格が付与される必要があるということを示している。逆に言えば、名詞句[NP NP・N]に「的 (の)」が挿入されなければ、その補部 NP には所有格は付与されない。そうすると、所有者名詞句 NP を主語位置に上昇させる操作は、まさに、[NP NP・N]に「的 (の)」が挿入されていない基底構造において行われることになる。したがって、上述した (22a) ((26a) として再掲) のような非対格の他動詞文は、(22b) の基底構造ではなく、(26b) のような基底構造から所有者上昇によって派生されると考えられる。

(26) a. 张三 死 了 父亲。

張さん 死ぬ-ASP お父さん

張さんはお父さんが死んだ。



(26b) が示す基底構造における名詞句[NP[NP 张三[N 父亲]]]では、所有格の標示「的 (の)」が挿入されていない。そのため、所有者名詞句 NP「张三 (張さん)」は「所有格」を付与されていない。そうすると、所有者名詞句 NP「张三 (張さん)」は主語位置に移動して、主語位置で主格を付与されることになる。このように所有者名詞句 NP「张三 (張さん)」は基底構造においては所有格を付与されていないため、格の重複の問題は生じない。そして、基底構造においてそもそも「的 (的)」が挿入されていないため、先行研究で指摘されてきた「的 (の)」の行方の問題も生じない。なお、この構造で示される名詞句[NP[NP 张三[N 父亲]]]に「的 (の)」を挿入すると、「张三的父亲 (張さんのお父さん)」の語句が生まれる。そこから、自動詞文「张三的父亲死了 (張さんのお父さんが死んだ)」が派生されることになる。

ちなみに、日本語の「の」が中国語の「的 (の)」と共通して修飾要素の後ろに、主要部名詞 N の前に挿入されるということは、Kitagawa & Ross (1982) によって詳しく考察されている。具体的なそれらの使用に当たり、日本語の「の」と中国語の「的 (の)」は

違いも見られるが¹⁹、挿入によって構造に導入されるということは共通であるとされている。日本語における「所有者分離（上昇）」の現象については中国語での議論よりも早く、すでに久野（1973）において「主語化（Subjectivization）」と名付けられた現象で議論されている。そして、長谷川（1999、2002、2007、2011）、Hasegawa（2004a、b）など一連の研究で「所有者分離（上昇）」は構造構築の規則の一つとされ、広く議論が行われている。

このように中国語（や日本語）における所有格の付与に「的（の）」の挿入が関与することを踏まえると、所有者上昇は「的（の）」が挿入されていない基底構造において行われると考えられる。そのことにより、所有者上昇は格の重複の問題や、「的（の）」の行方問題は生じず、十分妥当性の高い操作だと言える。

次節では、(26a)のような非対格の他動詞文が「所有者上昇」という移動操作によって派生されることを支持する事実を挙げ、「所有者上昇」分析の妥当性をさらに裏付ける。

3.4.3 「所有者上昇」と「下接の条件」

この節では、非対格の他動詞文が「所有者上昇」によって生成されることを裏付ける事実を提示する。以下の例を見てみよう。

- (27) a. 张三 死 了 岳父。
張さん 死ぬ-ASP 岳父
張さんは岳父（＝妻のお父さん）が死んだ。
- b. *张三 死 了 妻子的父亲。
張さん 死ぬ-ASP 妻のお父さん
（意図する意味：張さんは妻のお父さんが死んだ。）

(27a) は (26a) と同様に自然に成立するが、(27a) と同じ意味を表す (27b) は許容されない。なぜ (27a、b) のような文法性の違いが生じるのだろうか。

中国語非対格の他動詞文の形成に関して、「所有者上昇」分析の以外に、多くの提案がなされている。たとえば、非対格の他動詞文の主語名詞句の生成に限って言えば、朱（2005）、王（2006）は、軽動詞（EXP(erience)、または APPL(icative)）によって導入される項だと

¹⁹ 日本語の「の」と中国語の「的（の）」は具体的な使用に違いとして、たとえば、中国語では XP が文である場合にも「的」が挿入されるが、日本語では XP が文である場合には「の」は挿入されないということが挙げられる。

主張している。一方、潘・韩（2005、2008）、杨（2008）などは、基底生成の主題だと主張する。そして、马・章（2010）、马（2013）は非対格動詞の指定部から文頭に移動して形成した主題と主語の合体だと分析している。それらの提案はそれぞれ異なるものの、非対格の他動詞文において、主語名詞句と目的語名詞句とが基底構造では一つの構成素をなしていないという点で共通する。非対格の他動詞文において、文頭（主語）名詞句と目的語位置名詞句の間に読み取れる所有関係は、いずれも意味的制限（条件）によって保証されるとしている。もしそうだとするなら、（27a、b）において、主語名詞句と目的語位置名詞句の間に読み取れる意味関係は全く同様であるため、両文は同じく成立すると予測される。しかし、事実は（27a）が成立するのに対し、（27b）は非文となる。

一方、「所有者上昇」の分析では（26b）が示すように、主語名詞句と目的語名詞句は基底では一つの構成素をなしていることが示されている。非対格の他動詞文において主語名詞句と目的語名詞句が基底構造で一つの構成素をなすという点を踏まえて考えると、（27a、b）の文法性の違いは「所有者上昇」の分析にとっては問題ではなく、むしろそれを支持する一つの論拠となる。次の議論ではこのことを具体的に示す。

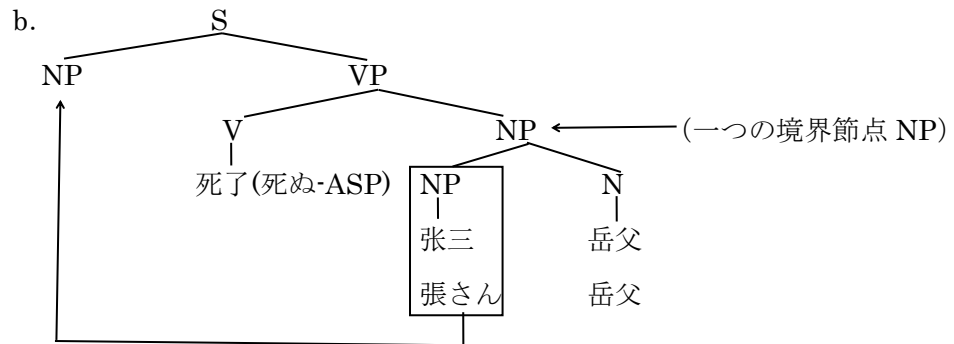
すでに徐（2008）でも指摘されているように、「所有者上昇」は移動操作であるため、移動に対する制約によって制限されることが考えられる。移動に対する制約として、「下接の条件（Subjacency Condition）」（Chomsky 1981、1986 など）が挙げられる。²⁰ 下接の条件とは、いかなる構成素も、一度の移動によって二つ以上の境界節点（bounding node）を超えて移動してはならないという制限である。境界節点となるのは、言語によって違いが見られるが、名詞句 NP は普遍的に境界節点となる。

したがって、非対格の他動詞文が「所有者上昇」という移動操作によって派生されるとするなら、非対格の他動詞文の派生は、「下接の条件」によって制限されることが考えられる。「下接の条件」を踏まえて考えると、（27a、b）が示す文法性の違いはまさに「所有者上昇」の分析を支持する証拠となる。（27a、b）（（28a）（29a）として再掲）の文法性の違いは、それぞれ（28b）（29b）が示す構造によって明らかとなる。

- (28) a. 张三 死 了 岳父。
 張さん 死ぬ・ASP 岳父

²⁰ 「所有者上昇」分析の問題点として、所有者上昇の操作が生成文法の理論で規定されている移動の条件（左方分枝条件（Left Branching Condition）（Ross 1967=1986））に違反すると指摘する研究がある（潘・韩 2005、朱 2005、程 2007 など）。しかし、左方分枝条件は適応される言語／言語現象が限定的であり、必ずしも言語を超えて存在する原則だとは言いきれない。下接の条件は、移動操作を制限する条件として、左方分枝条件より次元の高い説明力を持っているということは Chomsky（1981、1986）、Huang（1982、1984）などによって示されている。

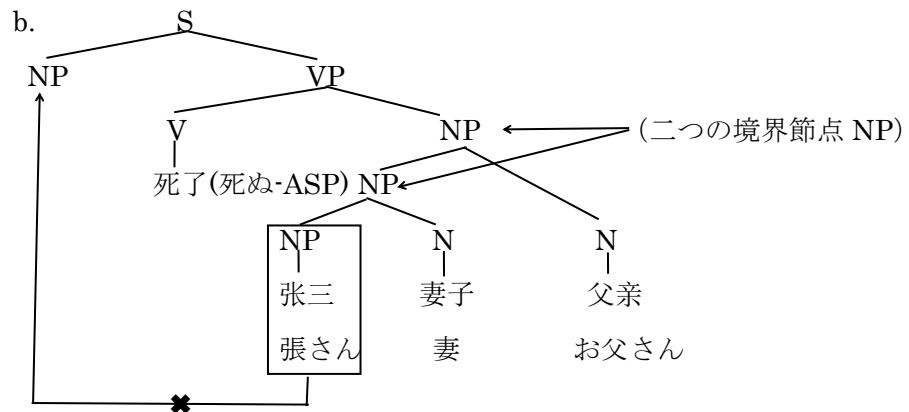
張さんは岳父 (=妻のお父さん) が死んだ。



(29) a. *张三 死 了 妻子的父亲。

張さん 死ぬ-ASP 妻のお父さん

(意図する意味: 張さんは妻のお父さんが死んだ。)



(28b) において所有者上昇は一つの境界節点 NP を超えているだけである。下接の条件に違反しないため、(28a) が自然に生成される。一方、(29b) において (29a) のような文が生成されるには、名詞句が所有者上昇で二つの境界節点 NP を超えなければならない。すると、下接の条件に違反するため、(29a) は産出されない。なお、(29b) が示す構造から、[NP[NP 张三 (張さん) [N 妻子 (妻)]]]を全体として主語位置に移動すると、境界節点 NP を一つだけ超えることになる。その場合、下接の条件に違反しないため、文が正しく生成されると予測される。事実はその通りで (29a) が非文であるのに対し、(30) は自然に成立する。

(30) 张三的妻子 死 了 父亲。

張さんの妻 死ぬ-ASP お父さん

張さんの妻はお父さんが死んだ。

主語名詞句と目的語名詞句が基底構造で一つ構成素をなさないと分析している研究によって、(27a、b) (= (28a) (29a)) のような文法性の違いは問題となってきた。しかし、「所有者上昇」の分析を採用すると、移動を制限する「下接の条件」に基づき、自然に説明することができる。この事実は「所有者上昇」の分析を支持する有力な証拠となる。

以上、この節では先行研究で指摘されてきた、いわゆる「所有者上昇」分析の問題点について議論を行い、それらのいわゆる問題点は合理的に説明できることを示した。さらに、他の分析では言及もされておらず、うまく説明することができない(27a、b) のような文法性の違いについても、「所有者上昇」の分析でうまく説明がついた。そこには「下接の条件 (Subjacency Condition)」が関与している。これらのことを踏まえ、中国語非対格の他動詞文の形成に関して、「所有者上昇」の分析が有効だと結論づけたい。

次節では、非対格の他動詞文を構造的に分析する際に直面する、目的語位置名詞句の格付与の問題について議論を試みる。

3.5 非対格の他動詞文と格付与

先述の通り、目的語位置名詞句の格付与の問題は、所有者上昇分析のみの問題ではなく、非対格の他動詞文の構造構築を考察する際に常に直面する問題である。なぜならば、Burzio の一般化²¹ によると、非対格の構造は目的語に「対格」を付与することができないからである。また、「音形を持つ名詞句は格を持たなければならない」という原則、いわゆる格フィルター (Case Filter) も一般原則とみなされている (Chomsky 1981 など)。そのため、非対格の構造と言え、項が一つのみ現れる自動詞型構文になるのが普通である。すると、項が二つ現れる非対格の他動詞文は格フィルターをどう満たすかという問題が生じる。²²

この節では、まず、中国語非対格の他動詞文において、目的語位置の名詞句が「部分格」を付与されると主張する徐 (1999、2001) を紹介する。徐の研究では中国語非対格の他動詞文の目的語位置名詞句に「部分格」の付与を主張している。しかし、なぜ定性の効果を

²¹ Burzio の一般化とは「All and only the verbs that can assign θ -role to the subject can assign (accusative) case to an object. (Burzio 1986: 178) 外項を取る動詞のみが目的語に対格を与えることができる。」ということである。日本語訳は影山 (2002: 123) に従った。

²² 日本語の非対格の他動詞文における目的語位置名詞句に関しても同様に格付与の問題が生じる。この問題に関しては、長谷川 (2002、2007)、Hasegawa (2004a、b) と影山 (2002) では異なる構造の分析が提案されている。しかし、日本語の非対格の他動詞文において目的語位置の名詞句が「対格」を付与されるという主張は両研究に共通する。非対格の他動詞文において「対格」が付与される詳しい議論にはここでは立ち入らないことにする。詳しくは長谷川 (2002、2007)、Hasegawa (2004a、b)、影山 (2002) を参照されたい。

示さないのかについては説明していない。そのため、徐の研究が主張する「部分格」の付与は問題だと指摘されている（韩 2000、孙・伍 2003、潘・韩 2005、2008、程 2007 など）。以下では、徐（1999、2001）が主張する「部分格の付与」を支持する立場で、中国語非対格の他動詞文において目的語位置名詞句が定性の効果を示さなくても、部分格の付与が可能であることを明確な形で検証する。

3.5.1 部分格付与と「定性の効果」

文の表層構造 (S-structure) で付与される「主格 (Nominative Case)」や「対格 (Accusative Case)」などの構造格 (Structure Case) と異なり、「部分格 (Partitive Case)」は、基底構造 (D-structure) で述語の語彙的特性として決定される内在格 (Inherent Case) の一つであるとされている (Belletti 1988)。Belletti (1988) の指摘によると、格の形態変化が豊富な言語において、目的語の位置にくる名詞句に「対格」だけではなく、「部分格」を与えることがある。たとえば、フィンランド語では、「置く」に相当する他動詞の後ろ（目的語位置）に来る名詞句に、「対格」と「部分格」が付与されることがある。

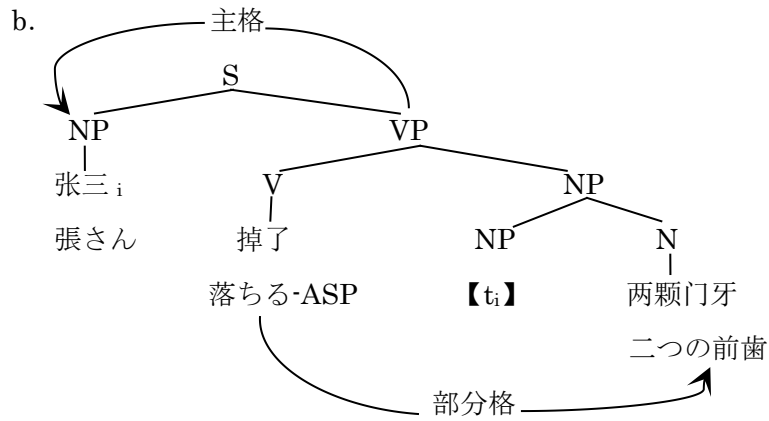
- (31) a. Hän pani kiriat pöydälle.
 He put the books (acc,pl) on the table
 b. Hän pani kirjoja pöydälle.
 He put (some) books (part,pl) on the table

(Belletti 1988: 1)

(31a) の目的語位置に置かれた名詞句は対格を付与され、(31b) の目的語位置の名詞句は部分格を付与されている。そして、(31a) では、対格を付与されている目的語位置の名詞句は特定のものを指し、いわゆる定表現となる。それに対し、(31b) では、部分格を付与されている目的語位置の名詞句は不特定のものを指し、不定表現となる。このように、フィンランド語には格の形態変化が豊富であるため、対格であるか部分格であるかが形態で区別されている。一方、形態変化が豊富ではない言語において、対格であるか部分格であるかは形態から区別されないかもしれないが、部分格が存在するはずだと Belletti (1988) は主張している。

徐（1999、2001、2005）は「部分格」を中国語の分析に導入し、非対格の他動詞文の目的語位置名詞句は述語動詞から「部分格」を付与されると主張する。そして、非対格の他動詞文における格付与を次のように提示している。

- (32) a. 张三 掉 了 两颗 门牙。
 張さん 落ちる-ASP 二つ 前歯
 張さんは二つの前歯が落ちた。



(徐 2005: 15、日本語のグロスは筆者による)

(32) で、主語位置に上昇してきた所有者「张三（張さん）」は主語位置で主格を付与される。一方、目的語位置に残された所有物の「两颗门牙（二つの前歯）」は動詞が語彙的に有する内在格である「部分格」を付与される。本研究は、所有者上昇が関わると分析してきた非対格の他動詞型結果構文においても、徐（1999、2001、2005）が分析する非対格の他動詞文と同様の格付与を支持し、次のように提示する。

- (33) 张三 跑 酸 了 腿。
 ↑ ↑
 [主格] [部分格]
 張さん 走る-棒になる-ASP 足
 張さんが走って足が棒になった。

さて、Belletti (1988) で考察されている部分格に関しては、それを受ける名詞句が定性の効果 (Definiteness Effect) を示すことが指摘されている。定性の効果とは、部分格を受ける名詞句は不定表現の意味解釈を受け、定表現とはならないということである。たとえば、上述の (31) が示すフィンランド語の例では、部分格を付与される目的語位置の名詞句は不定表現となっている。また、不定表現であっても、強決定詞 (every, most, all など) を伴う不定名詞句にも部分格を付与することはできないことが指摘されている (Belletti 1988、岸本 2005 など)。たとえば、英語の There 構文の動詞の後ろに現れる名詞句は、

部分格を受けると考えられている (Belletti 1988、岸本 2005 など)。There 構文の動詞の後ろに現れる名詞句は、以下の例 (34a) が示すように通常 many, some, a few などの弱決定詞 (weak determiner) を伴う名詞句や、定冠詞を伴わない名詞句で不定表現となる。

(34b) のように every, all などの強決定詞 (strong determiner) を伴う名詞句や、定冠詞 (the) を伴う名詞句のような定表現は許されないことはよく知られている。

(34) a. There are (many/some) books on the table.

b. *There are (all/the) books on the table.

しかし、(24a、b) ((35a、b) として再掲) で示したように、中国語非対格の他動詞文の目的語位置には強決定詞 (「所有 (すべて) 」) を伴う名詞句や定表現の名詞句が現れうる。

(35) a. 张三 死 了 所有的亲人。 (潘・韩 2008: 515)

張さん 死ぬ-ASP すべての親族

張さんはすべての親族が死んだ。

b. 张三 掉 了 那颗正中央的门牙。

張さん 落ちる-ASP あの真ん中の前歯

張さんはあの真ん中の前歯が落ちた。

このことは一見 Belletti (1988) が分析する部分格が示す定性の効果と整合しないように見える。徐の研究では中国語非対格の他動詞文において目的語位置に強決定詞を伴う名詞句も、定表現名詞句も現れることについては言及されていない。そのため、先行研究 (潘・韩 2008 など) は、徐 (1999、2001、2005) が主張する「部分格」の付与を批判している。しかし、部分格の付与は本当に定表現と競合するのだろうか。

たとえば、英語や日本語においても、部分格を受ける名詞句に定表現が現れる現象が観察されている (岸本 2005 など)。

(36) Q: Who is at the party?

A: Well, there's Mary, Suzan, and John. (岸本 2005: 224)

(37) a. ジョンには (3 人の / *ほとんどの / *すべての / *あの) 兄弟がいる。

b. ジョンには (メアリーが / あのおじさんが) いる。

上述のように、英語の **There** 構文では動詞の後ろに現れる名詞句には「部分格」が付与されると考えられている。そして、通常は (34) が示すように不定表現のみが許容される。しかし、(36) のような文脈において、**There** 構文では「**Mary, Suzan, John**」のような固有名詞の定表現が現れている。また、日本語の所有文では「ガ」格位置の名詞句が「部分格」が付与されると主張されている (岸本 2005)。日本語の所有文でも通常は (37a) が示すように「ガ」格位置の名詞句に定性の制約がかかり、「ほとんどの／すべての／あの」のような表現が現れると非文となる。しかしながら、ある文脈において (37b) のように「ガ」格位置に定表現が現れても成立する所有文が存在する。

このように英語の **There** 構文や日本語の所有文において、部分格を受ける名詞句に定表現が許容される場合がある。このことを考えると、中国語非対格の他動詞文の目的語位置に (35) のように定表現が許容されることから、その「部分格の付与」を否定することはできない。ここでは、部分格の付与において、なぜ通常では定性の効果を示すが、ある文脈に入ると定表現も許容されるのかを説明する必要がある。さらに言えば、中国語非対格の他動詞文において、もし目的語位置の名詞句が部分格が付与されるということが正しいとするなら、なぜ不定表現でも、定表現でも、さらに強決定詞を伴う表現までも許容されるのだろうか。これらの問題は統一的に説明しなければならない。

3.5.2 部分格付与と「部分読み」

この節では、中国語の表層非対格現象について考察し、中国語の表層非対格現象から「部分格の付与条件」を示唆する。さらに、中国語非対格の他動詞文の目的語位置の名詞句が部分格が付与されることを検証する。

中国語では非対格性を示す現象として、いわゆる表層非対格 (**surface unaccusativity**) (自動詞の唯一の項が表層の目的語位置に現れる) 現象が挙げられている (Sybesma 1999、楊 1999、徐 2001 など)。

(38) a. 非対格動詞

两个人 来 了	来 了 两个人	(二人が来た)
二人 来る-ASP	来る-ASP 二人	
一个人 死 了	死 了 一个人	(一人が死んだ)
一人 死ぬ-ASP	死ぬ-ASP 一人	

一条船 沉 了 沉 了 一条船 (一隻の船が沈んだ)
 一隻の船 沈む-ASP 沈む-ASP 一隻の船

b. 非能格動詞

一个人 笑 了 * 笑 了 一个人 (一人が笑った)
 一人 笑う-ASP 笑う-ASP 一人
 病人 咳嗽 了 * 咳嗽 了 病人 (患者が咳した)
 患者 咳する-ASP 咳する-ASP 患者
 两个人 结婚 了 * 结婚 了 两个人 (二人が結婚した)
 二人 結婚する-ASP 結婚する-ASP 二人

(38a、b) の対照が示すように、中国語では自動詞の唯一の項が表層の目的語位置に現れるか否かによって非対格動詞と非能格動詞が区別されている。表層非対格現象に関連し、(39) が示すように非対格動詞の表層目的語位置に現れる表現に上述の「定性の効果 (Definiteness Effect)」と類似した現象が観察されている (Sybesma 1999、杨 1999、徐 2001 など)。

(39) a. 死 了 一个人。

死ぬ-ASP 一人
 一人が死んだ。

b. *死 了 张三。

死ぬ-ASP 張さん
 (意図する意味: 張さんが死んだ。)

cf. 张三 死 了 。

張さん 死ぬ-ASP
 張さんが死んだ。

c. *死 了 所有的人。

死ぬ-ASP すべての人
 (意図する意味: すべての人が死んだ。)

cf. 所有的人 (都) 死 了 。

すべての人 (も) 死ぬ-ASP
 すべての人が死んだ。

非対格動詞の表層目的語位置に (39a) のように「一个人 (一人)」のような不定表現は許されるが、(39b) 「张三 (張さん)」のような定表現、(39c) の強決定詞「所有 (すべて)」を伴う表現「所有的人 (すべての人)」などは許容されない。非対格動詞の取る唯一の項が「张三 (張さん)」のような定表現や、「所有的人 (すべての人)」のような強決定詞を伴う表現である場合は、(cf.) が示すように表層主語位置に現れる必要がある。なぜ「一个人 (一人)」のような不定表現が非対格動詞の表層目的語位置に現れるのだろうか。また、表層非対格現象では果たして定表現が許容されないのだろうか。以下の例が示すように、適切な文脈においては、非対格動詞の表層目的語位置に定表現や、強決定詞を伴う表現が許容される場合も見られる。

(40) Q: 那场车祸, 死 了 哪些人?

あの交通事故 死ぬ-ASP 誰

あの交通事故では誰が死んだ。

A1: 死 了 张三。

死ぬ-ASP 張さん

張さんが死んだ。

A2: 死 了 车上的所有的人。

死ぬ-ASP 車の中のすべての人

車の中のすべての人が死んだ。

非対格動詞の表層目的語位置に「张三 (張さん)」のような定表現、または「车上的所有的人 (車の中のすべての人)」のように強決定詞 (「所有 (すべて)」) を伴う表現が現れていても、(40) のような文脈においては、文は成立する。これは非文となる (39b、c) と対照的である。なぜ (40A1、A2) と (39b、c) に文法性の違いが生じるのだろうか。

(40A1、A2) と (39b、c) の文法性の違いを議論する前に、以下で、中国語非対格動詞の表層目的語位置に現れる要素についてさらに詳細に見る。

(41) a. 张三的腿 断 了 一条

張さんの足 折れる-ASP 一本

張さんの足が一本折れた。

b. ?*张三的腿 断 了 两条。

張さんの足 折れる-ASP 二本

(意図する意味: 張さんの足が二本折れた。)

c. 张三的腿 没 断 两条。

張さんの足 なかった 折れる 二本

張さんは足は二本は折れなかった。(一本折れた)

*張さんの足は二本とも折れなかった。

(41) に用いられる動詞「断(折れる)」は非対格動詞である(徐 2001)。その唯一の項は主語位置に現れ、表層目的語位置には主語名詞句を修飾する数量表現が現れている。そして、(41) が示す各文は興味深い対照を見せている。

まず、「一条(一本)」、「两条(二本)」はともに不定表現である。(41a) は自然な文であるのに対し、(41b) は不自然である。(41a、b) を比較すると、「一条(一本)」は「张三的腿(張さんの足)」の一部分であるのに対し、「两条(二本)」は「张三的腿(張さんの足)」の数の全部を表すという点で異なっている。中国語母語話者の判断では、(41b) のような文が成立する意味解釈には、表層目的語位置に現れている「两条(二本)」が「張さんの足」の一部分を表す必要がある。ところが、人間の足の本数は全部で二本だという百科辞典的知識があるため、「两条(二本)」が「張さんの足」の一部分を表すという読みはできない。語用論に基づき説明すれば、(41b) では、表層目的語位置に現れている要素「两条(二本)」によって「張さんには三本以上の足がある」という命題が前提(presupposition)として想定される。前提となる命題が真である場合にのみ、その命題を前提する文(発話)は適切となる(安井・奥田(訳) 1990: 255)。²³ したがって(41b) が前提する「張さんには三本以上の足がある」という命題は偽であるため、(41b) は適切ではない。

一方、(41c) は一見すると(41b) と同様に「張さんの足」の数の全部を表す「两条(二本)」が非対格動詞「断(折れる)」の表層目的語位置に現れている。それにも関わらず、自然な文である。(41c) は、(41b) と異なり、非対格動詞「断(折れる)」の表層目的語位置を占めている「两条(二本)」は否定詞「没(なかった)」によって否定されている。つまり、「折れた」のは「二本ではない(一本だ)」との意味解釈がなされる。(41c) において、「两条(二本)」が「二本ではない(一本だ)」と意味解釈され、「張さんの足」の一部分を表す読みが可能となる。それが前提とする「張さんには二本の足がある」

²³ 安井・奥田(訳) (1990: 255) によると、前提は次のように定義される。

発話 A は、B が会話参加者の間でお互いに知られているときにのみ A が適切であるといえる場合、そしてその場合の限り、命題 B を語用論的に前提する。

という命題が真であるため、(41c)の文は適切な文となる。

このように、(41a、b、c)の許容度の違いから、中国語非対格動詞の表層目的語位置には『集合の部分である』という部分読みを表す要素が要求されるということが示唆される。

この示唆に基づき、上述の表層非対格現象に観察されている各々の現象を説明する前に、ここではまず、定表現、不定表現、強決定詞（「所有（すべて）」）を伴う表現の一般的な特徴を考えてみる。通常は、「一個人（一人）、两本书（二冊の本）、一条狗（一匹の犬）」などのような不定表現は、特定の個体を指さない。一方、「张三（張さん）、那本书（あの本）、那条狗（あの犬）」などのような定表現は特定の個体を指す。そして、強決定詞（「所有（すべて）」）を伴う表現は、文字通り、ある集合の全体を表すと、百科事典的知識に基づき理解される。そこで、集合と部分の視点から、定表現、不定表現、強決定詞（「所有（すべて）」）を伴う表現を、本研究は次のように理解できると主張する。つまり、「一個人（一人）、两本书（二冊の本）、一条狗（一匹の犬）」などのような不定表現は、特定の個体を指さないため、文脈に依存せずにあるカテゴリー（たとえば「人間」「もの」「動物」など）の中の部分であるという部分読みが可能となる。一方、「张三（張さん）、那本书（あの本）、那条狗（あの犬）」などのような定表現は、特定の個体を指し、その特定の個体がある集合の中の部分であるかどうかは、特定の文脈がない限りでは表されない。さらに、強決定詞（「所有（すべて）」）を伴う表現は、文字通り、ある集合の全体を表す。適切な文脈によってより大きな集合が読み取れなければ、強決定詞（「所有（すべて）」）を伴う表現は集合の部分という部分読みは持てないと本研究は主張したい。

これらのことを踏まえて考えると、上述(39a)の成立、及び(39b、c)と(40A1、A2)の文法性の違いは、中国語非対格動詞の表層目的語位置に現れている要素が『ある集合の部分である』という部分読みを持つか否かに依存する。このことを次に説明する。

まず、(39a)のように不定表現「一個人（一人）」が非対格動詞の表層目的後位置に現れる場合は、文脈がなくても表層非対格現象が成立する。これは、不定表現「一個人（一人）」が文脈に依存せずに「人間」というカテゴリー（集合）の部分であるという部分読みができるからである。不定表現は文脈に依存せずにあるカテゴリー（集合）の中の部分であるという部分読みが可能である。よって、不定表現は非対格動詞の表層目的語位置に現れるデフォルトな要素と考えられるかもしれない。このことは、文脈に依存せずに成立する英語の *There* 構文や日本語の所有構文において、不定表現が要請されることとも共通する。この点については後述する。

また、(39b)と(40A1)では、非対格動詞の表層目的語位置に現れるのはともに定表

現「张三（張さん）」である。上述のように、通常、定表現（たとえば「张三（張さん）」）はある特定の個体を指し、その特定の個体がある集合の中の部分であるかどうかはそれ自体では分からない。文脈がない（39b）では、表層目的語位置を占める「张三（張さん）」は特定の個体（人）を指す。ある集合の中の部分（個体）であるという部分読みを持たないため、（39b）は許容されない。それに対し、文脈が整っている（40A1）では、文脈から「あの交通事故で死んだ人」という集合が構築されうる。そこで、定表現「张三（張さん）」は特定の個体を指すとともに、「あの交通事故で死んだ人」という集合の中の部分（個体）であるという部分読みの可能性が文脈によって得られる。よって、（40）の文脈において、（40A1）のように定表現が非対格動詞の表層目的語位置に現れることが許容されるのである。

同様に、（39c）と（40A2）では、非対格動詞の表層目的語位置を占めるのはともに強決定詞「所有（すべて）」を伴う表現である。上述のように、「所有（すべて）」を伴う表現は、文脈がなければ、文字通り、ある集合の全部を表す。特定の文脈がない（39c）では、「所有的人（すべての人）」は「人間」という集合の全部を表す。したがって、ある集合の中の部分であるという部分読みを持たないため、この表現は非対格動詞の表層目的語位置には許容されない。一方、（40A2）では、文脈から「あの交通事故で死んだ人」という集合が構築されうる。「车上的所有的人（車の中のすべての人）」は「車の中の人」という集合の全部を表すが、「あの交通事故で死んだ人」というより大きな集合の中の部分とする理解が文脈によって可能となる。そこで（40）の文脈においては、（40A2）のように強決定詞「所有（すべて）」を伴う表現も許容されるのである。

以上のことから「ある集合の中の部分である」という部分読みを表すか否かが表層非対格現象の成立に関与すると言える。

ここまでの議論でも、なぜ中国語非対格動詞の表層目的語位置に「ある集合の中の部分である」という部分読みを表す要素が要求されるのかという疑問が残されている。繰り返し述べてきたように Burzio の一般化によると、非対格動詞は目的語に「対格」を付与することができない。それ故、中国語非対格動詞の表層目的語位置に現れる名詞句には「対格」以外の格が付与されると考えられる。もし Belletti (1988) が指摘するように、形態変化が豊富ではない言語にも「部分格」が存在するということが正しいとするなら、中国語にも英語や日本語と同様に「部分格」が存在すると仮定してもおかしいことではない。そうすると、非対格動詞の表層目的語位置に現れる名詞句に「部分格」を付与されると仮定することも可能であろう。もしこの仮定が正しいとするなら、中国語非対格動詞の表層目的語位置を占める要素に見られる特徴、すなわち「ある集合の中の部分である」という部分

読みは、「部分格」によって要請されると考えられる。²⁴ このことは、上述した英語の *There* 構文、日本語の所有構文における部分格の付与に観察されている現象によって裏付けられる。次の議論では、「部分格を付与される位置には、ある集合の中の部分であるという部分読みを表す要素が要請される」という仮定に基づき、英語の *There* 構文、日本語の所有文における部分格の付与について統一的な説明を試みる。

特定の文脈がない、通常の *There* 構文や日本語の所有文においては、(42) のように部分格を付与される位置には不定表現しか生起しない。一方、適切な文脈の下で、(43) (44) (45) (46) のように部分格を付与される位置に定表現や、強決定詞を伴う表現も許容される (Abbott 1993、岸本 2005、西山 2013 など)。

(42) a. *There are (many/some/*all/*the) books on the table.*

b. ジョンには (沢山の／少しの／*すべての) お金がある。

(43) Q: Who is at the party?

A1: Well, there's Mary, Suzan, and John. (岸本 2005: 224)

(44) Q: Is there anybody we can get to help clean up?

A: Well, there's everyone in the room. (Abbott 1993: 47)

(45) Q: 太郎は、まだ独身だそうだが、誰かよい女性を紹介してあげなくてもいいかな。

A: その必要はないわよ。太郎 (に) は、あの女性がいるわよ。

／太郎 (に) は、花子がいるわよ。

(西山 2013: 301)

(46) Q: 山田家では、皆、山田太郎に反抗する者ばかりで、誰も山田太郎の味方になるような人はいないのかな。

A: 太郎には、すべての妹がいるんだから、大丈夫だ。

²⁴ 「部分格」を付与される名詞句が「ある集合の部分 (part of a set)」を表すということは Belletti (1988: 5-6) にも同様の指摘が見られる。また、部分格を受ける名詞句が「ある集合体の中の部分である」という部分読みを持たなければならないという本研究の考察は、Belletti (1988) が通言語における部分格の特徴に関する次のような指摘とも合致する。

.....the Case difference overtly manifested by the morphology in example like (Finnish) is an option available universally, also in languages where the morphology does not make any distinction. In such cases the only reflex of partitive Case will be in the interpretation.

(Belletti 1988: 2, 括弧内及び下線は筆者による)

要するに、形態から部分格であるかどうかの区別がつかない言語では、意味解釈が重要な指標となるということである。動詞が語彙的に付与する「部分格」は、なぜ文脈まで想定して得られる意味解釈とつながるのかについて考察を進める必要があると思われるが、このことに関しては今後の課題としたい。

(西山 2013: 301)

(下線は筆者による)

これらの現象に関しては、上述の中国語の表層非対格現象と同様に説明することができる。「たくさんの、少しの／**many, some**」などが伴う不定表現は上述のように、文脈に依存せずに、あるカテゴリー（集合）の中の部分を表すという部分読みを持つ。そのため、これらの表現は特定の文脈に依存せずに部分格を付与されることが可能となり、(42)のように、通常の **There** 構文や所有文に許容される。一方、「あの、花子／**the, Mary, Suzan, John**」などの定表現は、特定の個体を指し、適切な文脈がない限りでは、ある集合の中の部分という部分読みは持たない。そのため、定表現は文脈のない通常の **There** 構文や所有文では許容されない。部分格の要請によって、(43) (45) のような特定の文脈が要求されるのである。また、強決定詞「すべて／**all, every**」はある集合の全体を表す。適切な文脈の下でより大きな集合が構築されなければ、強決定詞「すべて／**all, every**」を伴う表現はある集合の部分という部分読みはできない。そのため、これらの表現は (42) のように文脈のない **There** 構文や所有文には許容されず、(44) (46) のように適切な文脈が要請されることになる。²⁵

以上、部分格を付与される位置に「ある集合の中の部分であるという部分読みを表す要素」が要請されるという仮定に基づき考察を進めてきた。文脈に依存しない通常の **There** 構文と所有文、そして、特定の文脈におかれる **There** 構文と所有文における部分格の付与と（不）定表現の許容度について、中国語の表層非対格現象と同様の説明を試みてきた。その結果、中国語の表層非対格現象、英語の **There** 構文、そして日本語の所有文によって、部分格を付与される位置に「ある集合の中の部分であるという部分読みを表す要素」が要

²⁵ 強決定詞とされている「ほとんど／**most**」も次のように、部分格を付与される位置に許容されない。

- (i) a. ***There are most books on the table.**
- b. *ジョンにはほとんどのお金がある。

「ほとんど／**most**」は意味的には、「すべて／**all, every**」とは異なり、ある集合の全部を表すのではない。「ほとんど／**most**」はある集合の中の割合を表す表現である (Belletti 1988、西山 2013)。ある集合の中の割合は「部分」であると考えられる。そうすると、本稿が提案する部分格の付与と「部分読み」の関係に基づくと、「ほとんど／**most**」も部分格を付与される位置に現れるはずである。しかし、(i) が示すように「ほとんど／**most**」は部分格を付与される位置には許容されていない。このことは、一見すると本稿で主張する「部分格」と「部分読み」に関する提案の反例になるように見られる。しかし (i) が非文となる現象は、必ずしも本稿の提案の反例とは言えない。(ii) が示すように、「**most**」が **There** 構文に現れる事実がある。

- (ii) **There was most of a large birthday cake sitting on the buffet.** (Abbott 1993: 45)

(i) のような現象に関してさらに考察を進める必要があると思われるが、ここではこれ以上深入りしない。

請されるという仮定が経験的に支持された。したがって、もし、中国語非対格の他動詞文において目的語位置の名詞句が部分格を付与されるとするなら、中国語非対格の他動詞文の目的語位置の名詞句もここで検証してきた「部分格の付与」による要請、すなわち「ある集合の中の部分」という部分読みができなければならない。

以下では、中国語非対格の他動詞文において目的語位置名詞句が定表現であっても、不定表現であっても、さらに強決定詞を伴う表現であっても、部分読みを表すことが可能であることを示す。

すでに 3.3 節、3.4 節で論じたように、中国語非対格の他動詞文は、所有者名詞句がそれの所有物である項の所有格位置から分離して主語位置に上昇するという「所有者上昇」によって派生された構文である。この構造構築を踏まえて考えれば、目的語位置に残された名詞句は定表現にしろ不定表現にしろ、さらには強決定詞を伴う表現にしろ、いずれも主語位置に上昇した所有者名詞句と、「『主語名詞句』的 (の) 『目的語位置名詞句』」という構造関係を持つと考えられる。²⁶ 「『主語名詞句』的 (の) 『目的語位置名詞句』」の構造関係によって、目的語位置名詞句は「『主語名詞句』的 (の) X」という「集合」の中の部分という部分読みを表すことが、文脈に依存せずに保証されると考える。具体例に基づきこのことを示す。

(47) a. 张三 掉了 (所有的／那颗很丑的) 门牙。

張さん 落ちる・ASP (すべての／あの醜い) 前歯

張さんは (すべての／あの醜い) 前歯が落ちた。

b. 张三 摔断了 一条腿／那原本跑得很快的双腿。

張さん 転ぶ・折れる・ASP 一本の足／あの元々走るのが早い 2 本の足

張さんは転んで (一本／あの元々走るのが速い 2 本) の足が折れた。

(47a、b) において、非対格の他動詞文の目的語位置には、不定表現「一条腿 (一本の

²⁶ 中国語において、もし主語名詞句と目的語位置名詞句が「的 (の)」の構造にならない場合は、以下の例 (i) が示すように非対格の他動詞文としては成立しない。(ii) が自然に成立するように、主語名詞句と目的語名詞句に「的 (の)」構造関係が要求される。

(i) *张三 死了 李四。 (「*张三的李四 (張さんの李さん)」)

張さん 死ぬ・ASP 李さん

(意図する意味: 張さんは李さんが死んだ。)

(ii) 张三 死了 助手李四。 (「张三的助手李四 (張さんのアシスタントの李さん)」)

張さん 死ぬ・ASP アシスタントの李さん

張さんはアシスタントの李さんが死んだ。

足)」もあり、「那颗很丑的门牙（あの醜い前歯）」や「那原本跑得很快的双腿（あの元々走るのが速い2本の足）」のような定表現、そして「所有的门牙（すべての前歯）」のように強決定詞（「所有（すべて）」）を伴う表現も見られる。これらの表現は、いずれも主語名詞句「张三（張さん）」と「『主語名詞句』的（の）『目的語位置名詞句』」の構造関係を持ち、主語名詞句「张三的 X（張さんの X）」という集合の部分を表す。この X は「身体部分」と理解することが可能であるが、X は必ずしも「身体部分」に限る必要はない。

たとえば、中国語非対格の他動詞文において、（48a、b）が示すように、親族の関係や広い範囲の所有物関係も表すことができる。

- (48) a. 张三 死 了 父亲／所有的亲人。
 張さん 死ぬ-ASP お父さん／すべての親族
 張さんは お父さん／すべての親族 が死んだ。
- b. 张三 烂 了 两筐梨／所有的梨。
 張さん 腐る-ASP 二箱の梨／すべての梨
 張さんは 二箱の梨／すべての梨 が腐った。

（48a）では、目的語位置を占める名詞句「父亲／所有的亲人（お父さん／すべての親族）」は主語名詞句「张三（張さん）」と「『主語名詞句』的（の）『目的語位置名詞句』」の構造関係を持ち、「张三的父亲／张三的所有的亲人（張さんのお父さん／張さんのすべての親族）」ということを意味する。（48b）についても同様である。目的語位置名詞句は主語名詞句と「『主語名詞句』的（の）『目的語位置名詞句』」の構造関係を持ち、「张三的两筐梨／张三的所有的梨（張さんの二箱の梨／張さんのすべての梨）」ということを意味する。これらはいずれも上述の（47）の例文と同様、主語名詞句「张三的 X（張さんの X）」という集合の中の部分を表す。

このように、中国語非対格の他動詞文において、目的語位置名詞句は、主語名詞句と「『主語名詞句』的（の）『目的語位置名詞句』」の構造関係を持つことによって、「『主語名詞句』的（の）X」という集合の中の部分を表すことができる。そのため、非対格の他動詞文の目的語位置名詞句に定表現が現れても、（強決定詞を伴う）不定表現が現れても、「部分読み」を持つことが可能となり、部分格の付与が許容されると主張したい。

以上、この節では非対格の他動詞文における格付与の問題について議論を行ってきた。中国語非対格の他動詞文において目的語位置名詞句が部分格を付与されると主張する徐の

一連の研究を支持する立場で、本節では、「部分格」の付与について考察を進めた。具体的には、中国語非対格動詞の表層目的語位置に現れる名詞句の意味解釈の特徴を踏まえ、部分格を受ける要素は「ある集合の中の部分であるという部分読みを表さなければならない」と仮定した。そして、この仮定に基づき、英語の **There** 構文や日本語の所有文で考察されている部分格の付与と（不）定表現の許容を統一的に説明した。さらに、所有者上昇によって派生された中国語非対格の他動詞文では、主語名詞句と目的語位置名詞句とが「『主語名詞句』的『目的語名詞句』」という構造関係を持つことを明らかにした。そのため、目的語位置名詞句は定表現でも、（強決定詞を伴う）不定表現でも、「『主語名詞句』的（の）X」という「集合」の部分を表し、部分格を付与されることが可能であることを論じた。

3.6 まとめ

以上、本章では、非対格の他動詞型結果構文の形成と構造について議論を行った。具体的には、まず、これまでの先行研究において一括されてきている他動詞型結果構文は必ずしも一律に **CAUSE** 型と分析できないことを示した。その中には、文の表面上、主語と目的語の二項を持つが、受身文が成立せず、主語名詞句と目的語名詞句との間に「譲渡不可能所有」の関係を保たなければならないタイプの他動詞型結果構文が存在することを明らかにした。

次に、このタイプの他動詞型結果構文は、第2章で考察した非対格の構造をなす自動詞型結果構文と共通して、動詞 **V1** が軽動詞 **BECOME** と併合する非対格の構造をなすと主張した。そして、所有者がその所有物である項の所有格の位置から分離して主語位置に上昇することによって派生される、いわゆる「所有者上昇」の構造構築を提案した。所有者上昇に関わると分析されている他の現象（中国語の非対格他動詞文、日本語の非対格他動詞文）と共通性を持つことから、本章が提案する非対格の他動詞型結果構文の構造分析が経験的に支持されることを示した。

さらに、所有者上昇の分析が直面する問題点を再検討し、本研究が採用する所有者上昇の分析が有効であることを改めて示した。

最後に、中国語非対格の他動詞文における格付与の問題について、「部分格」の付与を支持する立場から、議論を進めた。中国語表層非対格現象の考察を踏まえ、部分格を受ける位置の名詞句は「ある集合の部分」であるという部分読みを表さなければならないという仮定を提示し、英語、日本語、中国語に見られる部分格の付与と（不）定表現の許容度について統一的に説明した。そこから、所有者上昇によって派生された中国語非対格の他

動詞文の目的語位置に部分格を付与されることを検証した。

以上の議論を通して、本章が提案する非対格の他動詞型結果構文の形成と構造の分析は経験的に支持され、理論的にも有り得る妥当な分析だと主張したい。

次章では、本章が扱う（1b）のような非対格の他動詞型結果構文と異なり、（1a）のような他動詞型結果構文について構造的分析を行う。

第4章 動作主主語の他動詞型結果構文と3層分裂VP構造

4.1 はじめに

第3章で考察した非対格の他動詞型結果構文とは異なり、受身文が成立する(1a)のような他動詞型結果構文の構造について本章で分析を行う。すでに前章でも述べたように、他動詞型結果構文は軽動詞(CAUSE、またはCAUSEにあたる軽動詞v)によって原因項(Causer)が導入される構造であると、Sybesma(1999)、Huang(2006)では分析されている。しかし、前章の議論を通してわかるように、他動詞型結果構文には、軽動詞CAUSEが含まれず、前項動詞V1が軽動詞BECOMEと併合する非対格の他動詞型結果構文が存在する。本章は、Sybesma(1999)、Huang(2006)で主張されてきたCAUSE型の分析は(1a)のような動作主主語の他動詞型結果構文の構造分析としても問題が残ることを示し、原因項(Causer)と動作主(Agent)を構造上区別すべきことを主張する。

- (1) a. 张三 打 哭 了 李四。
張さん 殴る・泣く・ASP 李さん
張さんは李さんを殴って泣かせた。
- b. 李四 被 张三 打 哭 了。
李さん 受身マーカー 張さん 殴る・泣く・ASP
李さんは張さんに殴られて泣いた。

本章の構成は以下の通りである。まず、4.2節で、他動詞型結果構文の構造をCAUSE型と分析する先行研究の代表としてSybesma(1999)、Huang(2006)を検討し、これらの分析が(1a)のような他動詞型結果構文の構造として妥当性に欠けることを指摘する。特に、原因項主語の結果構文において「逆行束縛(backward binding)」が許容されるのに対し、動作主主語の他動詞型結果構文では逆行束縛が許されない事実に基づき、動作主と原因項を構造上区別すべきことを示す。4.3節では、動作主と原因項が異なる構造位置を占めると主張する藤田・松本(2005)の分析(3層分裂VP構造、機能範疇 μ)を紹介する。その上で、4.4節では、機能範疇 μ が本研究これまで分析してきた中国語結果構文の構造によって支持されることを示し、藤田・松本(2005)の構造分析を中国語に導入することが可能であることを論じる。さらに、動作主主語の他動詞型結果構文について3層分裂VP構造の分析を提案する。最後に、4.5節では本章の分析をまとめる。

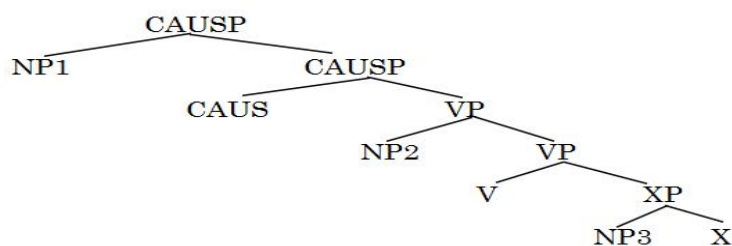
4.2 CAUSE 型としての他動詞型結果構文の構造分析

この節では、第2章で考察した、軽動詞 CAUSE が構造上に存在する原因型結果構文の構造と対照しながら、Sybesma (1999)、Huang (2006) が主張する CAUSE 型の分析について検討する。

4.2.1 他動詞型と原因型を区別しない Sybesma (1999)

Sybesma (1999) をはじめ、Sybesma・沈 (2006)、沈・司马翎 (2010)、沈・Sybesma (2012) などの一連の研究は小節 (Small Clause、以下 SC) 分析を採用している。そして、文の表層に主語、目的語の二項が現れる結果構文を、他動詞型か原因型かを区別せずに、一律に自動詞型 (非対格型) から拡張される CAUSE 型 (Sybesma (1999) では「CAUS」が用いられる) として、次のような構造を示している。

(2) CAUSE 型の構造



(Sybesma 1999: 180)

すでに第2章及び第3章でも述べたように、Sybesma (1999) など一連の研究では、(2) が示す構造で NP1 は VP と構造上、直接的選択関係を持たず、CAUSE によって意味役割が付与される原因項 (Causer) であるとされている。¹ したがって、いわゆる原因型結果構文 (3a) と他動詞型結果構文 (4a) のような例は、それぞれ (3b)、(4b) が示すように、同様の構造を持つことになる。

(3) a. 张三的恶作剧 吓 哭 了 李四。

張さんの悪ふざけ 驚く・泣く・ASP 李さん

張さんの悪ふざけが原因で李さんは驚いて泣いた。

b. [CAUSEP 张三的恶作剧 CAUSE [VP 吓 [SC 李四 哭了]]]

¹ 第3章注5 (p.42) を参照。

(4) a. 张三 打 哭 了 李四。

張さん 殴る・泣く -ASP 李さん

張さんは李さんを殴って泣かせた。

b. [CAUSEP 张三 CAUSE [VP 打 [SC 李四 哭了]]]

両構文において、主語位置を占める名詞句「张三的恶作剧（張さんの悪ふざけ）」、「张三（張さん）」はそれぞれ動詞 V「吓（驚く）」、「打（殴る）」と構造上の意味関係を持たず、いずれも軽動詞 CAUSE によって導入される原因項 (Causer) となる。(4a) のような結果構文において主語（「张三（張さん）」）が動作主 (Agent) の意味解釈が可能なのは、あくまでも百科事典的知識による解釈 (shadow interpretation) に過ぎないとされる (Sybesma 1999: 193)。

原因型結果構文と他動詞型結果構文の構造を区別しない Sybesma (1999) らの分析には、第 2 章 (2.2 節) においてすでに述べたような問題がある。また、後述する Huang (2006) の問題点もそのまま当てはまる。

4.2.2 他動詞型と原因型を区別しようとする Huang (2006)

Huang (2006) は、Sybesma (1999) らと異なり、他動詞型結果構文と原因型結果構文の構造を、前項動詞 V1 と軽動詞との併合の仕方が違っているとして区別している。²

(5) a. Causing with a manner (他動詞型)

[CAUSEP X CAUSE-V1<UNERGATIVE> [BECOMEP BECOME [V2P Y V2]]]

b. Pure causative (原因型)

[CAUSEP X CAUSE [BECOMEP BECOME-V1 [V2P Y V2]]]

他動詞型結果構文の方は、動詞 V1 が軽動詞 CAUSE の様態付加詞として併合する構造だとする。一方、原因型結果構文は、動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合する自動詞型からの拡張型であり、軽動詞 CAUSE には何も併合されない pure causative としている。

このように、Huang (2006) において、他動詞型と原因型は動詞 V1 と軽動詞との併合の仕方によって区別されている。本研究は Huang (2006) に賛成し、他動詞型結果構文と原因型結果構文の構造を区別すべきとの立場で議論を進める。次節では、Huang (2006)

² Huang (2006: 26-27) では他動詞型は [x CAUSE<UNERGATIVE> [BECOME [y <STATE>]]] と、原因型は [x CAUSE [BECOME<V> [y <STATE>]]] と示されている。

が主張する (5a) のような他動詞型結果構文の構造が、(1a) のような他動詞型結果構文の構造構築を果たして正しく示しているのかについて詳細に検討する。

4.2.2.1 Huang (2006) が主張する他動詞型と軽動詞併合

まず、Huang (2006) が主張する他動詞型結果構文の構造では、(5a) が示すように、前項動詞 V1 が軽動詞 BECOME とは併合しないことが示されている。(1a) ((6a) として再掲) の構造は Huang (2006) に従って、(6b) のように示すことができる。

(6) a. 张三 打 哭 了 李四。

張さん 殴る・泣く・ASP 李さん

張さんは李さんを殴って泣かせた。

b. [CAUSEP 张三 CAUSE-打 [BECOME_P BECOME [V2P 李四 哭了]]]

他動詞型結果構文において動詞 V1 が BECOME と併合しないということは、目的語位置の名詞句が動詞 V1 と構造上、局所的関係を持たないことを示す。さらに、目的語名詞句は動詞 V1 から直接意味役割を付与されないということも意味する。³ 他動詞型結果構文の構造で、動詞 V1 が BECOME と併合しないという点には本研究は同意する。なお、(6a) のような他動詞型結果構文において、目的語名詞句「李四 (李さん)」は動詞「打 (殴る)」の対象と一見解釈できるかのように思える。そのため、動詞 V1 と目的語名詞句とが構造上の関係を持たないという分析は適切なかと疑われるかもしれない。しかし、(6a) のような他動詞型結果構文において、目的語名詞句「李四 (李さん)」が動詞「打 (殴る)」の対象と意味解釈できることは、必ずしも構造上の局所的関係によって保証される必要はない。^{4, 5} 他動詞型結果構文において動詞 V1 が目的語名詞句と意味役割付与関係を持たないということは、(7) のような例を見ればさらに明白である。

³ 第3章注5 (p.42) を参照。

⁴ すなわち、ここの他動詞型結果構文において、目的語名詞句が動詞 V1 の対象と解釈されるのは、百科事典的知識による一番自然な解釈に過ぎないと考えることが可能である。逆に言うと、文脈を整えば、目的語名詞句が動詞 V1 の対象ではない場合も可能である。たとえば、「張さんが息子を殴った結果、張さんの妻は張さんに息子を殴られて泣いた」というような文脈において、「张三打儿子，结果没打哭儿子，却打哭了妻子（張さんは息子を殴った結果、息子を殴って泣かせなかったが、妻を泣かせた）」は自然に言える。この文においては、目的語名詞句「妻子 (妻)」は明らかに動詞「打 (殴る)」の対象ではないことが文脈によって提示されている。「打哭了妻子 (妻を殴って泣かせた)」のように表現できる。

⁵ 本研究は原因項 (Causer) と動作主 (Agent) が百科事典的知識による意味解釈だという Sybesma らの主張には異を唱えるが、構造分析の際に、構造関係によって保証される意味解釈と百科事典的知識による意味解釈を区別する必要があるという考え方自体には反対しない。

(7) 张三 哭 走 了 客人。

張さん 泣く・離れる-ASP 客

張さんが泣いて、客が離れた。

中国語には動詞 V1 が対象に意味役割を付与しない自動詞であっても、(7) のように他動詞型結果構文が成り立つ場合がある。(7) では目的語となっている「客人(客)」は単なる結果述語「走(離れる)」の主体であり、動詞「哭(泣く)」からは明らかに意味役割を受けていない。したがって、(6) も (7) と同様に、動詞 V1 が目的語名詞句に対象意味役割を付与せず、BECOME と併合しない構造だと考えられる。

次に、Huang (2006) では、(5a) のような他動詞型結果構文の構造で、動詞 V1 が CAUSE と併合することが示されている。このことについて、CAUSE が含まれる原因型結果構文の構造と対照しながら検討する。

原因型結果構文の構造に関しては、すでに第 2 章で議論したように、Huang (2006) が主張する (5b) のような pure causative の分析では説明できない言語事実がある(第 2 章の 2.2 節、2.3 節を参照)。本研究の第 2 章では、Huang (2006) を踏まえ、原因型結果構文の構造構築に、BECOME と併合した動詞 V1 がさらに CAUSE に上昇するというプロセスを仮定し、(8) のような構造を提案した。

(8) 原因型結果構文の構造構築

[_{CAUSEP} X CAUSE-V1 [_{BECOME_P} BECOME-V1 [_{V2P} Y V2]]]

Huang (2006) が主張する (5a) のような他動詞型結果構文の構造を、(8) が示す原因型結果構文の構造と対照して見れば、他動詞型結果構文において、動詞 V1 が BECOME と併合しないという点では原因型結果構文と異なっている。しかし、その主語は CAUSE-V1 によって導入されるという点では原因型結果構文と共通している。要するに、Huang (2006) は他動詞型結果構文と原因型結果構文を構造上区別しようとしているが、両構文においてそれらの主語は同様の構造位置(軽動詞 CAUSE の指定部)を占めるという主張においては、上述した Sybesma (1999) などの一連の研究と変わりはない。

4.2.2.2 他動詞型において区別される動作主と原因項

この節では、Huang (2006) が提案する CAUSE 型の他動詞型結果構文において、動作主主語と原因項主語が区別されることを示す。

第2章において述べたように、中国語結果構文では BECOME と併合する動詞は非対格動詞でも非能格動詞でも可能であると Huang (2006) は主張している。原因型結果構文では (8) が示すように、BECOME と併合した動詞 V1 がさらに軽動詞 CAUSE に上昇して併合する。そうすると、CAUSE と併合する動詞も非能格動詞でも、非対格動詞でも可能であるということになる。したがって、他動詞型結果構文においても、軽動詞 CAUSE と併合する動詞 V1 は非能格動詞のみに限定されず、非対格動詞でも可能なはずである。ところが、Huang (2006) が提案する他動詞型結果構文の構造では、非能格動詞 V1 のみが軽動詞 CAUSE と併合することが示されている。このことに関して、Huang (2006) は注釈において語用論的理由を加えて説明している。すなわち、非対格動詞は語用論的に他の対象に影響を与えるということが考えにくい、他動詞型結果構文に用いられにくいというのである。もし語用論的に可能な状況であれば、以下の例 (9) が示すように、非対格動詞 V1 も他動詞型結果構文に用いられる。⁶

(9) a. 张三 病 急 了 他的家人。 (Huang 2006: 39)

張さん 病気になる-心配する-ASP 彼の家族

張さんは病気になって彼の家族が心配した。

b. [CAUSEP 张三 CAUSE-病 [BECOME_P BECOME [V_{2P} 他的家人 急了]]]

要するに、Huang (2006) では、他動詞型結果構文の構造に関して、非能格動詞の V1 が軽動詞 CAUSE と併合することが示されているが、軽動詞 CAUSE と併合する動詞 V1 が (9a) のように非対格動詞である場合もあることは否定されていない。いずれの場合においても、主語は同様の構造位置（軽動詞 CAUSE の指定部）を占めるとしている。軽動詞 CAUSE と併合する動詞 V1 が非対格動詞でも非能格動詞でも可能なことに関して、本研究も同意する。

ところが、動詞 V1 が (9a) のような非対格動詞の場合と (1a) のような非能格動詞の場合では、明らかに主語の性質が異なる。(9a) では主語は確かに原因型結果構文の原因項主語と同様に、CAUSE による原因項 (Causer) だと見なせる。一方、(1a) では主語

⁶ Huang (2006) では言及されていないが、実際には自然現象を表す名詞句が主語となる他動詞型結果構文では、たとえば (ib) が示すように、非対格動詞（「刮（吹く）」（自然現象を表す動詞が非対格動詞であることは楊 (1999) を参照されたい。））が軽動詞 CAUSE と併合する例が多く存在する。

(i) a. 台风 刮 倒 了 大树。

台風 吹く-倒れる-ASP 大樹

台風が吹いて大樹が倒れた。

b. [CAUSEP 台风 CAUSE-刮 [BECOME_P BECOME [V_{2P} 大树 倒了]]]

は動作主 (Agent) だと考えられる。⁷ このことは、動作主指向の副詞 (agent-oriented adverbs) (影山 1996、Fukushima 2005、Nishiyama 2008 など) 「故意 (わざと) / 不小心 (不注意で)」 と共起するか否かによって裏付けられる。

(10) 张三 故意/不小心 打 哭 了 李四。

張さん わざと/不注意で 殴る・泣く・ASP 李さん

張さんは わざと/不注意で 李さんを殴って泣かせた。

(11) *张三 故意/不小心 病 急 了 他的家人。

張さん わざと/不注意で 病気になる・心配する・ASP 彼の家族

(意図する意味: 張さんは わざと/不注意で 病気になって彼の家族を心配させた。)

(12) *张三的恶作剧 故意/不小心 吓 哭 了 李四。

張さんの悪ふざけ わざと/不注意で 驚く・泣く・ASP 李さん

(意図する意味: *張さんの悪ふざけが わざと/不注意で 張さんを驚かせて泣かせた。)

(10) が示すように、(1a) のような他動詞型結果構文は動作主指向の副詞「故意 (わざと) / 不小心 (不注意で)」 と共起することが可能である。本研究はこのタイプの他動詞型結果構文を「動作主主語の他動詞型結果構文」と呼ぶ。それに対し、動詞 V1 が非対格動詞である (9a) のような他動詞型結果構文は、(11) が示すように動作主指向の副詞と共起することはできない。このことは (12) が示す原因型結果構文と同様である。

(10) と (11) の文法性の違いが示すように、いわゆる CAUSE 型の他動詞型結果構文では、動作主主語と原因項主語の区別があることが分かる。Huang (2006) に従って考えれば、CAUSE 型の他動詞型結果構文において、主語が動作主か、原因項かといった違いは軽動詞 CAUSE と併合する V1 の性質 (非対格動詞か非能格動詞か) によって説明されるのかもしれない。⁸ しかし、動作主主語であろうと、原因項主語であろうと、上述のように Huang (2006) では同様の構造位置 (軽動詞 CAUSE の指定部) で示されている。

しかし、原因項と動作主は果たして同様の構造位置を占めるのであろうか。この点に関しては疑問を示す言語事実が存在する。

⁷ V1 が非対格動詞である場合に原因項主語となり、V1 が非能格動詞である場合に動作主主語となることに関しては 4.4.2 節において詳述する。

⁸ この点は、動作主と原因項の違いを百科事典的知識による解釈 (shadow interpretation) と主張する Sybesma (1999) とは異なる。

- (13) *他自己_i 哥哥 打 哭 了 李四_{io}
 彼自分自身_iの兄 殴る・泣く・ASP 李さん_i
 (意図する意味: (李さん) 彼自分_iの兄が李さん_iを殴って泣かせた。)
- (14) 他自己_i 孩子 病 急 了 李四_{io}
 彼自分自身_iの子供 病気になる・心配する・ASP 李さん_i
 彼自分自身_iの子供が病気になったことが原因で李さん_iは心配した。
- (15) 他自己_i 哥哥的恶作剧 吓 哭 了 李四_{io}
 彼自分自身_iの兄の悪ふざけ 驚く・泣く・ASP 李さん_i
 彼自分自身_iの兄の悪ふざけが原因で李さん_iは驚いて泣いた。

原因項主語の他動詞型結果構文と原因型結果構文においては、(14) (15) が示すように、後続の目的語名詞句（「李四 (李さん)」）が原因項主語名詞句内に含まれる照応語（「他自己 (彼自分自身)」）の先行詞となることが可能である。それに対し、動作主主語の他動詞型結果構文においては、(13) が示すように、後続の目的語名詞句（「李四 (李さん)」）が動作主主語名詞句内に含まれる照応語（「他自己 (彼自分自身)」）の先行詞となることはできない。

照応語（自分／-self／他自己 (彼自分自身)、我自己 (私自分自身)、你自己 (あなた自分自身)、他们自己 (彼ら自分自身)⁹ など）と先行詞の関係に関わる文法原理は束縛原理 (Binding Theory) の原理 A として知られている。

(16) 束縛原理 (原理 A)

照応語はその統率範疇内で束縛されなければならない。

照応語の統率範疇とは、簡単に言うと、照応語が現れる最小の文（または句）とされている。すなわち、照応語が現れる（最小）文において、先行詞はそれの照応語を C 統御しなければならない (Chomsky 1981, 1986)。¹⁰ 通常、照応語は (17) が示すように、それ

⁹ 中国語では、照応語となるのはここで挙げた「代名詞+自己 (自分)」のような複合式の他、裸の「自己 (自分)」も照応語として用いられる。しかし、「代名詞+自己 (自分)」のような複合式の照応語は原理 A に従うが、「自己 (自分)」には長距離束縛の解釈が許容され、必ずしも原理 A に従わないことが観察されている (Huang ほか 2009)。このことは本稿の議論に影響を与えないため、ここでは、束縛原理 (原理 A) に従う「代名詞+自己 (自分)」のような複合式の照応語に限って議論を進める。中国語の照応語現象に関しては Huang 他 (2009) を参照されたい。

¹⁰ 束縛とは、 α が β を C-command (C 統御) し、 α と β が同一の指標を付与されている場合、 α は β を束縛するという。C-command (C 統御) とは、 α が β を支配 (domination) せず、 α を支配するすべての r が β を支配する場合、 α は β を C-command (C 統御) するという (Chomsky 1986)。

の先行詞によって束縛されることになる。

(17) 张三_i 只 喜欢 他自己_{i/*j}。

張さん だけ 好きだ 彼自分自身

張さんは彼自分自身だけが好きだ。

(17) では、目的語位置を占める照応語「他自己（彼自分自身）」は主語位置の「张三（張さん）」によって束縛され、「张三（張さん）」と同定する解釈が要求される。「他自己_j」に「*」をつけたのは、「张三（張さん）」以外の解釈はできないためである。

照応語とその先行詞の構造関係を踏まえて考えると、照応語がそれを C 統御しない位置にある先行詞によって束縛されると、束縛原理 (A) に違反し、通常は (13) が示すように許されない。したがって、表層の構造では先行詞に C 統御されていないにも関わらず、照応語が束縛原理に反していない (14) (15) のような現象は、「逆行束縛 (backward binding)」と呼ばれる (Fujita 1993、1996、藤田・松本 2005 など)。

もし結果構文において、動作主主語と原因項主語がともに軽動詞 CAUSE によって導入され、同様の構造位置（軽動詞 CAUSE の指定部）を占めるとするなら、動作主主語と原因項主語は共通の統語的振る舞いを示すはずである。しかし、「逆行束縛」現象に関しては、(13) と (14) (15) の文法性の違いが示すように、動作主主語と原因項主語とは異なる振る舞いを見せている。逆行束縛現象に関して、Pesetsky (1995: 49)、藤田・松本 (2005: 146) は次のような一般化を仮定している。

(18) 逆行束縛は、使役述語が原因項主語を持つ場合には可能であるが、動作主主語を持つ場合には不可能である。

(藤田・松本 2005: 146)

以下 4.3 節と 4.4 節では、Fujita (1993、1996)、藤田・松本 (2005) に従い、(13) タイプの構文の「動作主」と、(14) (15) タイプの構文の「原因項」が構造上異なる派生をするということを主張する。

以上、CAUSE 型とされてきた他動詞型結果構文について、他動詞型と原因型を構造的に区別しようとする Huang (2006) を詳細に検討した。Huang (2006) では他動詞型と原因型を構造上区別しようとしているが、両構文においてそれらの主語は同様の構造位置（軽動詞 CAUSE の指定部）を占めるという主張は Sybesma (1999) と同様である。しかし、

(13) (14) (15) に見られる「逆行束縛」の許容度の違いに関しては、動作主が原因項と同様の構造位置を占めるという構造分析では説明できない。

動作主主語の他動詞型結果構文の構造分析 (4.4 節) に入る前に、次の 4.3 節では、動作主と原因項が異なる構造位置を占めると主張する藤田・松本 (2005) の構造分析を紹介する。そこで、動作主主語文と原因項主語文に見られる逆行束縛に対する許容度の違いを構造的に説明する。

4.3 逆行束縛から見る動作主と原因項

Fujita (1993, 1996)、藤田・松本 (2005) など一連の研究では (19) のような英語の二重目的語文や (20) のような心理動詞文、そして (21) のような日本語の使役文に見られる逆行束縛現象が考察されている。¹¹

(19) a. * Each other's friends (intentionally) gave Bill and Mary a book.

b. ? Each other's pictures gave Bill and Mary a book.

(Fujita 1996: 149)

(20) a. * Each other's friends fear John and Mary.

b. Each other's pictures frighten John and Mary.

(藤田・松本 2005: 140)

(21) a. *自分の母親が無理やり太郎に上京を思いとどまらせた。

b. 自分の母親 (の病状) が太郎に上京を思いとどまらせた。

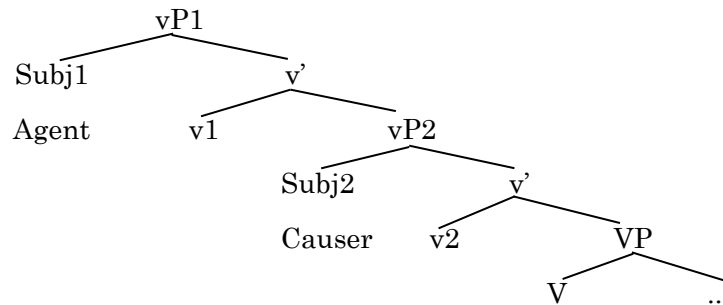
(藤田・松本 2005: 145)

上述の (18) が示す一般化の通り、ここの三つのミニマルペアの文法性の違いによって示されているのは、原因項主語文では逆行束縛が可能であるのに対し、動作主主語文では逆行束縛は許されないということである。前節の (16) が示したように、一般に照応語の先行詞は照応語を C 統御しなければならない。したがって、動作主主語内への逆行束縛が許されないのに対し、原因項主語内へは可能であるという対比は、統語構造上、原因項主語が動作主主語より下位にあることを示唆している。Fujita (1993, 1996)、藤田・松本

¹¹ 経験者目的語の心理動詞文に見られる逆行束縛現象に関しては Belletti & Rizzi (1988)、Campbell & Martin (1989) などによっても指摘されている。心理動詞文の逆行束縛現象に限ってこれらの先行研究で提案されている分析については後述の注 16 を参照。ここで挙げた例が示すように、逆行束縛は心理動詞文に限られる現象ではない。そのため、本研究は原因項主語文と動作主主語文の違いを重要視する藤田・松本 (2005) を支持する立場で議論を進める。

(2005) は、動作主が原因項の上位に存在すると主張し、次のような 3 層分裂 VP 構造を提案している。

(22) 3 層分裂 VP 構造



(藤田・松本 2005: 91)

(22) が示す 3 層分裂 VP 構造では、動作主 (Agent) は上位の軽動詞 v1 の指定部を占め、原因項 (Causer) は下位の軽動詞 v2 の指定部を占めることが示されている。この構造において、動作主主語は最初 vP2 の指定部に基底生成され、そこで、原因項解釈を受けてから、さらに vP1 の指定部に繰り上がって動作主解釈になると藤田・松本 (2005: 91) では考えられている。¹² そして、主語解釈が動作主ではなく原因項のみであっても、目的語に対する格付与は同様に生じるため、対格素性は v2 が担うと藤田・松本 (2005: 92) は主張している。3 層分裂 VP 構造の仮定に加え、藤田・松本 (2005) はさらに、目的語が与えられる格情報が実際に音声解釈部門へ送出されるかどうかを決定する、すなわち、目的語が付与される格情報を「活性化」、または「不活性化」する機能を果たす機能範疇 μ を次のように仮定している。

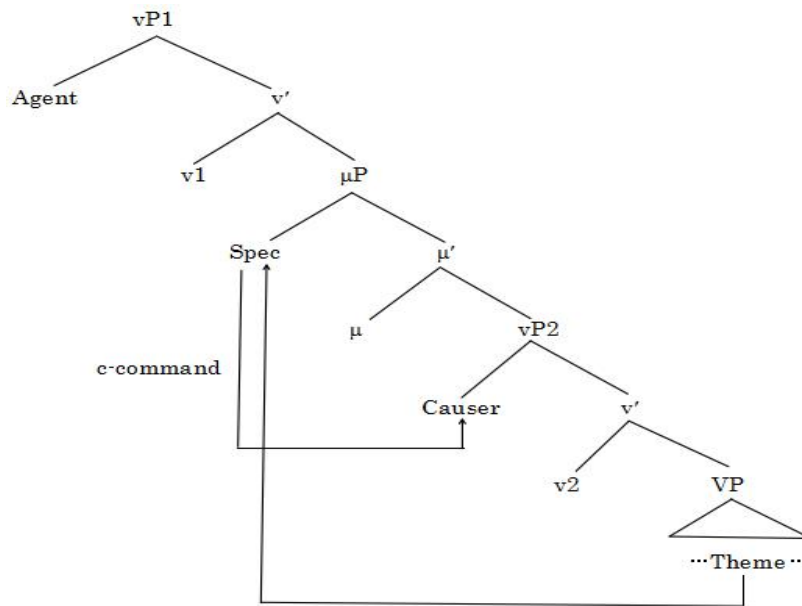
動詞から目的語に対して格付与が起きた場合、その与えられた格情報が実際に音声解釈部門へ送出されるかどうかを決定しているのが μ であると考えよう。 μ には格一致関係を解釈情報として「活性化」または「不活性化」する機能があり、…… (中略) この活性化・不活性化は、常に μ を介在した名詞句—動詞間の指定部—主要部 (Spec-head) 関係として実行されるため、実際の格標示の有無に関わらず、 $V \rightarrow \mu$ の主要部移動と μP -Spec への目的語移動は常に連動する。

(藤田・松本 2005: 96 - 97)

¹² 藤田・松本 (2005) では「動作主=原因項+意図性」 (p.45、90) と示されている。

要するに、 μ が格情報を活性化する場合、実質的に μ は、動詞と目的語の間の格照合を行うとされた AgrO と同じ機能を果たすことになる。¹³ それと同時に、 μ には格情報を不活性化する機能も加えられている。¹⁴ 上述のように、3 層分裂 VP 構造において目的語は v2 と格一致関係にある。すると、目的語の格情報を（不）活性化する μ を 3 層分裂 VP 構造に組み込むと、次のような構造配置になる。¹⁵

(23)



(藤田・松本 2005: 147)

(23) の構造では目的語は格情報の（不）活性化のため、 μ P-Spec へ移動することが示されている。この議論に影響を与えないため、v2→ μ の主要部移動は示されていない。この構造によって動作主主語文では逆行束縛が許されないのに対し、原因項主語文において逆行束縛が可能となることは次のように説明される。

¹³ 一致関係を果たす機能範疇 Agr を仮定した枠組みにおいては、AgrO が動詞と目的語の間の格照合を行う機能を果たすとされている (Chomsky 1995 など)。

¹⁴ 機能範疇 μ の仮定によって、従来名詞句の格に関して別々に扱われている現象は格情報の（不）活性化という形でそのまま μ に取り組むことが可能となる。たとえば、従来の受動態形態素分析という格吸収

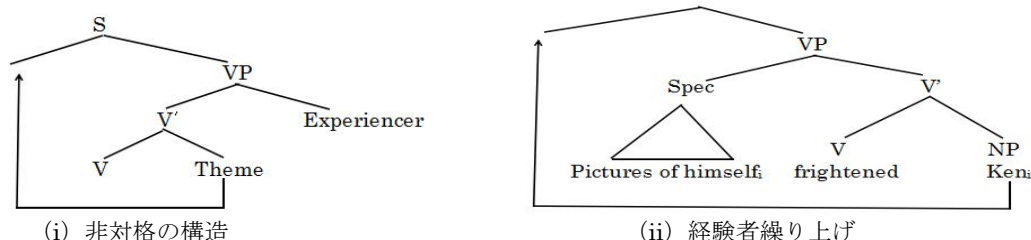
(Case absorption) は μ の不活性化に該当し、能動態では活性化すると考えられると藤田・松本 (2005) は主張している。そして藤田・松本 (2005) は μ を組み込んだ構造に基づいて、中間動詞、能格動詞の派生を論じ、機能範疇 μ の妥当性を裏付けている。詳しくは藤田・松本 (2005) (第 5 章) を参照されたい。

¹⁵ Fujita (1993, 1996) で示されている構造では目的語の格情報の一致関係を表す AgrO とされている。ここでは上述のように、目的語の格情報の一致関係だけではなく、格一致関係を解釈情報として「活性化」または「不活性化」する機能を果たすものとして、藤田・松本 (2005) に従い、機能範疇 μ とする。

μP の指定部への移動に伴い、目的語は μP の指定部で原因項 (Causer) を C 統御することになる。そこで、原因項主語文において逆行束縛が可能である。一方、動作主 (Agent) は μP よりさらに上位の $vP1$ の指定部にあるため、目的語が μP の指定部に移動していても、そこからは動作主 (Agent) を C 統御することはできない。そのため、動作主主語文では逆行束縛が許されないのである。このように、(18) の一般化は (23) に示されている構造配置によって自動的に導き出されることになる。¹⁶

なお、原因項主語文において $v2$ の指定部位置に基底生成した原因項 (Causer) は文が派生される際に、頭在的に文主語位置に移動しなければならない。つまり、(23) が示す構造において、目的語名詞句 (Theme) が μP -Spec 位置から統御しているのは、原因項主語のコピー (痕跡) であることになる。このことに関して、藤田・松本 (2005) は「コピー C 統御」 (Copy C-command) 及び「コピー束縛」 (Copy Binding)¹⁷ の考え方を採用している。(24) が示すように α が β のコピーを C 統御する場合、 α が β 自身を C 統御している

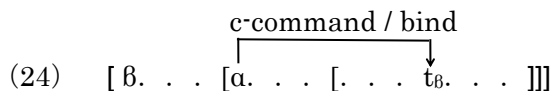
¹⁶ 一見束縛原理 (原理 A) に違反する心理動詞文に見られる逆行束縛現象については、Belletti & Rizzi (1988)、Campbell & Martin (1989)、Nakamura (1994) などによっても議論されている。Belletti & Rizzi (1988) はイタリア語の経験者目的語の心理動詞文に見られる逆行束縛現象について、非対格仮説 (Unaccusative Hypothesis) に基づき、経験者が目的語となる心理動詞文は非対格動詞の構造をなすと分析している。英語にも等しく当てはまると主張され、以下の樹形図 (i) が示すように目的語の経験者は構造上主語より高い位置にあるため、逆行束縛現象は実は束縛条件を満たしていると説明されている。



ただし、Belletti & Rizzi (1988) が主張する非対格の分析には多くの反例が提出され、問題があることが指摘されている (Campbell & Martin 1989, Nakamura 1994, Pesetsky 1995, Fujita 1996, 藤田・松本 2005 など)。非対格の分析の代案として、Campbell & Martin (1989)、Nakamura (1994) では経験者繰り上げ仮説が提案されている。たとえば「Pictures of himself_i frightened Ken_j」のような心理動詞文は樹形図 (ii) が示すように基底で他の他動詞と全く同じ構造を持つが、主題階層と一致するため、理論形式では目的語となる経験者が主語よりも高い位置に繰り上がる。そうすると、束縛原理を満たすことになり、逆行束縛が許容されるという。しかし、経験者繰り上げ仮説でも説明できない反例が指摘されている (中村 1997)。たとえば、「Ken_j's picture frightened him_i」は、もし目的語 him が主語より高い位置に繰り上がり、Ken を C 統御してしまう。そうすると束縛原理 C 違反となり、不適格な文となることを予測してしまうが、実際はこの文は適格な文である。このように目的語となる経験者が主語より高い位置に繰り上がるという分析は上述した Belletti & Rizzi (1988) が主張する非対格の分析と同様に問題がある。さらに、両分析で、逆行束縛が経験者目的語の心理動詞文が示す特性として論じられている。しかし、既に上で示したように、経験者目的語の心理動詞文に限らず、中国語原因項主語の結果構文や日本語の原因項主語文でも逆行束縛現象が見られる。したがって、中国語の結果構文を考察する際に、本研究は、心理動詞文を特別な構文と扱わず、動作主主語文と原因項主語文の区別を重要視する藤田・松本 (2005) の一連の研究を支持する立場を取る。

¹⁷ コピー C 統御: α が β のコピーを C 統御するとき、 α が β のコピーを C 統御する。コピー束縛: α が β のコピーを束縛するとき、 α が β のコピーを束縛する。

のと同様であるとする。



(藤田・松本 2005: 149)

このように考えることによって、(23) が示す構造において目的語 (Theme) が μ P-Spec 位置から原因項主語のコピー (痕跡) を C 統御することは、原因項自身を C 統御することと同様となる。そして、原因項主語文において逆行束縛が許容されるという事実を説明できる。¹⁸

以上、この節では、藤田・松本 (2005) が提案する 3 層分裂 VP 構造と機能範疇 μ について紹介した。要点をもう一度繰り返すと、動作主 (Agent) と原因項 (Causer) とは、異なる軽動詞に選択され、そして原因項は動作主の下位に存在するということである。このように動作主を選択する v1 と原因項を選択する v2 を区別することにより、動作主主語を取る使役動詞は、従来の vP/VP の 2 層分裂 VP 構造ではなく、3 層分裂 VP 構造をなすと精緻化することができる。さらに、目的語の格情報を (不) 活性化する機能範疇 μ を組み込むことによって、(23) が示すように、原因項主語文において逆行束縛が可能となり、動作主主語文では逆行束縛が不適格となるということが自然に説明されることになる。¹⁹

次節では、まず、本研究これまで分析してきた中国語結果構文の構造によって藤田・松本 (2005) が仮定する機能範疇 μ が支持されることを示す。次に、藤田・松本 (2005) が

¹⁸ 藤田・松本 (2005: 150-151) でも指摘されているように、コピー束縛を無制限に適用すると、過剰生成の問題が生じるように見える。

- (i) a. Pictures of himself_i annoy Bill_i.
b. *Himself_i annoys Bill_i.
- (ii) a. Stories of herself_i made Nancy_i cry all day.
b. *Herself_i made Nancy_i cry all day.

(ia) (iia) では目的語の Bill や Nancy はそれぞれ himself や herself をコピー束縛しており、これらの文の文法性は正しく予測されるが、同じようにして、(ib) (iib) でも Bill や Nancy はそれぞれ himself や herself をコピー束縛してしまうことになる。しかし、(ib) (iib) は非文法的である。このことに関して、藤田・松本 (2005: 150) は次のように説明している。(ib) (iib) では、目的語 Bill や Nancy は格情報の活性化のため、 μ の指定部に移動して、そこでは確かに himself や herself の痕跡 (t) をコピー束縛する。しかし、主語位置に移動した himself や herself によって Bill や Nancy も束縛されることになる。これが束縛原理 C/B の違反を引き起こすと考えられる。そのため、(ib) (iib) は非文として排除されるのである。

¹⁹ 藤田・松本 (2005) は 3 層分裂 VP 構造と機能範疇 μ を仮定することによって、英語の中間動詞構文、能格動詞構文、心理動詞文、二重目的語動詞構文について統一した理論で説明が与えられることを論じ、(23) の構造の妥当性を示している。詳しい分析は藤田・松本 (2005) (第 5、6、7 章) を参照されたい。

提案する3層分裂VP構造が中国語動作主主語の他動詞型結果構文にも当てはまることを論じる。

4.4 中国語動作主主語の他動詞型結果構文の構造構築

4.4.1 中国語における機能範疇 μ

藤田・松本(2005)では機能範疇 μ は目的語の格情報が解釈部門に送出される前に、それを活性化する、または不活性化する機能を果たすものとして仮定されている。そして、実際の格標示の有無に関わらず、 $V \rightarrow \mu$ の主要部移動と $\mu P \cdot Spec$ への目的語移動は常に連動するという。中国語では格の標示はないが、名詞句が格によって統語構造上認可される考えられる。したがって、中国語においても、目的語の格情報を活性化する、または不活性化する機能範疇 μ が存在すると考えるのが自然であろう。以下では、本研究これまで分析してきた結果構文の構造に機能範疇 μ を組み込み、中国語にも機能範疇 μ を導入することが妥当であることを示す。

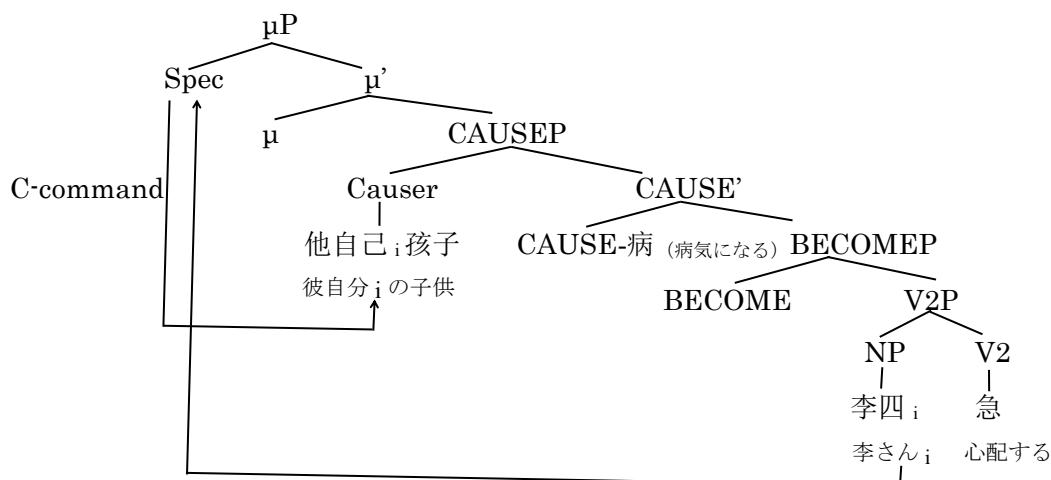
まず、原因項主語の結果構文については、(14) (15) ((25) (26)として再掲)が示すように、原因項主語の他動詞型結果構文と原因型結果構文とは共通して逆行束縛が許容される。

- (25) 他自己_i孩子 病 急 了 李四_i。
彼自分自身_iの子供 病気になる・心配する-ASP 李さん_i
彼自分自身_iの子供が病気になったことが原因で李さん_iは心配した。
- (26) 他自己_i哥哥的恶作剧 吓 哭 了 李四_i。
彼自分自身_iの兄の悪ふざけ 驚く・泣く-ASP 李さん_i
彼自分自身_iの兄の悪ふざけが原因で李さん_iは驚いて泣いた。

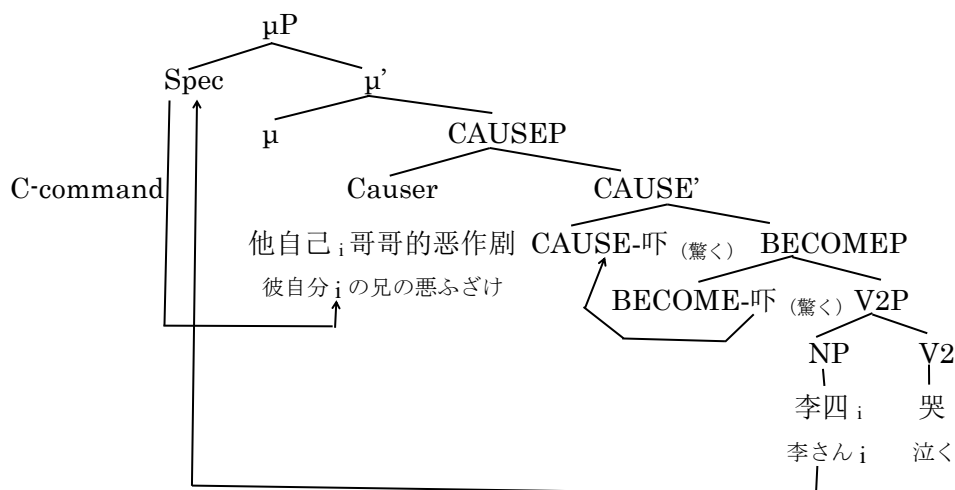
上述のように、Huang(2006)が提案する他動詞型結果構文の分析は原因項主語の他動詞型結果構文に当てはまると考えられる。(25)の原因項主語の他動詞型結果構文と(26)の原因型結果構文において、V1と軽動詞との併合の仕方は異なるものの、逆行束縛に対する許容度は共通する。このことに関して、機能範疇 μ を仮定すると、藤田・松本(2005)で考察されている英語や日本語の原因項主語文と同様の構造配置によって説明されることになる。機能範疇 μ を組み込んだそれぞれの構造を(27) (28)のように示す。²⁰

²⁰ 第2章で論じたように、V1が軽動詞 BECOME と併合するか否かに関わらず、状態変化を表す結果述語 R(ここでは V2)が BECOME と併合する。この議論に影響を与えないため、V2と軽動詞 BECOME

(27) 原因項主語の他動詞型結果構文



(28) 原因型結果構文



(27) (28) が示す構造に基づく、(25) の原因項主語の他動詞型結果構文と (26) の原因型結果構文において、逆行束縛が許容されることは、(23) の構造によって説明された英語や日本語の原因項主語文の逆向束縛現象と同様に説明される。すなわち、原因項「他自己孩子（彼自分の子供）」「他自己哥哥的恶作剧（彼自分の兄の恶ふざけ）」に含まれる照応語「他自己（彼自己）」は、軽動詞 CAUSE から付与された対格情報の活性化のため、 μP -Spec へ移動した目的語「李四（李先生）」によって C 統御されている。そのため、束縛原則に違反せずに逆行束縛が成立するのである。

このように、中国語にも機能範疇 μ を仮定することによって、原因項主語の結果構文に逆

との併合は表示しない。また、説明を容易にするため、CAUSE $\rightarrow\mu$ の主要部移動も表示しないことにする。以下同様である。

行束縛が許容されることは英語や日本語と統一的に説明されることになる。

次に、中国語にも機能範疇 μ が存在することを支持するもう一つの証拠を示す。(27)、(28) が示す目的語の対格情報が活性化される場合と平行して、目的語の対格情報が不活性化される場合もあるということを挙げる。それは第2章で考察した(29a)のような「受動型の自動詞型結果構文」に残されている主語名詞句の格の問題に関わる。

(29) a. 玻璃杯 打 破 了。

グラス 叩く-割れる-ASP

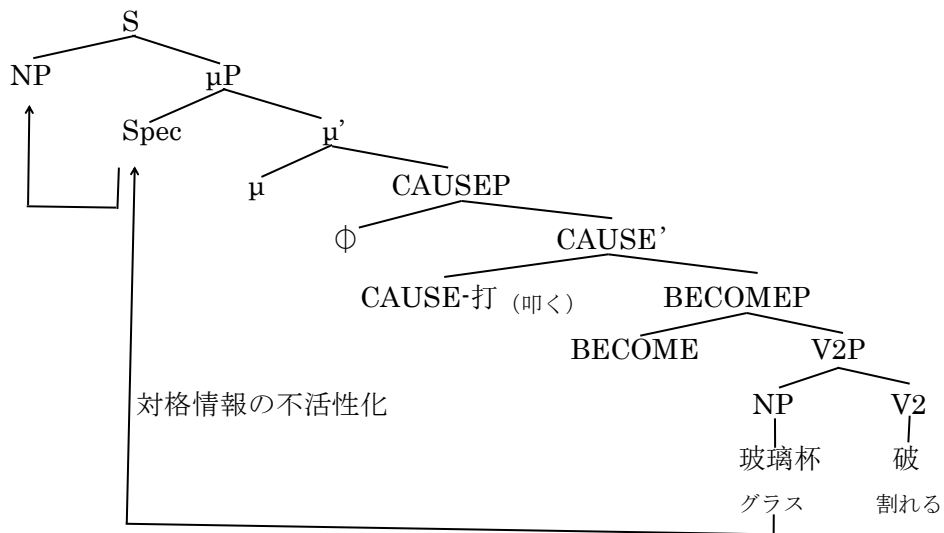
グラスが叩いて割れた。

b. [CAUSEP Φ CAUSE-打 [BECOME_P BECOME [V_{2P} 玻璃杯 破了]]]

第2章では(29a)のような自動詞型結果構文は(29b)のような構造をなすと分析を行った。軽動詞 CAUSE によって導入される原因項が「 Φ 」となっているため、実際に文が産出される際には、目的語名詞句「玻璃杯(グラス)」が主語位置に移動するという構造の分析を提案した。ところが、ここの構造分析には次のように目的語名詞句の対格に関する問題が残されている。このタイプの自動詞型結果構文においては対格を付与する軽動詞 CAUSE が存在する。すると、目的語名詞句「玻璃杯(グラス)」は軽動詞 CAUSE から対格を付与されているはずである。もし文が派生される際に、目的語名詞句が主語位置に移動していくとすると、主語位置で主格も付与されるため、同一の名詞句が同時に主格と対格の両方を担うことになる。このことは、本研究第2章で提案した構造の妥当性が問われる問題となっている。

中国語にも目的語の格情報を活性化するまたは不活性化する機能範疇 μ が存在すると仮定すると、ここの問題は自然に解決される。すなわち、(29a)タイプの自動詞型結果構文において、機能範疇 μ は目的語の対格情報を不活性化する機能を果たすと考えれば、同一の名詞句が同時に主格と対格を担うという格重複の問題は解消されるのである。つまり、目的語名詞句が、 μ P-Spec の位置へ移動し、そこで軽動詞 CAUSE から付与された対格の格情報が不活性化される。そこから主語位置に移動して、主語位置で主格を付与され、(29a)のような自動詞型結果構文が産出されるということである。したがって、(29a)タイプの自動詞型結果構文の構造に μ を組み込めば、次のように精緻化することができる。

(30) 受動型の自動詞型結果構文の構造構築



このように中国語にも目的語の格情報を活性化する、または不活性化する機能範疇 μ を仮定することによって、第2章で考察した「受動型の自動詞型結果構文」に残されている目的語名詞句に関わる対格の問題が自然に説明される。これらのことから、機能範疇 μ の妥当性が支持されると考えられる。

ちなみに、Chomsky (1995) の格理論 (Case theory) によると、構造格のみが格情報の照合 (Case checking) を行い、指定部・主要部の一致関係 (Spec-head agreement) が要求される。逆に言うと、動詞語彙的に付与される内在格は、構造上機能範疇 μ による格情報の (不) 活性化は必要ではないということである (Fujita 1996: 161、藤田・松本 2005: 175)。したがって、内在格の一つである部分格を担う名詞句は、機能範疇 μ の指定部に移動することはない。すでに第3章において議論したように、所有者上昇によって派生された非対格の他動詞型結果構文では、目的語位置を占める名詞句は動詞から部分格を付与される。そうすると、非対格の他動詞型結果構文において、目的語名詞句は μ P-Specに移動することではなく、元の位置に留まる。つまり、非対格の他動詞型結果構文において目的語名詞句は派生のどの段階でも主語名詞句をC統御することはないということである。一方、目的語名詞句の所有格の位置には所有者上昇によって残された痕跡がある。そのため、所有者の痕跡が含まれる目的語名詞句は派生のどの段階においても主語名詞句によってC統御されていなければならない。これらのことは合致する。そこで、中国語に目的語の格情報を (不) 活性化する機能範疇 μ を仮定することは、目的語が部分格を付与される非対格の他動詞型結果構文の構文分析に影響を与えることはない。ここでは機能範疇 μ を組み込んで精緻化した

非対格の他動詞型結果構文の構造を示さないことにする。²¹

この節では、藤田・松本（2005）などの一連の研究で提案されている機能範疇 μ が格標示を持たない中国語にも存在するという仮説を導入した。そして、本研究これまで分析してきた結果構文の構造に機能範疇 μ を組み込んで精緻化することを通してその妥当性を検証した。機能範疇 μ を仮定することによって、原因項主語の結果構文において逆行束縛が許容される現象は、英語や日本語の原因項主語文に見られる逆行束縛現象と同様に説明されることになる。そして、機能範疇 μ の存在により、第2章で提案した受動型の自動詞型結果構文の構造に残されている目的語名詞句の対格に関わる問題も解決することができる。一方、第3章で考察した、目的語名詞句が「部分格」を付与される非対格の他動詞型結果構文の構造分析には機能範疇 μ の存在は影響を与えることがない。ここまでの議論から言えるように、中国語にも目的語の格情報を（不）活性化する機能範疇 μ が存在するという仮定は、本研究がこれまで行ってきた結果構文の構造分析をサポートすることになると同時に、結果構文の構造分析によって支持もされる。

さて、もし中国語動作主主語の他動詞型結果構文の構造に、藤田・松本（2005）が提案する3層分裂VP構造が当てはまるとすると、動作主主語の結果構文と原因項主語の結果構文が示す逆行束縛に対する許容度の違いについても、英語や日本語と同様に無理なく説明することができる。次節では、3層分裂構造が中国語動作主主語の他動詞型結果構文に当てはまることを論じる。また、動作主主語の他動詞型結果構文から3層分裂構造が支持される事実を提示する。

4.4.2 動作主主語の他動詞型結果構文と3層分裂VP構造

先述の通り、藤田・松本（2005）など一連の研究では、原因項と動作主は統語構造上異なる位置を占めると主張されている。原因項を選択する軽動詞v2はCAUSEに当たるものと考えられる。動作主を選択する軽動詞v1がどのような項目かについては、藤田・松本（2005）では明確に言及されていない。しかし、動作主解釈は原因項が意志・意図性を持ち、主体的にその使役行為を行う場合に成立すると藤田・松本（2005）は主張し、(31)のように提示している。

(31) 動作主＝原因項＋意図性

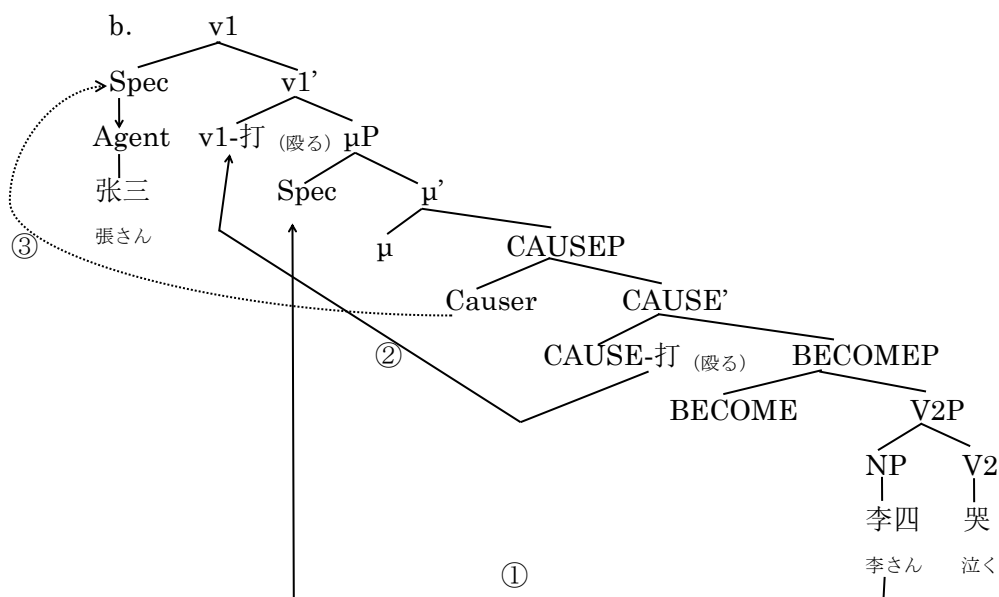
(藤田・松本 2005: 45、90)

²¹ 機能範疇 μ を仮定することは、第2章で考察した非対格の構造をなす自動詞型結果構文の構造にも影響を与えることがない。そのため、 μ を組み込んで精緻化した非対格の自動詞型結果構文の構造も示さないことにする。

(31) で示されているのは、動作主は原因項が意図性を獲得したものとして特徴づけられるということである。(31)からは、藤田・松本(2005)が提案する3層分裂VP構造の上位にあるv1が意図性(意志性)を表す機能範疇として捉えられる。

以上の議論を踏まえ、以下では、中国語動作主主語の他動詞型結果構文について3層分裂VP構造の分析を提案する。まず、3層分裂VP構造を用いると、中国語動作主主語の他動詞型結果構文の構造構築は次のように提示される。

- (32) a. 张三 打 哭 了 李四。
 張さん 殴る・泣く-ASP 李さん
 張さんは李さんを殴って泣かせた。



①は目的語の格情報の活性化のための移動を表す。②は音韻形態がゼロであるv1の音声化のための移動を表す。②が示す移動は、実際はμからv1に移動することになるが、この議論に影響を与えないため、CAUSE→μの主要部移動はここでは示さない。③は動作主の意味役割の派生を表す。すなわち、原因項(Causer)がv1の指定部に移動してv1から意志性を獲得し、動作主(Agent)として派生されるということである。なお、これらの移動操作に①、②、③をつけているのは、説明を簡単にするためである。派生の順番を表すわけではない。

次の議論では、(32b)が示す動作主主語の他動詞型結果構文の構造構築に基づくと、4.2節で考察してきた動作主主語の他動詞型結果構文の現象を合理的に説明することが可能であることを示す。

まず、原因項主語の結果構文において逆行束縛が許容されるのに対し、動作主主語の他動詞型結果構文では逆行束縛が許されないという事実を提示した。(32b) が示す 3 層分裂 VP 構造を仮定すると、上述の藤田・松本 (2005) で考察されている英語や日本語の現象と同様の構造配置によってそのことが説明できる。移動操作①が示すように、格情報の活性化のため、目的語名詞句は μP の指定部に移動する。目的語名詞句は μ の指定部位置からその下位に生成する原因項 (Causer) を C 統御する。そのため、(27) (28) が示すように、原因項主語の結果構文では逆行束縛が許容される。一方、動作主 (Agent) は μP の指定部より上位である $v1P$ の指定部にある。目的語名詞句は μP の指定部に移動しても動作主を C 統御できない。そのため、動作主主語の他動詞型結果構文においては逆行束縛は許されないことになる。

次に、Huang (2006) の考察から示唆されているように、動作主主語の他動詞型結果構文では V1 が非能格動詞に限られる。V1 が非対格動詞である場合は原因項主語の他動詞型結果構文となる。

- (33) 张三 故意／不小心 打 哭 了 李四。= (10)
 張さん わざと／不注意で 殴る・泣く・ASP 李さん
 張さんは わざと／不注意で 李さんを殴って泣かせた。
- (34) *张三 故意／不小心 病 急 了 他的家人。= (11)
 張さん わざと／不注意で 病気になる・心配する・ASP 彼の家族
 (意図する意味：張さんは わざと／不注意で 病気になって彼の家族を心配させた。)

このことについては、(32b) が示す構造構築における移動操作②によって次のように説明することが可能である。岸本 (2005) など一連の研究で、意図性が非対格動詞と非能格動詞を分ける意味的な変数 (semantic parameter) であることが考察されている。すなわち、非能格動詞は意図性を持ち、非対格動詞は意図性を持たないと一般的に言える。また、上述のように、 $v1$ はその指定部に意図性をもたらす機能範疇である。つまり、 $v1$ は意図性を要求する、またはそれを有する機能範疇として考えることができる。これらのことを踏まえて、移動操作②を検討しよう。

移動操作②ではゼロ形態 $v1$ の音声化のため、V1 が $v1$ と併合することが示されている。V1- $v1$ の併合が成り立つかどうかは両者の整合性によると考えられる。 $v1$ は意図性を要求するまたは有する機能範疇であるとする、もし V1 が意図性と整合しない非対格動詞であ

れば、V1-v1 の併合は成り立たない。そうすると、文の派生は破綻し、動作主主語の他動詞型結果構文は産出されないことになる。逆に言うと、V1 が非対格動詞であれば、構造上 v1 の存在は不可能となる。そのため、主語位置に意図性を持つことが可能な人間名詞句がきても、(34) が示すように、意図性を持たない原因項としか解釈できない原因項主語の結果構文となるのである。

このように、(32b) が示す構造構築における V1-v1 の併合を想定すれば、動作主主語の他動詞型結果構文において V1 が意志性と整合する非能格動詞（他動詞）でなければならぬことが自然に導き出される。このことは v2 (CAUSE) の上位に意図性を表す v1 が存在することを支持する事実となる。

4.5 まとめ

本章では、動作主主語の他動詞型結果構文の構造構築について議論を進めてきた。動作主主語の他動詞型結果構文は原因項主語の結果構文と共通して CAUSE 型であり、動作主主語と原因項主語とは同様の構造位置（軽動詞 CAUSE の指定部）を占めると Sybesma (1999)、Huang (2006) では分析されてきた。しかし、動作主と原因項を統語構造上で区別しなければ、動作主主語の結果構文と原因項主語の結果構文が示す、「逆行束縛 (backward binding)」に対する許容度の違いは説明できない。本章は、動作主と原因項が異なる構造位置に生成すると主張する藤田・松本 (2005) の提案を中国語の結果構文の構造分析に導入した。藤田・松本 (2005) が提案する 3 層分裂 VP 構造が動作主主語の他動詞型結果構文に当てはまることを論じた。そして、中国語動作主主語の他動詞型結果構文において V1 が非能格動詞に限られる事実によって 3 層分裂 VP 構造が支持されることを示した。

第 2 章から本章にかけては中国語の状態変化の結果構文について軽動詞の併合に基づき構造的分析を行ってきた。次章では、状態変化の結果構文と平行して、非対格の特性を示す場所変化の結果構文について構造的分析を試みる。

第5章 移動様態動詞の場所変化結果構文の構造構築と非対格性

5.1 はじめに

本研究は第2章から第4章にかけて中国語の状態変化の結果構文についてそれらの形成と構造を軽動詞併合の分析に基づき考察してきた。中国語の伝統的な文法研究では(1a)が示す状態変化を表す「結果補語」表現(本研究これまで考察してきた結果構文)に対し、(1b)のような場所変化を表す表現を「方向補語」表現として区別している(朱 1982、刘 1998 など)。

- (1) a. 许多人 跑 累 了。
 たくさんの人 走る・疲れる・ASP
 たくさんの人が走って疲れた。
- b. 许多人 跑 进 房间 了。
 たくさんの人 走る・入る 部屋 ASP
 たくさんの人が部屋に走って入った。

(1a) と (1b) では、結果を表す述語が、「累(疲れる)」のように状態変化を表すか、「进房间(部屋に入る)」のように場所変化を表すかという点で異なる。しかし、後述するように、状態変化と場所変化という表す意味は異なるものの、(1a) と (1b) は非対格の特性を示すという点で共通する。本章は(1b)のような場所変化の結果構文について、その形成と構造を軽動詞(GO)との併合に基づき分析できることを主張する。

本章の構成は以下の通りである。まず、5.2 節で、本研究これまで考察してきた状態変化の結果構文と対照して、場所変化の結果構文の構文的特徴を明らかにする。次に、5.3 節では、本稿が考察する場所変化の結果構文について構造的分析を行った先行研究を検討し、それらの問題点を指摘する。その上で、5.4 節では、英語や日本語で観察されている類似現象(移動様態動詞が用いられる場所変化表現)の構造について、軽動詞 GO との併合分析を中心に概観する。5.4 節の議論を踏まえ、続く 5.5 節では、中国語場所変化の結果構文が英語や日本語と統一的に分析できることを論じる。具体的には、非対格の特性を示す中国語場所変化の結果構文は、日本語と共通して非対格の特性を持つ主要部が顕在的に存在する場合もあるが、英語と共通して軽動詞 GO として非顕在的に存在する場合もあることを示す。最後に、5.6 節では本章の分析をまとめる。

5.2 中国語場所変化結果構文の構文的特徴

この節では、状態変化の結果構文と対照しながら、場所変化の結果構文の構文的特徴を考察する。

本研究第3章(3.5.2節)においても述べたように、中国語の非対格動詞の場合、その唯一の項が文の表層において目的語位置に現れる、いわゆる表層非対格現象が成立可能である。この現象は中国語の非対格性を示す文法現象だとされている(Sybesma1999、楊1999、徐2001など)。たとえば、非対格の構造をなす(1a)((2a)として再掲)では、(2b)が示すように、その唯一の項が目的語位置に現れるという表層非対格現象が成立する。

(2) a. 许多人 跑 累 了。

たくさんの人 走る・疲れる-ASP

たくさんの人が走って疲れた。

b. 跑 累 了 许多人。

走る・疲れる-ASP たくさんの人

たくさんの人が走って疲れた。

状態変化の自動詞型結果構文と同様に、場所変化の結果構文(1b)(3aとして再掲)でも、(3b)が示すように表層非対格現象が起こりうる。

(3) a. 许多人 跑 进 房间 了。

たくさんの人 走る・入る 部屋 ASP

たくさんの人が走って部屋に入った。

b. 跑 进 房间 了 许多人。

走る・入る 部屋 ASP たくさんの人

たくさんの人が部屋に走ってに入った。

(3b)のように表層非対格現象が成立することから、(3a)の場所変化の結果構文は非対格の構造をなすと考えられる。そこで、(3a)のような場所変化の結果構文は、どのような構造の下で非対格の特性を示すのであろうか。(3a)は(2a)と同様に、動詞「跑(走る)」が軽動詞 BECOME と併合して非対格の構造をなすのだろうか。状態変化の結果構文と場所変化の結果構文をさらに詳細に対照してみると、両構文には次のような二つの違いが観察される。

まず一つ目の違いとして、両構文で表層非対格現象が成立する際に、語順の違いが見られる。状態変化の結果構文では、表層非対格現象が成り立つ場合には(2b)のように、その唯一の項はVR構造の目的語位置に現れる。しかし、(4)のように動詞V1の直後に現れることは許容されない。

- (4) * 跑 了 许多人 累。
走る-ASP たくさんの人 疲れる
(意図する意味: たくさんの人が走って疲れた。)

一方、場所変化の結果構文ではどうであろうか。表層非対格現象が現れる際に、その唯一の項は、状態変化の結果構文と同様の語順を示す(3b)の他に、(5a)のように動詞V1の直後に現れることも可能である。そして、場所表現「房间(部屋)」が文頭に現れる(5b)のような語順の文も許容される。

- (5) a. 跑 了 许多人 进 房间。
走る-ASP たくさんの人 入る 部屋
たくさんの人が走って部屋の中に入った。
b. 房间 跑 进 了 许多人。
部屋 走る-入る-ASP たくさんの人
部屋にはたくさんの人が走って入った。

二つ目の違いとして、両構文で用いられる動詞V1に対する意味的制限の違いがある。Huang(2006)でも指摘されているように、状態変化の結果構文では、動詞V1が上述の「跑(走る)」のような移動の様態を表す動詞のほか、「笑(笑う)」や「哭(泣く)」などの行為(活動)動詞も許容される。

- (6) a. 许多人 哭 累 了。
たくさんの人 泣く-疲れる-ASP
たくさんの人が泣いて疲れた。
b. 哭 累 了 许多人。
泣く-疲れる-ASP たくさんの人
たくさんの人が泣いて疲れた。

しかし、場所変化の結果構文では、「笑（笑う）」や「哭（泣く）」などの行為動詞が用いられると、表層非対格現象は成立しなくなる。

- (7) a. ?*许多人 笑 进 了 房间。
 たくさんの人 笑う-入る-ASP 部屋
 (意図する意味: たくさんの人が笑いながら部屋に入った。)
- b. ?*笑 进 房间 了 许多人。
 笑う-入る 部屋 ASP たくさん
 (意図する意味: たくさんの人が部屋に笑いながら入った。)
- c. * 笑 了 许多人 进 房间。
 笑う-ASP たくさんの人 入る 部屋
 (意図する意味: たくさんの人が笑いながら部屋に入った。)
- d. * 房间 笑 进 了 许多人。
 部屋 笑う-入る-ASP たくさんの人
 (意図する意味: 部屋にはたくさんの人が笑いながら入った。)

表層非対格現象が許容される場所変化の結果構文に用いられる動詞を具体的に調べると、「跑（走る）、走（歩く）、爬（這う）、跳（跳ぶ）、滾（転がる）、飞（飛ぶ）、飄（漂う）、扑、冲、闯（突進する）」など「移動の様態を表す動詞」（verbs of manner of motion）に限られることが分かる。¹ 本稿はこのタイプの場所変化結果構文を「移動様態動詞の場所変化結果構文」と呼ぶ。

以上、本節では、状態変化の結果構文と対照して、場所変化の結果構文の特徴について考察した。場所変化の結果構文では表層非対格現象が成立し、非対格の構造をなすと考えられる。その上で、場所変化の結果構文で表層非対格現象が現れる際に、三通りの語順（その唯一の項は、動詞 V1 と場所変化結果述語の複合体の目的語位置に現れる語順、動詞 V1 の直後に現れる語順、場所表現が文頭に現れる語順）が可能であること、及び、動詞 V1 が移動様態動詞に限られるという 2 点の特徴を考察した。

中国語の場所変化の結果構文に関して構造的分析を行った先行研究は管見の限り希であり、何（2000）、沈・何・顾（2001）² しか見当たらない。次節では何（2000）の分析を検

¹ 移動様態動詞（verbs of manner of motion）という用語は L & RH（1995）による。

² 沈・何・顾（2001）の第十五章は何（2000）と同様の内容である。そこで、以下では何（2000）のみを取り上げて検討する。

討する。その分析ではこの節で考察した非対格の特性を示す場所変化の結果構文の特徴を説明できないことを示し、他の経験的問題も指摘する。その上で、5.4 節では、英語や日本語で観察されている同様の現象（移動様態動詞の場所変化表現の非対格性）についての議論を紹介し、特に軽動詞 GO との併合分析を詳細に検討する。

5.3 中国語場所変化表現の構造的分析

何（2000）は中国語において、（8a、b、c、d）が示すように異なる語順が許容される現象に関して、構造的分析を行っている。

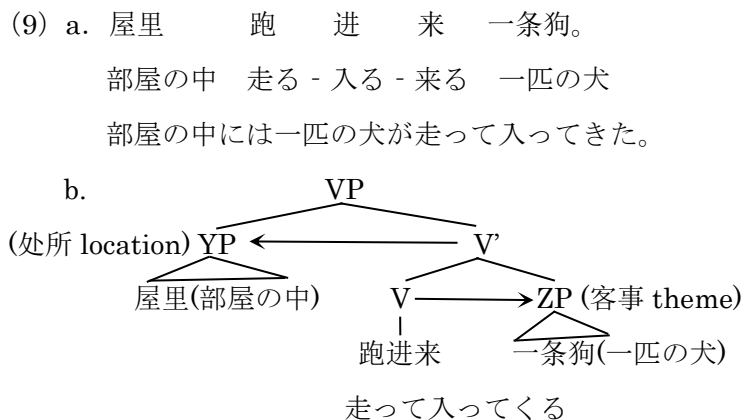
- (8) a. 一条狗 跑 进 屋里 来。
一匹の犬 走る・入る 部屋の中 来る
一匹の犬が部屋の中に走って入ってきた。
- b. 跑 进 屋里 来 一条狗。
走る・入る 部屋の中 来る 一匹の犬
一匹の犬が部屋の中に走って入ってきた。
- c. 跑 了 一条狗 进 屋里 来。
走る・ASP 一匹の犬 入る 部屋の中 来る
一匹の犬が走って部屋の中に入ってきた。
- d. 屋里 跑 进 来 一条狗。
部屋の中 走る - 入る - 来る 一匹の犬
部屋の中には一匹の犬が走って入ってきた。

（何 2000: 111）

（8a、b、c、d）が示す四つの語順は、5.2 節で考察した非対格の特性を示す場所変化の結果構文（3a）とそれに対応する三通りの語順の表層非対格現象（3b）（5a、b）と同様の対応関係にあると考えられる。しかし、何（2000）はこれらの異なる語順の文に関して、非対格性の視点からではなく、意味役割のハイアラーキ（thematic hierarchy, Jackendoff 1972）と意味役割付与の統一性仮説（The Uniform Theta Assignment Hypothesis, Baker 1988）に基づいて考察している。

すなわち、「Agent>Experiencer>Goal>Source>Location>Theme」という意味役割のハイアラーキに加え、同じ意味役割関係が基底の同じ統語構造関係で示されるという趣旨の

意味役割付与の統一性仮説³に基づき、何（2000）は上述（8d）（（9a）として再掲）を基本語順とし、（8a、b、c）はいずれも（9b）が示す基底構造から、動詞主要部移動、または名詞句の移動によって派生されるものと分析している。

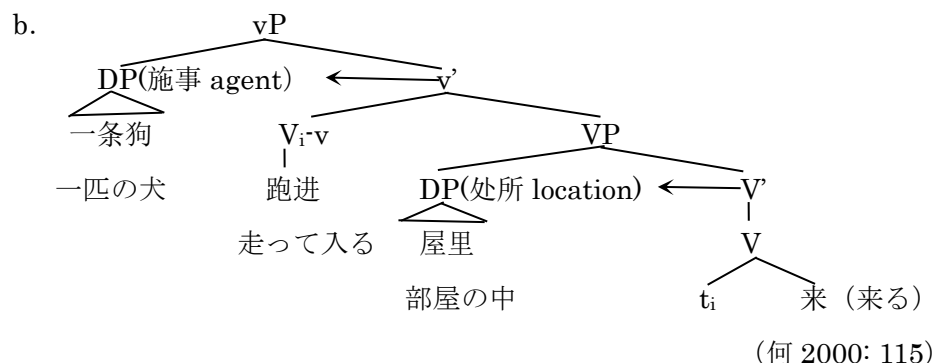


（何 2000: 114、日本語のグロスは筆者による。以下同様）

（9b）が示す構造では、矢印（←、→）が意味役割の付与を表す。V がその補部 ZP に対象（Theme）の意味役割を付与し、V' はその指定部 YP に場所（Location）の意味役割を付与する。この構造で示されている意味役割関係は意味役割のハイアラキーと意味役割付与の統一性と一致する。それゆえ、（9b）が示す基底構造に対応する（9a）の文が基本語順だと何（2000）は主張している。その上で、（8a）（（10a）として再掲）の語順の文は（9b）の基底構造に軽動詞が加えられて派生される（10b）の構造を持つと分析している。

- (10) a. 一条狗 跑 进 屋里 来。
 一匹の犬 走る・入る 部屋の中 来る
 一匹の犬が部屋の中に走って入ってきた。

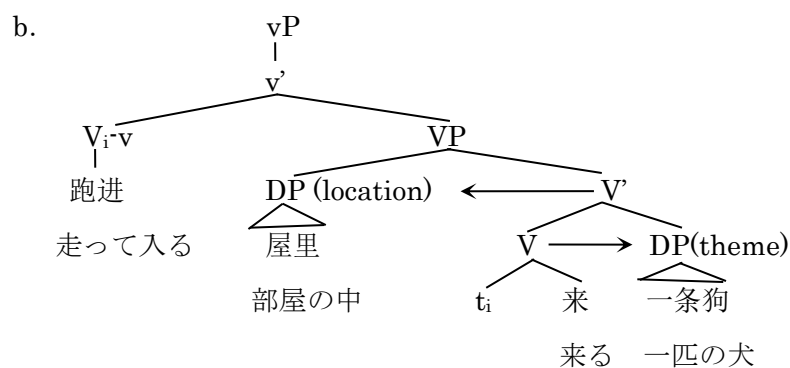
³ 意味役割付与の統一性仮説（The Uniform Theta Assignment Hypothesis）とは次のように規定されているものである。Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-structure (Baker 1988: 46).



軽動詞理論では、外的意味役割 (agent) は動詞 V ではなく、軽動詞 v によって付与され
ると考えられている (Chomsky 1995、Radford 1997 など)。そのため、文頭の名詞句「一
条狗 (一匹の犬)」は軽動詞 vP の指定部に生起し、軽動詞 v から agent の意味役割を付与
される。音韻形態がゼロである軽動詞 v の音声化のため、動詞 V (「跑进 (走って入る)」)
は軽動詞 v に移動して併合する。そうして、(10a) の語順の文が産出される。

次に、(8b) ((11a) として再掲) の語順の文は、(9b) が示す基底構造に外的意味役
割を付与しない軽動詞 v が加えられて派生される (11b) の構造を持つとしている。

- (11) a. 跑 进 屋 里 来 一条狗。
走 入 部 屋 の 中 来 一 匹 の 犬
一匹の犬が部屋の中に走って入ってきた。



(何 2000: 116) ⁴

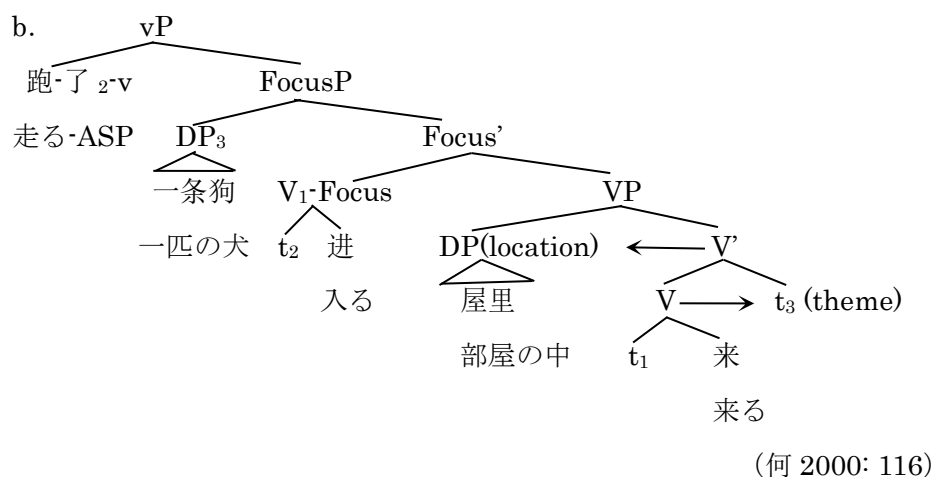
(11b) が示す構造では、VP の上位に外的意味役割を付与しない軽動詞 v が存在する。
動詞 V (「跑进 (走って入る)」) が軽動詞 v に移動して併合し、(11a) の語順の文が派

⁴ 何 (2000: 116) では (11b) 及び後述の (12b) が示す構造においては意味役割付与を表す矢印 (←、→) が示されていない。ここでは分かりやすくするため、上述の (9b) (10b) と統一して矢印を加えて示す。

生されることになる。

さらに、(8c) ((12a) として再掲) の語順の文については、(9b) が示す構造の VP の上位に焦点を表す機能範疇 (Focus) が存在し、さらに FocusP の上位に外的意味役割を付与しない軽動詞 *v* が存在するという (12b) のような *v*P-FocusP-VP の分裂構造を提示している。

- (12) a. 跑 了 一条狗 进 屋里 来。
 走る・ASP 一匹の犬 入る 部屋の中 来る
 一匹の犬が走って部屋の中に入ってきた。



(12b) が示す構造では、対象意味役割 (theme) を付与されている名詞句 (「一条狗 (一匹の犬)」) が焦点を表す機能範疇 FocusP の指定部に移動して焦点となっていることが示されている。そして、音韻形態がゼロである Focus の音声化のため、VP 内にある動詞 V (「跑进 (走って入る)」) が Focus に移動して併合している。さらに、FocusP の上位に存在する軽動詞 *v* も音韻形態がゼロであり独立して存在できない。そのため、Focus に移動した動詞 V (「跑进 (走って入る)」) から「跑 (走る)」だけが上位の軽動詞 *v* に移動して併合する。こうして、(12a) の語順の文が産出されることになる。⁵

⁵ 何 (2000) では (12a) と平行して以下のような文も考察されている。

- (i) 有 一条狗 跑 进 屋里 来。
 ある 一匹の犬 走る - 入る 部屋の中 来る
 ある一匹の犬が部屋の中に走って入ってきた。

(i) は (12b) が示す構造における上位の軽動詞 *v* が「有 (ある)」として実現される場合の語順だと何 (2000: 116) は分析している。しかし、後述するように、何 (2000) が提案するこれらの構造分析には問題が残る。そこで、「有 (ある)」が果たして軽動詞として構造的機能を果たすかについてもさらに検討

以上のように、中国語場所変化の表現に見られる (8a、b、c、d) のような異なる語順の文について、何 (2000) はそれぞれが異なる構造をなしていると分析している。以下では何 (2000) の分析について三つの問題点を指摘する。

まず、一つ目は、5.2 節で考察した、動詞 V が移動の様態を表す動詞に限られることについて、何 (2000) の分析では説明できないことである。たとえば、何 (2000) で分析されている (8a、b、c、d) のような語順の文において、もし移動の様態を表す動詞ではなく、「吠 (吠える)」のような活動動詞が (13) のように用いられると、いずれも 5.2 節で考察した通り成り立たなくなる。

- (13) a. * 一条狗 吠 进 屋里 来。
一匹の犬 吠える-入る 部屋の中 来る
(意図する意味: 一匹の犬が吠えながら部屋の中に入ってきた。)
- b. * 吠 进 屋里 来 一条狗。
走る-入る 部屋の中 来る 一匹の犬
(意図する意味: 一匹の犬が部屋の中に吠えながら入ってきた。)
- c. * 吠 了 一条狗 进 屋里 来。
走る-ASP 一匹の犬 入る 部屋の中 来る
(意図する意味: 一匹の犬が吠えながら部屋の中に入ってきた。)
- d. * 屋里 吠 进 来 一条狗。
部屋の中 吠える - 入る - 来る 一匹の犬
(意図する意味: 部屋の中には一匹の犬が吠えながら入ってきた。)

移動の様態を表す動詞 (たとえば「跑 (走る)」) が用いられる場所変化表現では、上述 (8) のように異なる語順の文が成立するのに対し、なぜ移動の様態を表さない動詞 (たとえば「吠 (吠える)」) が用いられると (13) のように非文となるのであろうか。この点に関して何 (2000) では説明されていない。

する必要がある。感覚的には (i) の文は (10a) ((ii) として示す) と共通していると筆者は考える。

- (ii) 一条狗 跑 进 屋里 来。
一匹の犬 走る - 入る 部屋の中 来る
一匹の犬が部屋の中に走って入ってきた。

しかし、(i) が (ii) と共通しているとしても、(i) に「有 (ある)」が加えられることはどのような構造構築による帰結になるか、または「有 (ある)」はどのような構造的機能を果たすかといった問題がある。この問題は本章の議論の射程を超えるため、ここでは立ち入らないことにする。

二つ目の問題として、(8c) (= (12a)) のような語順の文における名詞句（「一条狗（一匹の犬）」）を焦点と分析することの正当性が挙げられる。(12b) が示す構造では、対象意味役割 (theme) を付与されている名詞句（「一条狗（一匹の犬）」）が焦点を表す機能範疇 FocusP の指定部に移動して焦点となっていることが示されている。しかし、(12a) において「一条狗（一匹の犬）」が常に焦点であるとは必ずしも言えない。中国語では焦点を表すマーカー「是」を用いて焦点を提示することができる。また音声的にプロミネンスをかけて焦点を表すこともある（徐 2001）。以下の例を見てみよう。太字が音声的にプロミネンスがかけられた焦点部分を表す。なお、音声的にプロミネンスをかけて焦点を表す場合には焦点マーカーがなくともいいので、焦点マーカー「是」を括弧内に入れて示す。

- (14) a. (是) 跑 了 一条狗 进 屋里 来
 (焦点マーカー) 走る-ASP 一匹の犬 入る 部屋の中 来る
 (、不 是 走 了 一条狗 进 屋里 来)。
 (、否定 焦点マーカー 歩く-ASP 一匹の犬 入る 部屋の中 来る)
 一匹の犬が**走って**部屋の中に入ってきたのだ**(歩いて入ってきたのではない)**。
- b. (是) 跑 了 一条狗 进 屋里 来
 (焦点マーカー) 走る-ASP 一匹の犬 入る 部屋の中 来る
 (、不 是 跑 了 一条狗 出去)。
 (、否定 焦点マーカー 走る-ASP 一匹の犬 外に出る)
 一匹の犬が**部屋の中に**走って入ってきたのだ**(外に走って出たのではない)**。

これらの例が示すように、中国語では、焦点マーカー「是」を用いたり、音声的にプロミネンスをかけて表現したりして焦点となる内容を提示する。したがって、(12a) のような語順の文において名詞句「一条狗（一匹の犬）」は必ずしも焦点とはならない。

さらに、三つ目の問題として、(8c) (= (12a)) のような語順の文について、(12b) の構造が示すように「跑（走る）」と「进（入る）」をそれぞれ動詞と分析することの妥当性が挙げられる。もし (12a) のような語順の文において、「跑（走る）」と「进（入る）」がともに動詞であるとするなら、(12a) は二つの動詞が連続する動詞連続構造の文となる。中国語では二つの動詞が連続する動詞連続構造では、(15) が示すように、後項動詞 V の後ろに ASP（アスペクト）を表す「了」が生起する（朱 1982）。しかし、(12a) の語順

の文では、(16) が示すように「進（入る）」は ASP と共起できない。このことに関しては、二つの動詞が連続する (12b) の構造からは説明することはできない。

(15) 去 超市 买 了 水果 来。
 行く スーパー 買う-ASP 果物 来る
 スーパーへ行って果物を買ってきた。

(16) *跑 一条狗 进 了 屋里 来。
 走る 一匹の犬 入る-ASP 部屋の中 来る
 (意図する意味: 一匹の犬が走って部屋の中に入ってきた。)

何 (2000) が明らかにした移動様態動詞が用いられる場所変化の表現に見られる異なる語順の現象について、本稿は非対格性の観点からの構造的分析が有効であることを 5.5 節で論じる。

次節の 5.4 節では、英語や日本語に観察されている類似の現象に関する分析を概観する。その上で、5.5 節において、中国語場所変化の結果構文を英語や日本語と統一的に分析することが可能であることを論じる。

5.4 英語移動様態動詞の場所変化結果構文の構造分析

5.4.1 英語場所変化結果構文の構文的特徴と語彙的立場の分析

5.2 節で考察してきた中国語の場所変化結果構文が非対格の特性を示す現象は、すでに英語の例でも観察されている。以下では、英語の場所変化結果構文における非対格の特性について具体的に紹介する。

- (17) a. John ran *(himself) tired.
 b. The river froze (* itself) solid.
 c. John ran (* himself) into the room.

英語では run は通常は非能格動詞とされている。run が非能格動詞であることを示す根拠としては、結果構文における振る舞いが挙げられている (L & RH 1995 など)。このことを次のように説明する。本研究第 1 章でも触れたように、英語の結果構文の成立には結果を表す述語が直接目的語と叙述関係を持たなければならないという直接目的語制約 (Direct Object Restriction、以下 DOR) がある (Simpson 1983、L & RH 1995)。また、

非対格の仮説 (Unaccusative Hypothesis) によると、非対格動詞はそれの唯一の項は基底構造では目的語位置にある。一方、非能格動詞はそれの唯一の項は基底構造でも主語位置にある。そのため、DOR の制限によって、非能格動詞「run」が用いられる結果構文には (17a) のように見せかけの目的語「himself」を加えなければ非文となる。それに対し、非対格動詞「freeze」が用いられる結果構文 (17b) では、結果を表す述語が主語位置の名詞句と叙述関係を持つとしても DOR には違反しない。文表層の目的語位置に「itself」を加えると却って非文となる。Burizo の一般化によると、非能格動詞は対格を付与することが可能であるのに対し、非対格動詞は対格を付与する能力を持たない。それ故、非能格動詞が用いられる (17a) では目的語位置に「himself」を加えることができる。それに対し、非対格動詞が用いられる (17b) では文表層の目的語位置に「itself」を加えると、「itself」に対格を付与することができないため、格フィルターの制限によって、許容されなくなる。

このように、英語の結果構文に観察されている DOR は非対格の仮説から理論的支持を得ている。同時に、結果構文に見られる二種類の自動詞の異なる振る舞いは、非対格の仮説を支持する強い証拠とされている (L & RH 1995)。よって、結果構文の成立に見られる (17a) の振る舞いから「run」は非能格動詞であると一般的に言うことができる。

さて、(17c) と (17a) は結果を表す述語が「into the room」のような場所変化の表現か、「tired」のような状態変化の表現か、という点で異なるが、(17c) は一見すると (17a) と同様の非能格動詞「run」が用いられている結果構文のように見える。しかし、(17c) は (17a) と異なり、見せかけの目的語「himself」を加えることが許容されない。(17c) はむしろ非対格動詞「freeze」が用いられる結果構文 (17b) と同様の統語的振る舞いを示している。このように、(17a, b) とそれぞれの対照から見られるように、非能格動詞「run」が場所変化を表す結果述語と共起する (17c) のような場所変化の結果構文では、非対格の特性を見せている。

非能格動詞が場所変化の結果述語と共起する際に、非対格の特性を表す構文で、上述の中国語の場所変化の結果構文と同様に、動詞 V に関して意味的制限が観察されている。このタイプの場所変化結果構文に用いられる動詞は、「run, swim, walk, jump, dance」などのような移動の様態を表す動詞 (verbs of manner of motion) に限られる (L & RH 1995、山田 1998、Mateu 2005 など)。⁶ 以下の例が示すように「laugh, cry」のような動作、行為を表す動詞はこのタイプの場所変化結果構文には用いられない。

(18) *John laughed into the room.

⁶ L & RH (1995) では移動様態動詞を run タイプと roll タイプに分けられているが、ここの議論と関連するのは run タイプの移動様態動詞である。

要するに、英語では移動の様態を表す動詞が場所変化を表す結果述語と共起する場合、非対格動詞の結果構文と共通の統語的振る舞いを示す、一種の非対格化が見られるのである（L & RH 1995、山田 1998、Mateu 2001, 2005 など）。

移動様態動詞が場所変化表現と共起すると非対格動詞と同様の統語的振る舞いを示す現象に関して、語彙的立場からの分析と統語的立場からの分析が提案されている。ここでは、まず語彙的立場の分析の代表として L & RH（1995）について簡単に触れておく。

L & RH（1995）では（17c）のような移動様態動詞の場所変化表現について、次のようなことが指摘されている（L & RH 1995: 189）。⁷

（19）非対格性交替（現象）

run タイプの移動様態動詞は場所変化の表現を補部としている場合に、非対格性が非能格から非対格へと変化する。

つまり、L & RH（1995）は run タイプの移動様態動詞が場所変化を表す結果述語と共起すると、非対格性が非能格から非対格へとシフトするとしている。そして、そこに見られる非対格性の交替は基本的意味から派生的意味への意味変化に起因すると考え、この意味変化の現象にはある種の英語特有の語彙規則が関与していると主張する。要するに、移動様態動詞が用いられる場所変化の結果構文が示す非対格の特性について、L & RH（1995）は語彙規則が関わるという語彙的アプローチによる議論を主張しているのである。

移動様態動詞が用いられる場所変化の結果構文が非対格の特性を示す現象は、英語だけではなく、先述の通り、中国語にも同様の現象が観察される。さらに、後述するように、日本語にも類似した現象が見られる。もし英語に見られるこの現象に、ある種の英語特有の語彙規則が関与しているという説を主張するなら、中国語や日本語において観察されている同様の現象については説明ができないことになる。本章では、英語、日本語、中国語といった異なる言語で観察されている、移動様態動詞の場所変化結果構文の非対格の特性について、統一的な説明を試みる。まず、次節では、この現象について、統語的立場からの分析を具体的に紹介する。

5.4.2 英語移動様態動詞の場所変化結果構文の構造構築と軽動詞 GO

英語の移動様態動詞の場所変化結果構文に見られる非対格の特性に関して、統語的プロセスを主張する先行研究として、山田（1998）、Mateu（2001, 2005）、Mateu & Gemma

⁷ 日本語の述べ方は山田（1998: 23）に従った。

(2002) などが挙げられる。これらの先行研究では分析の詳細はそれぞれ異なるが、移動様態動詞が軽動詞 (GO) の様態付加詞として併合するという主張において共通する。本研究は山田 (1998) に負うところが多いため、以下では山田 (1998) を詳細に検討することにする。

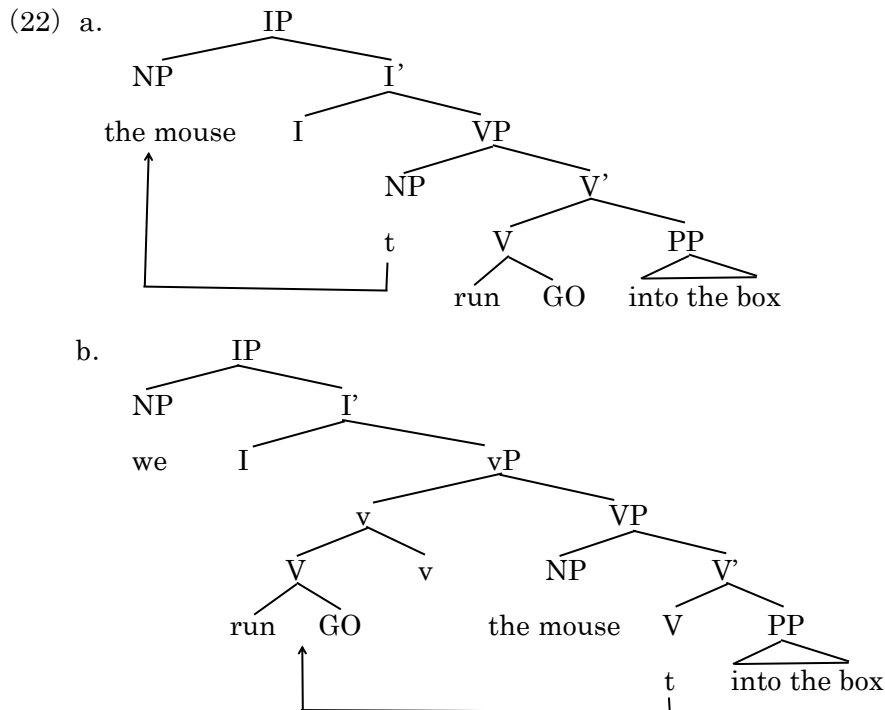
山田 (1998) は Hale & Keyser (1993) の枠組みを用いて、英語の移動様態動詞の場所変化表現に見られる非対格の特性について論じている。そして、次のような趣旨の提案、すなわち、移動様態動詞 (たとえば、run) と軽動詞 GO との併合分析を主張している。

- (20) 英語の辞書は運動の方向を表す軽動詞 GO をもち、移動様態動詞 V (たとえば、run) が構造構築の際に GO と複合体を形成する。⁸

この仮定に基づくと、(21) のような移動様態動詞の場所変化表現が示す非対格の特性 (使役起動交替の現象) は (22) の構造によって説明されている。

- (21) a. The mouse ran into the box.
b. We ran the mouse into the box.

⁸ 山田 (1998: 32) は次のように述べている。「英語の辞書は運動の方向を表すゼロ形態素動詞 GO をもち、語根√run が l-syntax で GO と複合体を形成する」。山田 (1998) の述べ方を (20) のように述べ直した理由は次の通りである。まず、山田 (1998) で用いられている「ゼロ形態素動詞」という用語は Pesetsky (1995) に従った用語であるが、本研究が採用している軽動詞理論における「軽動詞」と同様のものを指すと考えられる。そこで、ここでは統一を図るため、「軽動詞 GO」を用いて述べることにする。次に、軽動詞と併合する際の V は、範疇未指定の語根であるか語彙的動詞であるかの議論があるが、本研究はこの議論に立ち入らない。そこで、軽動詞との併合を示す際には、統一して語根標示√を使わず、V を用いることにする。以下、山田 (1998) が示す構造 (樹形図) を引用する際にも同様で、語根標示√をつけないことにする。最後に、山田 (1998) は Hale & Keyser (1993) で提案されている、「s-syntax」(シンタックスレベルの構造) と区別された「l-syntax」(レキシコンレベルの構造) を用いて、V (run) と軽動詞 GO との併合を主張している。Lin (2001)、Huang (2006) などによると、V と軽動詞 v との併合は、英語では語彙レベルで、中国語では統語レベルで起こる。そして、日本語では英語と中国語の間にあり、語彙レベルでも統語レベルでも起こることがあるということである。実際どうなっているかは更なる考察が必要であると考えるが、このことは本章の議論の射程を超えるため、本研究は立ち入らないことにする。V と軽動詞 v との併合は、いずれのレベルで起こるとしても統語的プロセスであるということが言える。そのため、ここでは、「s-syntax」と「l-syntax」の区別には言及せず、「構造構築」として統一的に扱うことにする。



(山田 1998: 34)

(22a) の構造では、run と軽動詞 GO が併合して VP の主要部となっている。VP 指定部に生起する名詞句 (the mouse) が IP 指定部に移動して文の主語となり、(21a) が産出される。また、(22b) が示す構造は 2 層分裂 VP 構造となっている。⁹ run と軽動詞 GO が併合して成り立つ動詞句 VP の上位に、さらに外項を導入する軽動詞句 vP が存在する。run と軽動詞 GO が併合して形成した複合体が上位の軽動詞 v (CAUSE に当たる) に移動して、(21b) のような他動詞文 (使役文) が派生されることになる。

このように、山田 (1998) は英語の移動様態動詞の場所変化表現が示す非対格の特性について、移動様態を表す V が軽動詞 GO と併合するという構造的分析を提案している。そして、この現象に観察されている構文的特徴は、主要部である軽動詞 GO の性質に還元できるとする。山田 (1998) が規定する軽動詞 GO の性質を提示する前に、以下で、まず英語に軽動詞 GO を仮定することを裏付ける事実とされている日本語の移動様態動詞の非対格用法について、山田 (1998: 32-33) を踏まえながら紹介する。

日本語には英語の run のような移動様態を表す動詞として、「走る、歩く、泳ぐ、這う」などが挙げられる。日本語では移動様態を表す動詞が非対格用法で用いられる場合は、形態的に「いく」「くる」などのような方向の表現を伴う動詞と複合して表現しなければな

⁹ 山田 (1998: 34) では上位の動詞句も VP と示されているが、上位の VP は軽動詞句と考えられる。ここではわかりやすくするため、軽動詞句 vP と示す。

らない (Miyagawa 1989, Tsujimura 1989, 1994 など)。まず、以下の例を見てみよう。

- (23) a. 子供たちが広場で走った。
b. 子供たちが公園へ走っていった。
c. ?*子供たちが公園へ走った。
d. *子供たちが広場で走っていった。

移動の様態を表す動詞「走る」は (23c) のように単独では方向の表現を取ることはできない。(23b) のように「走っていく」と複合して表現する必要がある。また、(23b) と (23d) の対照から見られるように、「走っていく」という複合動詞として用いられる場合は常に方向の表現を伴わなければならない。さらに、(23a) のように「走る」が単独で用いられる場合と、(23b) のように「走っていく」という複合動詞で用いられる場合では、非対格性の違いが見られる。すなわち、単独で用いられる「走る」は非能格動詞であるが、「走っていく」という複合動詞が用いられる場合は、非対格動詞と共通の統語的振る舞いを示す (Tsujimura 1989, 1994 など)。以下、日本語の移動様態動詞が示す非対格の特性について詳しく検討する。

日本語では非対格性を示すテストの一つとして遊離数量詞 (floating quantifier) 表現が利用されている (Miyagawa 1989, 2007, Tsujimura 1989, 1994, 影山 1993, 岸本 2005, 2015 など)。¹⁰ 遊離数量詞表現とは、「～人」「～個」のような助数詞を伴う表現で、それが修飾する名詞句とは相互 C 統御関係を持たなければならない (Miyagawa 1989, 2007 など)。そのため、遊離数量詞が VP 内にある場合は、(24a) のように、VP 内の対象である目的語と結びつくことができるのに対し、(24b) のように VP 外の主語と結びつくことはできない。

- (24) a. 子供たちが_i[_{VP} みかんを_i 3 個_i 食べた]。
b. *子供たち_iが_i[_{VP} みかんを 3 人_i 食べた]。

(山田 1998: 33)

(24a, b) の対照から分かるように、日本語では動詞句内の数量詞はそれと局所的関係を

¹⁰ 影山 (1993) と岸本 (2015) では「たくさん」、岸本 (2005) では「いっぱい」が非対格性のテストとして用いられている。これらはいずれも Miyagawa (1989) で論じられた「遊離数量詞」と共通するものと考えられる。

持つ目的語を修飾することができるが、それと局所的関係を持たない動作主主語を修飾することはできない。しかし、(25a) が示すように、遊離数量詞が主語と結びつくことが許容される場合がある。

- (25) a. 子供たち_iが[_{VP} 学校へ 3人_i 行った]。
b. *子供たち_iが[_{VP} プールで 3人_i 泳いだ]。

(25a) では主語名詞句「子供たち」は、非文である (25b) の主語名詞句と同様に VP 内にはないにも関わらず、VP 内の遊離数量詞と結びつくことができる。これはなぜかといえ
ば、(25a) で用いられている「行く」は (25b) で用いられている非能格動詞の「泳ぐ」
とは異なり、(26) のような構造を持つ非対格動詞だからである (Miyagawa 1989)。

- (26) 子供たち_iが[_{VP} 学校へ _{ti} 3人_i 行った]

したがって、(25a) では、主語名詞は文の表層構造において VP 内にはないが、基底構造
では (26) のように VP 内にあると考えられる。そのため、遊離数量詞が主語名詞句の痕
跡 (t) と局所的関係を持ち、(25a) が自然に成立するのである。こうして、日本語では
遊離数量詞表現が動詞の非対格性を示すテストとされている (Miyagawa 1989、2007、影
山 1993、岸本 2015)。

さて、遊離数量詞表現を利用して、上述 (23a、b) が示す非対格性の違いを検討する。
移動様態を表す動詞「走る」が単独で用いられる場合では、(27a) のように VP 内にある
数量詞 (3人) は主語 (子供たち) と結びつくことができない。一方、「走っていく」のよ
うに複合動詞で用いられる場合には、(27b) のように遊離数量詞は主語と結びつくこと
ができる。

- (27) a. *子供たち_iが[_{VP} 手をつないで広場で 3人_i 走った。]
b. 子供たち_iが[_{VP} 手をつないで公園へ 3人_i 走っていった。]

(山田 1998: 32)

上述のように、非能格動詞の主語は派生のどの段階においても VP 内に存在しないため、
VP 内にある数量詞は非能格動詞の主語を修飾することができない。一方、非対格動詞の主
語は基底構造において VP 内に存在するため、VP 内の数量詞は非対格動詞の主語と結びつ

くことができる。このことを踏まえて考えると、日本語において「走る」などのような移動の様態を表す動詞が単独で用いられる場合は非能格動詞であるが、「いく」と複合して複合動詞を形成すると非対格の性質を持つようになるため、(27a、b)の文法性の違いが生じることを示唆する。要するに、日本語では「走る」のような移動様態動詞は「いく」と複合する場合、常に場所表現を伴い、そして、非対格動詞の統語的振る舞いを示すということである。このことは、英語の移動様態動詞が用いられる場所変化の結果構文が非対格の特性を示すことと共通する。

上述の(25a)のように、「いく」が単独の動詞として用いられる場合、場所表現（「学校へ」）と共起し、(VP内の数量詞が主語と結びつく)非対格動詞の統語的振る舞いを示す。それ故、「走っていく」という複合動詞の非対格の性質も「いく」に由来すると考えられる。こう考えると、英語の移動様態動詞の場所変化表現が示す非対格の特性も、日本語の「いく」に相当する音形を持たない軽動詞 GO に由来するものであると考えることが可能である(山田 1998: 33)。すなわち、非対格の特性を示す場所変化表現では、移動様態動詞 V (run) がゼロ形態である軽動詞 GO と併合して複合体を形成したときに非対格の性質を持つと考えるのである。こう仮定することで、両言語（日本語、英語）で観察されている非対格の特性を示す場所変化表現を統一的に説明することができる。

このように、日本語との類推から、山田(1998)は英語に軽動詞 GO を仮定することが可能であることを主張する。そして、移動様態を表す動詞 V が様態付加詞として軽動詞 GO と併合するとする。そのため、軽動詞 GO が常にその複合体の主要部(head)となる。したがって、英語において非対格の特性を示す場所変化結果構文に観察されている特徴は、主要部である軽動詞 GO の性質に還元して説明できると主張している。そして、軽動詞 GO の性質を次のように仮定している。

- (28) a. GO はその補部として場所変化の表現のみを選択する。
- b. GO の場所変化の要素の選択は義務的である。
- c. GO はその選択特性としてある意味範疇の要素とのみ複合体を形成する。

(山田 1998: 35)

主要部である軽動詞 GO の性質を(28)のように仮定することで、非対格の特性を示す場所変化の結果構文に観察されている特徴は GO の性質に還元して次のように説明することができる。

- (29) a. John ran clear of the car.
 b. * John ran exhausted.
 c. We ran the mouse through the maze.
 d. * We ran the mouse.
 e. John ran out of the room.
 f. * John laughed out of the room.

(山田 1998: 31)

(29a、b) の文法性の違いは、英語では移動様態を表す動詞が、状態変化の結果述語と共に共起する場合には非対格の特性を持たず、場所変化の結果述語と共に共起する場合にのみ非対格の特性を示すことを示している。このことは主要部である軽動詞 GO の補部選択の特性 (28a) から帰結する。また、(29c、d) の文法性の違いは、移動様態を表す動詞が使役的に用いられる場合は、常に場所変化の表現を伴う必要があることを示している。これは、軽動詞 GO の (28b) の特性に還元して説明ができる。さらに、(29e、f) の対照から、非対格の特性を示す場所変化の結果構文では run などのような移動様態を表す動詞に限られることが分かる。このことは、軽動詞 GO が移動の様態を表す意味範疇の要素と複合体を形成することを GO の選択特性として仮定することで説明することができる。

以上のように、山田 (1998) は日本語で観察されている移動様態動詞の非対格用法と平行して、英語の移動様態動詞の場所変化結果構文が示す非対格の特性について、軽動詞 GO を仮定した統語的分析を提案している。そして英語の移動様態動詞の場所変化結果構文に観察されている特徴は、いずれも主要部である軽動詞 GO の性質に還元して説明できると主張している。

次節では、山田 (1998) が提案する統語的分析を中国語に導入する。そして、5.2 節で考察した中国語の場所変化結果構文が示す非対格の特性についても、英語や日本語と統一的に構造的分析が可能であることを主張する。同時に、非対格の特性を示す中国語の移動様態動詞の場所変化結果構文の構造は、山田 (1998) の主張を裏付ける経験的証拠となることを示す。具体的には、中国語の移動様態動詞の場所変化結果構文が示す非対格の特性は、日本語の「いく」と同様に音韻形態を持つ要素に由来する場合もあり、また、英語のように音韻形態がゼロである軽動詞 GO に由来する場合もあることを論じる。

5.5 中国語の場所変化結果構文の構造構築

この節では、中国語の移動様態動詞の場所変化結果構文にも、前節で述べた非対格の特

性を示す英語や日本語の移動様態動詞の場所変化結果構文に対する構造的分析を応用する。

すでに 5.2 節で述べたように中国語において、非対格の特性を示す移動様態動詞の場所変化結果構文 (30a) では、表層非対格現象が成立する際に、(30b、c、d) のように三通りの語順が許容される。

- (30) a. 许多人 跑 进 房间 了。
 たくさんの人 走る・入る 部屋 ASP
 たくさんの人が部屋に走って入った。
- b. 跑 进 房间 了 许多人
 走る・入る 部屋 ASP 多くの人
 たくさんの人が部屋に走って入った。
- c. 跑 了 许多人 进 房间。
 走る・ASP たくさんの人 入る 部屋
 たくさんの人が走って部屋に入った。
- d. 房间 跑 进 了 许多人。
 部屋 走る・入る・ASP たくさんの人
 部屋にはたくさんの人が走って入った。

以下の議論では、中国語の移動様態動詞の場所変化結果構文では、非対格の特性を持つ主要部として、日本語の「いく」のように音形を持つ場合もあり、英語のように音韻形態がゼロである軽動詞 GO として存在する場合もあることを論じ、上記の語順変異がその帰結として説明できることを提案する。

5.5.1 非対格の特性が顕在的主要部に由来する場合

まず (30a、b) の対応現象から議論を行う。(30b) の語順が示す表層非対格現象では、「许多人 (たくさんの人)」は前項動詞と場所変化結果述語の複合体の目的語位置に現れている。この語順の文では、前項動詞「跑 (走る)」が後項動詞「进 (入る)」の様態付加詞であると考ええる。

上述のように、日本語の場所表現「部屋に」は「走る」によって選択されるのではなく、「いく／入る」によってライセンスされる。日本語と同様に、(30a、b) が示す語順でも場所表現「房间 (部屋)」は「跑 (走る)」によって選択されるのではないと考えられる。このことは、日本語において「走る」単独では場所表現「部屋に」と共起できないのと同

様に、中国語の「跑（走る）」も単独では場所表現と共起することができないことから裏付けられる。

(31) *许多人 跑 房间 了。

たくさんの人 走る 部屋 ASP

*たくさんの人が部屋に走った。

また、表層非対格現象である(30b)から「跑（走る）」を削除しても、(32a)のように場所変化を表す表層非対格現象が成立する。それに対し、(30b)から「进（入る）」を削除すると、(32b)のように非文となる。これらのことから場所表現「房间（部屋）」は前項動詞「跑（走る）」によって選択されるのではなく、「进（入る）」によってライセンスされると言える。

(32) a. 进 房间 了 许多人。

入る 部屋 ASP たくさんの人

たくさんの人が部屋に入った。

b. *跑 房间 了 许多人。

走る 部屋 ASP たくさんの人

*たくさんの人が部屋に走った。

「どのように入ったか」という移動の様態が「跑（走る）」によって修飾されているかどうかという点で、(32a)と(30b)は異なっている。

(30a、b)のような語順で示される中国語の移動様態動詞の場所変化結果構文は、山田(1998)が提案する日本語の非対格交替現象と同様に分析することができる。つまり、移動様態を表す動詞「跑（走る）」は場所表現を選択する「进（入る）」の様態付加詞であり、非対格の特性は「进（入る）」に由来すると考えられるのである。したがって、(30a、b)（(33a、b)として再掲）の語順で示されている移動様態動詞の場所変化結果構文の構造を(33c)のように提示する。¹¹

(33) a. 许多人 跑 进 房间 了。

たくさんの人 走る-入る 部屋 ASP

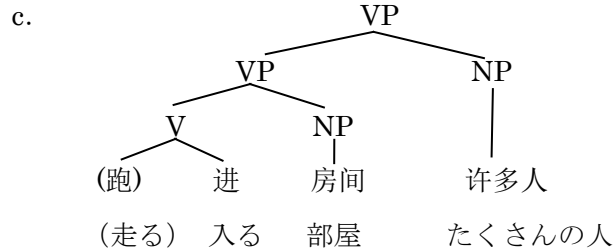
¹¹ この構造分析に影響を与えないため、樹形図ではアスペクトの「了」は省略した。以下同様である。

たくさんの人が部屋に走って入った。

b. 跑 進 房間 了 许多人

走る・入る 部屋 ASP 多くの人

たくさんの人が部屋に走って入った。



「跑（走る）」を括弧内に入れているのは、主要部である「進（入る）」と区別して、主要部の様態付加部であることを示すためである。この構造によって、「许多人（たくさんの人）」が主語位置に移動していくと（33a）の語順の文が派生されることになる。「许多人（たくさんの人）」が表層の目的語位置に残っていると、（33b）の語順の表層非対格現象が出現することになる。

また、（33c）が示す非対格の構造では、場所名詞句が文頭に移動することも考えられる。もし場所名詞句が文頭に移動すれば、（30d）（（34a）として再掲）のような語順の文が産出される。そうすると、何（2000）の分析において基本語順とされている（9a）（（34b）として再掲）は、実は（34a）の派生の場合と同様に扱うことができる。¹²

（34） a. 房間 跑 進 了 许多人。

部屋 走る・入る・ASP たくさんの人

部屋にはたくさんの人が走って入った。

b. 屋里 跑 進 来 一条狗。

部屋の中 走る・入る・来る 一匹の犬

部屋の中には一匹の犬が走って入ってきた。

以上のように、（33c）の構造を仮定することによって、（33a、b）の語順、そして（34）

¹² 何（2000）では「跑进屋里来（部屋の中に走って入ってくる）」のように、場所変化の結果述語には、「来（くる）」が付け加えられている。ここの「来（発話の場所に近づく「来る」）」または「去（発話の場所から離れる「いく」）」は話者の視点を表す要素だと考えられる。本稿が提示してきた場所変化の結果構文は話者の視点を明示する「来」「去」が加えられていなくても、非対格の特性を示す。このことから、話者の視点を表す「来」「去」は場所変化の結果構文の非対格性には影響を与えないと言える。そのため、場所変化の結果構文の構造を分析する際には「来」「去」の構造上の位置を考えないことにする。

のように場所表現が文頭に現れる語順の表層非対格現象も許容されることを自然に説明することができる。

5.5.2 非対格の特性が非顕在的主要部に由来する場合

この節では引き続き、非対格の特性を示す (30a、c) ((35a、b) として再掲) のような語順の構造構築について考察する。

- (35) a. 许多人 跑 进 房间 了。
 たくさんの人 走る・入る 部屋 ASP
 たくさんの人が走って部屋に入った。
- b. 跑 了 许多人 进 房间。
 走る・ASP たくさんの人 入る 部屋
 たくさんの人が走って部屋に入った。

(35b) の語順で示されている表層非対格現象では、「许多人 (たくさんの人)」は前項動詞「跑 (走る)」の目的語位置に現れている。

上述のように (30b) の語順の表層非対格現象では、「进 (入る)」が動詞句の主要部である。主要部動詞「进 (入る)」の様態付加詞である「跑 (走る)」は省略されても、(32a) のような表層非対格現象が成立する。しかし、(35b) では、「跑 (走る)」を省略すると (36a、b) のような文になる。中国語では、アスペクトを表す要素 (「了」など) は単独では生起しないため、(36a) は明らかな非文となる。アスペクトの「了」を含まない (36b) は成立するが、表層非対格現象を示してはいない。

- (36) a. *了 许多人 进 房间。
 ASP たくさんの人 入る 部屋
- b. 许多人 进 房间。
 たくさんの人 入る 部屋
 たくさんの人が部屋に入る。

また、上述のように、(33c) が示す構造では、場所名詞句が文頭に現れることが可能であり、(34) のような語順の表層非対格現象が許容される。しかし、(35b) の語順が示す表層非対格現象では、(37) が示すように場所名詞句を文頭に移動することはできない。

(37) *房间 跑 了 许多人 进。

部屋 走る-ASP たくさんの人 入る

(意図する意味: 部屋にはたくさんの人が走って入った。)

これらのことを踏まえ、(35a、b) では、前項動詞「跑（走る）」が主要部にあり、そして「进房间（部屋に入る）」全体が英語の「into the room」のように場所変化を表す前置詞句として機能すると考える。そうすると、(35a、b)（(38a、b)として再掲）が示す移動様態動詞の場所変化結果構文は、5.4 節で紹介した英語の移動様態動詞の場所変化表現と同様に分析することが可能である。ここでは、山田（1998）で提案されている構造の分析と同様に、軽動詞 GO が構造に存在することを仮定し、(38c) のような構造を提案する。

(38) a. 许多人 跑 进 房间 了。

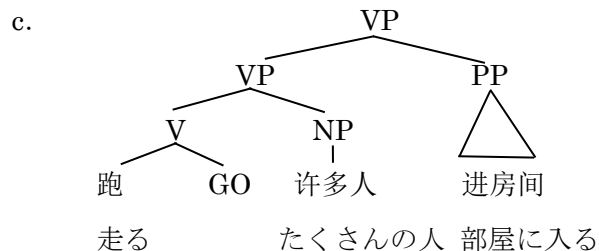
たくさんの人 走る-入る 部屋 ASP

たくさんの人が走って部屋に入った。

b. 跑 了 许多人 进 房间。

走る-ASP たくさんの人 入る 部屋

たくさんの人が走って部屋に入った。



この構造では、移動の様態を表す動詞（ここでは「跑（走る）」）が軽動詞 GO の様態付加詞として併合することが示されている。この構造によって、軽動詞 GO の補部位置にある「许多人（たくさんの人）」が文の表層の主語位置に移動して (38a) の語順の文が派生される。一方、「许多人（たくさんの人）」がそのまま目的語位置に残れば、(38b) のような語順の表層非対格現象が現れることになる。

(38c) が示す構造では、音韻形態がゼロである軽動詞 GO が音声化される必要がある。そのため、上述の (36) が示すように前項動詞「跑（走る）」が省略できないことは、軽動詞 GO の音声化の要請によって自然に説明される。また、「进房间（部屋に入る）」が

一つの構成素（前置詞句 PP）をなしていると仮定することによって、（37）のように場所名詞句「房间（部屋）」の移動が禁止されることは、中国語では前置詞は独立に存在（preposition stranding）できない（邓 2003）ということから自然に説明される。それは（39b）でも同様である。

- （39） a. 张三 坐 在 椅子上。
 張さん 座る に 椅子の上
 張さんは椅子に座っている。
- b. *椅子上 张三 坐 在。
 椅子の上 張さん 座る に
 （意図する意味：椅子には張さんが座っている。）

また、（38c）が示す構造において「进房间（部屋に入る）」が前置詞句（PP）をなしている。中国語では、（40a）が示すように前置詞はアスペクトを表す要素（「着（～てる）／了、过（～た）」）と共起しない（朱 1982）。そのため、何（2000）が提案する構造の分析において問題となる（16）（（40b）として再掲）のような現象も、前置詞句の存在を認めることによって自然に説明されることになる。

- （40） a. *张三 乘 飞机 到 了 上海 来。
 張さん 乗る 飛行機 まで（至る） ASP 上海 来る
 （意図する意味：張さんは飛行機で上海へ来た。）
- b. *跑 一条狗 进 了 屋里 来。
 走る 一匹の犬 に（入る） ASP 部屋の中 来る
 （意図する意味：一匹の犬が走って部屋の中に入ってきた。）

以上、（38a、b）の語順の移動様態動詞の場所変化結果構文は、（38c）の構造をなすと考えられる。それらが示す非対格の特性は英語と同様に軽動詞 GO に由来すると分析できる。そして、山田（1998）で仮定されている軽動詞 GO の性質（28）（（41）として再掲）は、中国語にも同様に想定できる。

- （41） a. GO はその補部として場所変化の表現のみを選択する。
 b. GO の場所変化の要素の選択は義務的である。

c. GO はその選択特性としてある意味範疇の要素とのみ複合体を形成する。

(山田 1998: 35)

(42) a. *跑 了 许多人。

走る-ASP たくさんの人

(意図する意味: たくさんの人が走った。)

b. 跑 了 许多人 进 房间。

走る-ASP たくさんの人 入る 部屋

たくさんの人が走って部屋に入った。

c. *笑/哭 了 许多人 进 房间

笑う/泣く-ASP たくさんの人 入る 部屋

(意図する意味: たくさんの人が 笑いながら/泣きながら 部屋に入った。)

表層非対格現象が成立するには、場所変化の前置詞句が義務的に要求されることを (42a、b) 違いが示している。これは GO の特性 (41b) によって説明される。また、(42b、c) の対照によって、非対格の特性を示す場所変化結果構文には、「笑 (笑う)、哭 (泣く)」などのような動作を表す動詞は用いられず、「跑 (走る)」のような移動の様態を表す動詞のみに限定されることが示されている。このことは、英語と同様に、軽動詞 GO が移動様態という意味範疇を表す要素とのみ複合体を形成するという (41c) の規定を中国語にも仮定すれば自然に説明される。

先述の通り、英語において (29a、b) ((43a、b) として再掲) のような移動様態動詞は、状態変化の結果述語と共起する場合には非対格の特性を持たず、場所変化の結果述語と共起する場合にのみ非対格の特性を示す。このことは、GO の特性 (41a) によって説明される。つまり、軽動詞 GO の補部の選択特性として、場所変化の表現のみを選択し、状態変化を表す表現とは共起しないため、(43b) が不適格となるのである。

(43) a. John ran clear of the car.

b. * John ran exhausted.

一方、中国語では、(44a、b) のように、移動様態動詞が場所変化の結果述語と共起する場合でも、状態変化の結果述語と共起する場合でも、表層非対格現象が現れる。

- (44) a. 跑 了 许多人 进房间。
走る・ASP たくさんの人 部屋に入る
たくさんの人が走って部屋に入った。
- b. 跑 累 了 许多人。
走る・疲れる・ASP たくさんの人
たくさんの人が走って疲れた。

これは、GO の特性 (41a) が中国語に当てはまらないということではない。中国語において、(44b) のような状態変化の結果構文が非対格の特性を示すということは、動詞 V (たとえば「跑 (走る)」) が軽動詞 GO と併合しているのではなく、軽動詞 BECOME と併合しているためである。このことは、第 2 章ですでに考察した通りである。¹³

このように、中国語の移動様態動詞の場所変化結果構文に観察されている特徴についても、軽動詞 GO の特性に還元して説明することができる。

以上、本節では、山田 (1998) の提案を中国語の分析に導入し、非対格の特性を示す移動様態動詞の場所変化結果構文について構造的分析を行った。中国語の移動様態動詞の場所変化の結果構文が示す非対格の特性は、日本語と共通に、音韻形態を持つ顕在的主要部に由来するという構造的分析ができる。また、英語と同様、音韻形態を持たない非顕在的主要部 (軽動詞 GO) に由来するという構造的分析も可能であることを示した。このように二種類の構造を仮定することによって、表層非対格現象が成立する際に三通りの語順が許容されることが自然に説明される。また、中国語の移動様態動詞の場所変化結果構文に観察されている特徴も英語と同様に軽動詞 GO の特性に還元して説明することができることを示した。これらのことにより、非対格の特性を示す中国語の移動様態動詞場所変化の結果構文は、山田 (1998) などが提案した統語的分析を裏付ける経験的事実となりうる。

5.6 まとめ

本章は、中国語の非対格の特性を示す場所変化の結果構文について構造的分析を行った。非対格の構造をなす状態変化の結果構文と対照して、非対格の特性を示す場所変化の結果構文の構文的特徴を示した。すなわち、移動様態を表す動詞のみが用いられること、表層非対格現象が現れる際に三通りの語順が可能であること、という二つの特徴である。これらの特徴を踏まえ、本章は、山田 (1998) が提案する統語的分析を中国語に導入した。そ

¹³ 中国語において動詞 V が軽動詞 BECOME と併合することができるのに対し、英語では移動様態動詞を含む活動動詞が軽動詞 BECOME に併合しないということに関しては Huang (2006) を参照されたい。

して、中国語の移動様態動詞の場所変化結果構文は英語や日本語の類似現象と統一的に分析できると主張した。具体的には、中国語の移動様態動詞の場所変化結果構文が示す非対格の特性は、日本語と同様に音韻形態的に顕在的に存在する主要部動詞に由来する場合もあるということ、英語と同様に音韻形態的にゼロであり、非顕在的な軽動詞 GO に還元する場合もあるということの 2 点を論じ、(33c) (38c) の二種類の非対格の構造を提案した。本稿が提案する二種類の構造によって、中国語の非対格の特性を示す場所変化結果構文に観察されている特徴が自然に説明される。そして、本稿の分析によって、山田 (1998) などで主張されている統語的アプローチの分析が支持されたと言える。

第6章 終章

6.1 各章の概要

本研究は、ミニマリスト・プログラム理論に発展した生成文法の枠組みにおいて、軽動詞理論に基づき、中国語結果構文の構造構築について体系的に分析を行ってきた。以下、本研究のこれまでの分析を章毎に簡単に要約する。

まず、第1章では、中国語の結果構文には日本語や英語の結果構文と異なる特徴が観察されていることを簡単に紹介した上で、「中国語の結果構文はどのようなメカニズムで成立し、どのような体系をなしているか」という課題を提起した。この課題に関連する先行研究の代表とされる Sybesma (1999)、Huang (2006) を踏まえ、本研究の着眼点と目的を明らかにした。その上で、本研究が用いる理論的枠組みとしての軽動詞理論について確認し、本研究における軽動詞の捉え方を定めた。第1章で考察した統語的アプローチを取る先行研究の主張の共通点と、本研究の着眼点と目的を以下に再掲する。

(1) Sybesma (1999)、Huang (2006) の主張の共通点:

- a. 結果構文に現れる項の数が構造分析の手がかりとなっている。
 - a1. 項が一つ現れる自動詞型結果構文が一律に「非対格型」である。
 - a2. 項が二つ現れる結果構文の構造に一律に軽動詞 CAUSE が存在する。
- b. どのタイプの結果構文においても、主語名詞句は V1 と構造上の意味役割関係を持たない。
 - b1. 項を一つ持つ結果構文では主語名詞句が結果述語 V2 と叙述関係を持つ。
 - b2. 項を二つ持つ結果構文では主語名詞句が CAUSE によって導入される原因項である。

(2) 本研究の着眼点と目的

主語名詞句と V1 の意味役割関係が V1 と軽動詞との併合に関与することに着眼し、V1 と軽動詞との併合の仕方を分析することによって、中国語結果構文の構造構築を体系的に解明することを目的とする。

第2章では、文の表面に項が一つしか現れないいわゆる自動詞型結果構文、及び原因項主語を取る原因型結果構文の構造について分析を行った。自動詞型結果構文と原因型結果構文の対応関係、そして原因項 NP と動詞 V1 との意味役割関係を考察した上で、自動詞型

結果構文は、動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合する非対格の構造をなす「再帰構造の自動詞型」と、動詞 V1 が軽動詞 CAUSE と併合する「受動型の自動詞型」の二種類に分かれることを明らかにした。そして、原因型結果構文の構造構築に BECOME と併合した V1 がさらに CAUSE に上昇して併合するプロセスがあることを分析した。第 2 章で分析した自動詞型結果構文と原因型結果構文の構造を以下に再掲する。

(3) 再帰構造の自動詞型結果構文

a. 张三 跑 累 了。

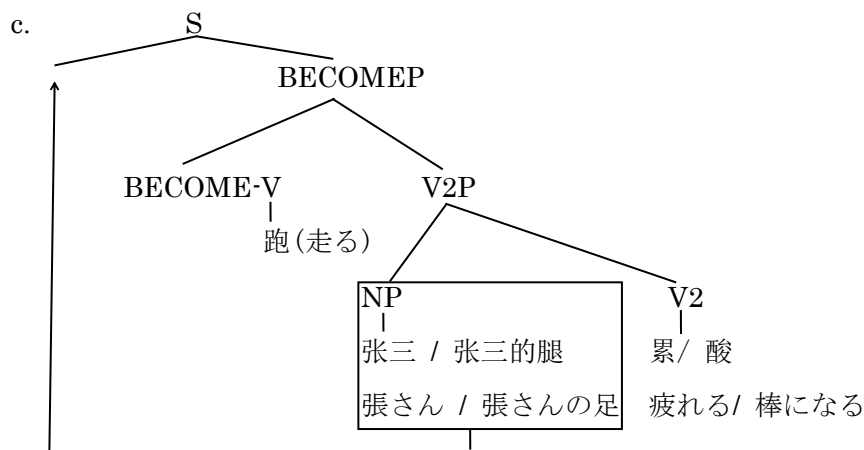
張さん 走る-疲れる-ASP

張さんは走って疲れた。

b. 张三的腿 跑 酸 了。

張さんの足 走る-棒になる-ASP

張さんの足は走って棒になった。

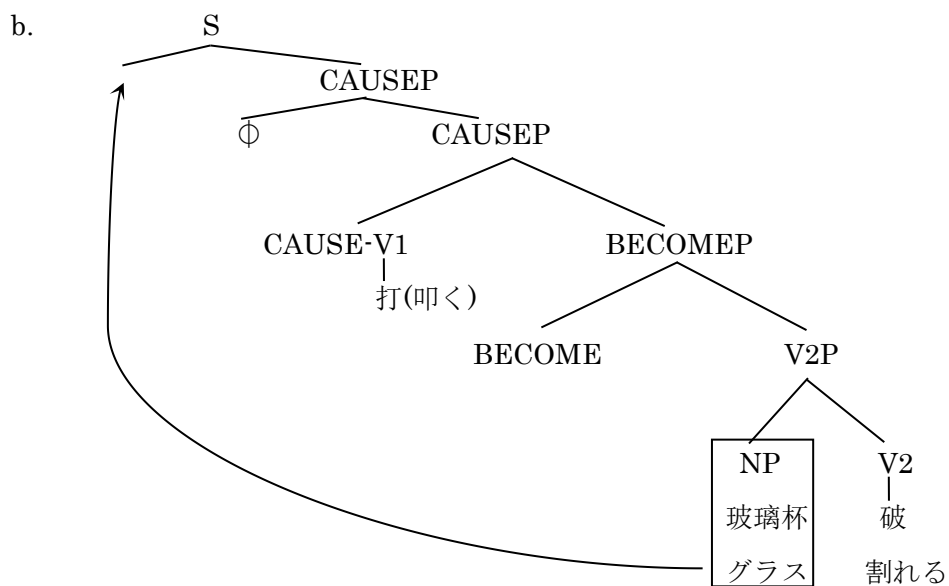


(4) 受動型の自動詞型結果構文

a. 玻璃杯 打 破 了。

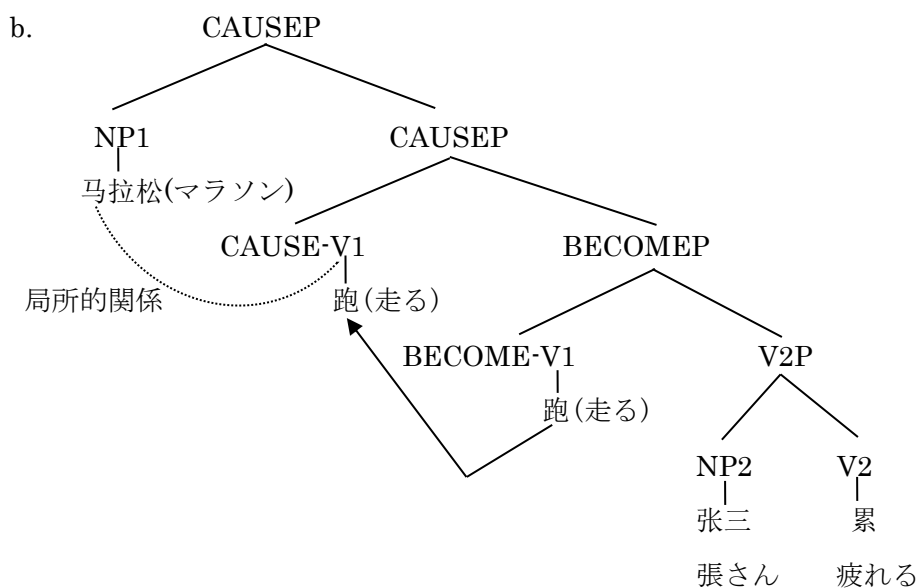
グラス 叩く-割れる-ASP

グラスは叩いて割れた。



(5) 原因型結果構文

- a. 马拉松 跑 累了 张三。
 マラソン 走る-疲れる-ASP 張さん
 マラソンを走ったことが原因で張さんは疲れた。



第2章で提案した新たな構造分析を通して、これまでの先行研究において問題となってきた言語事実が自然に説明されることになる。そして、音声を持たない軽動詞は音声化する必要があり、動詞の移動を引き起こすという軽動詞理論の主張と、本章が提案した構造の分析は合致し、理論的に合理的な帰結となった。

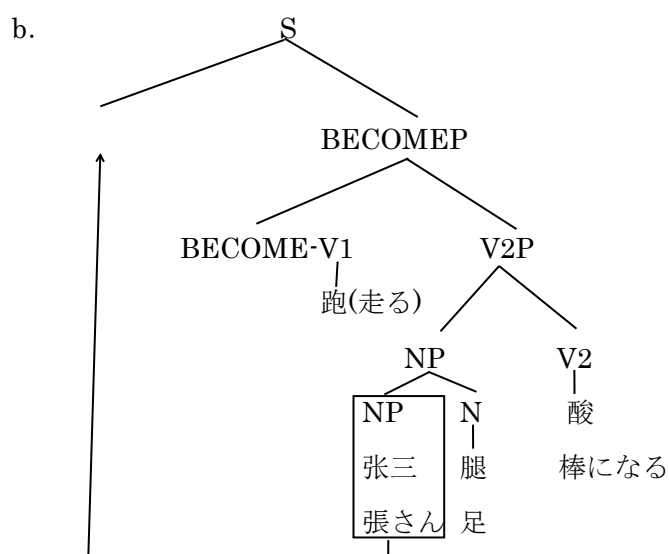
第3章と第4章では、文の表層に主語と目的語の二項が現れる、いわゆる他動詞型結果

構文について構造的分析を行った。第3章では、まず、一括されている他動詞型結果構文では受身文の成立などにおいて異なるタイプの特徴が呈されることを指摘した。その上で、特に受身文が成立しないタイプの他動詞型結果構文の構造構築について議論を行った。このタイプの他動詞型結果構文は、文の表面に主語と目的語の二項が現れるが、主語名詞句と目的語名詞句の間には人とその人の体の部分という「譲渡不可能所有」の関係が保たれていることが特徴的である。第3章では、このタイプの他動詞型結果構文は、第2章で考察した(3b)のような非対格の構造を持つ自動詞型結果構文と共通に、動詞V1が軽動詞BECOMEと併合する非対格の構造をなすと主張し、「非対格の他動詞型結果構文」と名付けた。非対格の他動詞型結果構文の構造構築については、以下(6b)が示すように所有者が目的語の所有格の位置から主語位置に上昇して派生されるという「所有者上昇」のプロセスを仮定した。

(6) a. 张三 跑 酸 了 腿。

張さん 走る・棒になる-ASP 足

張さんは走って足が棒になった。

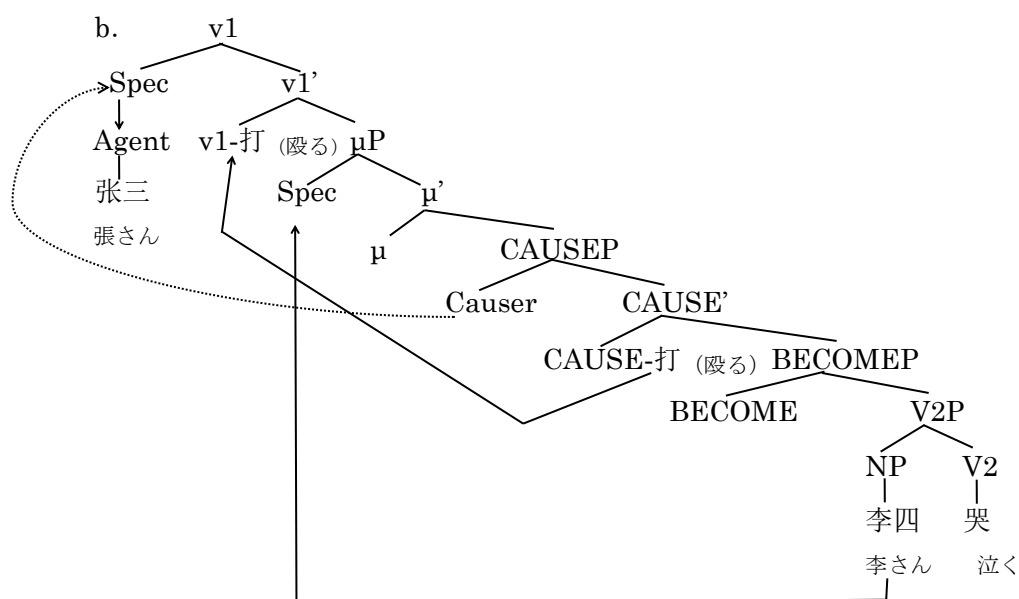


そして、中国語非対格の他動詞文の形成に関する先行研究を再検討し、本研究が採用する「所有者上昇」の分析が有効であることを示した。さらに、「部分格」の付与について議論を進め、英語の **There** 構文、日本語の所有文、そして中国語非対格の他動詞文における部分格の付与を統一的に説明できる「部分格の付与条件」を提示し、非対格の他動詞型結果構文における目的語名詞句が「部分格」を付与されることを論じた。

第4章では、第3章の考察に続き、動作主主語の他動詞型結果構文を取り上げて構造的

分析を行った。従来の研究で原因型結果構文と平行的に分析されてきた CAUSE 型の文構造は動作主主語の他動詞型結果構文の構造として問題があることを指摘した。すなわち、動作主と原因項を統語構造上区別しなければ、動作主主語の結果構文と原因項主語の結果構文に観察される、「逆行束縛 (backward binding)」に対する許容度の違いが問題となることを示した。その上で、動作主主語と原因項主語が異なる構造位置を占め、それぞれが異なる軽動詞によって導入されると主張する藤田・松本 (2005) に依拠し、動作主主語の他動詞型結果構文について新たな構造の分析を提案した。具体的には、動作主主語の他動詞型結果構文では、原因項を導入する軽動詞 CAUSE の上位に意志性を表す機能範疇 (v1) が存在することを論じ、(7b) のような 3 層分裂 VP 構造の構造分析を提案した。

- (7) a. 张三 打 哭 了 李四。
 張さん 殴る-泣く-ASP 李さん
 張さんは李さんを殴って泣かせた。



この構造によって、動作主主語の他動詞型結果構文と原因項主語の原因型結果構文の間に存在する違いは、それぞれの構造に機能範疇 v1 が存在するか否かであると自然に説明される。そして、中国語動作主主語の他動詞型結果構文において V1 が非能格動詞に限られる事実によって、3 層分裂 VP 構造が支持されることを示した。

第 5 章では、前章まで考察してきた状態変化の結果構文と平行して場所変化の結果構文を取り上げ、非対格の特性を示す場所変化の結果構文について構造的 analysis を行った。第 2 章で考察した非対格の構造をなす状態変化の自動詞型結果構文とは対照的に、非対格の特

性を示す場所変化の結果構文は、移動の様態を表す動詞に限られる。それに加え、表層非対格現象が成立する際に三種類の異なる語順が可能であること、という 2 点の特徴を明らかにした。第 5 章は、非対格の特性を示す英語や日本語の移動様態動詞の場所変化表現について軽動詞 GO との併合分析を主張する山田（1998）を踏まえ、非対格の特性を示す中国語の移動様態動詞の場所変化結果構文の構造構築を分析した。中国語の移動様態動詞の場所変化結果構文が示す非対格の特性は、日本語と共通して音韻形態的に顕在的に存在する非対格の動詞に由来する場合がある。そして、英語と同様に音韻形態的にゼロであり、非顕在的な軽動詞 GO に還元することもあることを論じた。それら二種類の構造を以下に再掲する。

(8) a. 许多人 跑 进 房间 了。

た く さ ん の 人 走 る - 入 る 部 屋 ASP

た く さ ん の 人 が 部 屋 に 走 っ て 入 っ た。

b. 跑 进 房间 了 许多人

走 る - 入 る 部 屋 ASP 多 く の 人

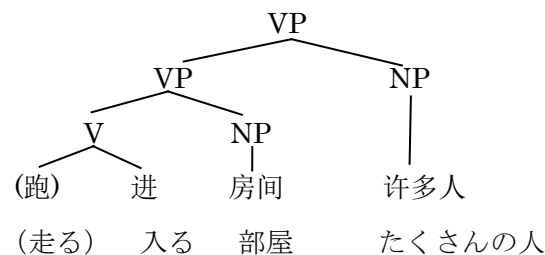
た く さ ん の 人 が 部 屋 に 走 っ て 入 っ た。

c. 房间 跑 进 了 许多人。

部 屋 走 る - 入 る - ASP た く さ ん の 人

部 屋 に は た く さ ん の 人 が 走 っ て 入 っ た。

d.



(9) a. 许多人 跑 进 房间 了。

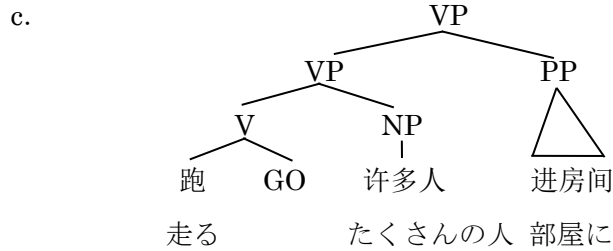
た く さ ん の 人 走 る - 入 る 部 屋 ASP

た く さ ん の 人 が 走 っ て 部 屋 に 入 っ た。

b. 跑 了 许多人 进 房间。

走 る - ASP た く さ ん の 人 入 る 部 屋

た く さ ん の 人 が 走 っ て 部 屋 に 入 っ た。



第5章が提案した二種類の構造によって、非対格の特性を示す場所変化の結果構文の特徴が自然に説明される。本章の分析は、移動様態動詞の場所変化結果構文が示す非対格の特性は語彙的プロセスではなく、統語的プロセスによるものだという主張を支持する経験的証拠となりうる。

6.2 本研究の意義

上述の通り、本研究はミニマリスト・プログラム理論に発展した生成文法の枠組みにおいて、基本的に軽動詞理論に基づき中国語の結果構文の構造構築を考察したものである。本研究は、次の二つの面で意義を有していると思われる。それは、中国語結果構文の研究における意義、軽動詞理論における理論的意義である。以下ではそれぞれについて詳しく述べる。

6.2.1 中国語結果構文の研究における意義

中国語の結果構文については、結果述語 R（または V2）の意味指向の分析や、結果構文に用いられる前項動詞 V1 と結果述語 R それぞれが取る項がどのように結果構文の項構造に実現されるかなどに関する記述的研究は多く、様々な研究成果を挙げた (Li 1990、1993、1995、1999、沈 1993、王 1995、郭 1995、2002、袁 2001、施 2005、2006、2007、2013 など)。しかし、結果構文の構造を体系的に考察する研究は多くない。その中の代表として Sybesma (1999) などの一連の研究や、Huang (2006) が挙げられる。

これらの研究では中国語結果構文に観察される様々な特徴をいくつかの統語構造に基づき統一的に説明しようとし、統語的アプローチの優越性を見せている。しかし、両研究では、結果構文の統語構造を分析する際に、主語名詞句と動詞 V1 の意味関係が考慮されていない点、結果構文の表面に現れる項の数が手がかりとなっている点で共通する。たとえば、結果構文の構造的体系について、Sybesma (1999) は非対格型と CAUSE 型の二種類を区別している。項が一つ現れるものは非対格の構造をなすと主張し、主語と目的語の二項を持つものは一律に軽動詞 CAUSE によって原因項が導入される CAUSE 型だと分析してい

る。Huang (2006) でも項が一つ現れるものが Sybesma (1999) と同様に非対格の自動詞型 (Inchoative) だと分析されている。また、項が二つ現れるタイプについては、他動詞型 (Causeing with a manner) と原因型 (Pure causative) に区別しているが、軽動詞 CAUSE が構造に存在するという主張は Sybesma (1999) の研究と共通する。

中国語結果構文の構造を分析する際に主語名詞句と動詞 V1 との意味関係を考慮に入れないと説明できない言語事実が観察される。そのことを踏まえ、本研究は、結果構文の表面に現れる項の数ではなく、主語名詞句と動詞 V1 の意味関係が V1 と軽動詞との併合に関与するという新たな着眼点を主張した。そして、結果構文を、動詞 V1 と軽動詞との併合の仕方によって区分し、総合的に分析した。その結果、項が一つしか現れないいわゆる自動詞型結果構文は、第 2 章で考察したように、動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合する「非対格の自動詞型」と、動詞 V1 が軽動詞 CAUSE と併合する「受動型の自動詞型」に分かれることを示した。また、項が二つ現れる結果構文に関しては、非対格の自動詞型から拡張され、BECOME と併合した動詞 V1 がさらに CAUSE に上昇して併合することによって派生される「原因型結果構文」(第 2 章)、非対格の自動詞型結果構文と同様の非対格の構造を持ち、所有者上昇によって派生される「非対格の他動詞型結果構文」(第 3 章)、さらに、原因項を導入する軽動詞 CAUSE の上位に意志性を導入する機能範疇 *v*1 が存在する「動作主主語の他動詞型結果構文」(第 4 章) の三種類に分けて分析した。

また、中国語の伝統的な文法研究では、状態変化を表す「結果補語」と場所変化を表す「方向補語」が区別されている(朱 1982、刘 1998 など)。「結果補語」の方は「結果構文」としてその形成と構造が盛んに議論されている。それに対し、「方向補語」に関しては、その形成や構造についての研究は稀である。本研究第 5 章では、非対格の特性を示す場所変化表現について、軽動詞 GO との併合に基づき、構造的分析を行った。本研究は、非対格の場所変化表現だけに考察を限ったが、場所変化の表現も状態変化の表現と同様に「結果構文」として、軽動詞との併合に基づく構造的分析が可能であることを示唆する。したがって、今後さらに考察を進める必要があるが、本研究は中国語場所変化の結果構文の構造分析の一つの試みとして、意義を有するものと言えよう。

6.2.2 理論的含意

本研究の分析は、以下の 2 点において理論的意義がある。

第一に、外項の導入に関する示唆である。ミニマリスト・プログラムに発展してきた生成文法の枠組みにおいては、外項が動詞によって導入されるのではなく、軽動詞 *v* によって導入されるとされている(Hale and Keyser 1993、Chomsky 1995、Nishiyama 1998 など)。

ど)。しかし、第2章の原因型結果構文の考察を通して、軽動詞 CAUSE によって導入される原因項は、軽動詞 CAUSE の様態付加詞として併合する動詞 V1 によって意味的に制限されることが分かった。本研究の分析が正しいとするなら、外項は軽動詞 v 単独によって導入されるのではなく、軽動詞 v 及びその様態付加詞として併合してきた V との複合体によって導入されるということが示唆される。実際には、軽動詞 v と併合した V は、軽動詞 v の指定部にくる外項と局所的関係を持つため、外項の導入に関与する可能性は否定できない。

第二に、軽動詞（機能範疇）の種類に関する示唆である。Chomsky（1995、2001）では非対格動詞を選択する軽動詞 v、非能格動詞及び他動詞を選択する軽動詞 v* の二種類が区別されている。この二種類は Huang（1994、1997、2006）などが提案する軽動詞の体系における BECOME、CAUSE に当たるものとなる。本研究第5章の分析によって、軽動詞には、非対格の動詞を表す軽動詞として GO があるということが支持された。また、第4章の分析によって、意志性を導入する機能範疇が存在することが支持された。

本研究での分析にはさらなる検討を要する部分も少なくないが、理論的な帰結として、以上の2点の理論的含意を提示した。本研究は、軽動詞（機能範疇）に基づいた言語分析に新たな視点を提供するものとなる。

参考文献

- Abbott, Barbara. (1993) A pragmatic account of the definiteness effect in existential sentences. *Journal of Pragmatics* 19. pp.39-55.
- Baker, Mark C. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. The University of Chicago Press.
- Barrie, Michael and Li, Audrey. (2015) Analysis versus Synthesis: Objects. In: Li, Audrey, Simpson, Andrew and Dylan Tsai, Wei-Tien (eds.) *Chinese Syntax in a Cross-Linguistic Perspective*, pp.179-206. Oxford: Oxford University Press.
- Belletti, Adriana. (1988) The case of unaccusatives. *Linguistic Inquiry* 19, pp.1-34.
- Belletti, Adriana and Luigi, Rizzi. (1988) Psych-Verbs and θ -theory. *Natural Language and Linguistic Theory* 6, pp.291-352.
- Bošković, Željko. (1994) D-structure, theta-criterion, and movement into theta-positions. *Linguistic Analysis* 24, pp.247-286.
- Burzio, Luigi. (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*, D. Reidel.
- Campbell, Richard and Jack Martin. (1989) Sensation predicates and the syntax of stativity. In *Proceedings of the English West Coast Conference on Formal Linguistics*, pp.44-55. Stanford Linguistics Association, Stanford University, Stanford, Calif.
- Cheng, Lisa Lai-shen and Huang, C.-T. James. (1994) On the Argument Structure of Resultative compounds. In: Mathew Chen and Ovid Tzeng (eds.) *Interdisciplinary Studies on Language and Language Change*, pp.187-221. Pyramid Press, Taipei.
- 陈宗利、肖德法 (2007) 「“领主属宾句”的生成句法分析」『外语与外语教学』第 8 期、pp.9-12.
- 程杰 (2007) 「论分离式领有名词与隶属名词之间的句法和语义关系」『现代外语 (季刊)』第 30 卷第 1 期、pp.19-29.
- Chomsky, Noam. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris, Dordrecht. (安井稔、原口庄輔 (1986) 訳『統率・束縛理論』研究社出版。)
- Chomsky, Noam. (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam. (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press. (外池滋生、大石正幸 (1998) 訳『ミニマリスト・プログラム』翔泳社。)
- Chomsky, Noam. (2001) Beyond explanatory adequacy. *MIT Occasional Papers in Linguistics* 20. pp.1-28.
- Collins, Chris. (1997) *Local Economy*. MIT Press, Cambridge.
- Dowty, David. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- 邓思颖 (2003) 『汉语方言语法的参数理论』北京大学出版社。
- 冯胜利 (2000) 「“写毛笔”与韵律促发的动词并入」『语言教学与研究』第 1 期, pp.25-31.
- 冯胜利 (2005) 「轻动词移位与古今汉语的动宾关系」『语言科学』第 4 卷第 1 期, pp.3-16.
- Fiengo, Robert. (1977) On trace theory. *Linguistic Inquiry* 8, pp.35-61.

- Fujita, Koji. (1993) Object movement and binding at LF. *Linguistic Inquiry* 24, pp. 381-388.
- Fujita, Koji. (1996) Double Objects, Causatives, and Derivational Economy. *Linguistic Inquiry* 27, pp.146-173.
- 藤田耕司・松本マスミ (2005)『語彙範疇 (I) 動詞』研究社.
- Fukushima, Kazuhiko. (2005) Lexical V-V compounds in Japanese: Lexicon vs. Syntax. *Language* 81, pp.568-612.
- 龚千秋 (1984)「动结式复合动词及其构成的动词谓语句式」『安徽师范大学学报』第 3 期、pp.94-102.
- 郭锐 (1995)「述结式的配价结构和成分整合」『现代汉语配价语法研究』沈阳、郑定欧主编、北京大学出版社.
- 郭锐 (2002)「述结式的论元结构」『汉语语法研究的新拓展 (一) —21 世纪首届现代汉语国际研讨会论文集』徐烈炯、邵金敏主编、浙江教育出版社、pp.169-186.
- Hale, Kenneth and Keyser, Samuel Jay. (1993) On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations. In: Hale, Kenneth and Keyser, Samuel Jay (eds.) *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, pp.53-109. Cambridge: MIT Press.
- 長谷川信子 (1999)『生成日本語学入門』大修館書店.
- 長谷川信子 (2002)「非動作主主語他動詞文の分析」『「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究成果報告書』pp.801-833、筑波大学.
- Hasegawa, Nobuko. (2004a) 'Unaccusative Transitives' and Burzio's Generalization: Reflexive Constructions in Japanese. *Proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics* 1. MIT Working Papers in Linguistics 46, pp.300-314.
- Hasegawa, Nobuko. (2004b) The Possessor Raising Construction: Transitivity, Causative, and Experiencer. *Scientific Approaches to Language* 30, pp.35-74. Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies.
- 長谷川信子 (2007)「日本語の受動文と little v の素性」*Scientific Approaches to Language* 6, pp.13-38. 神田外語大学言語科学研究院センター.
- 長谷川信子 (2011)「『所有者分離』と文構造—『主語化』からの発展—」『70 年代生成文法再認識—日本語研究の地平—』開拓社、pp.85-121.
- 韩景泉 (2000)「领有名词提升移位与格理论」『现代外语 (季刊)』第 23 卷第 3 期、pp.261-272.
- 何元建 (2000)「论元、焦点与句法结构」『现代外语 (季刊)』第 23 卷第 2 期 (总第 88 期)、pp.111-124.
- Hornstein Norbert. (1999) Movement and Control. *Linguistic Inquiry* 30, pp.69-96.
- Huang, C.-T. James. (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*. Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Huang, C.-T. James. (1984) On the distribution and reference of empty pronouns. *Linguistic inquiry* 15, pp.531-574.
- Huang, C.-T. James. (1992) Complex Predicates in Control. R. K. Larson. S. Iatridou. U. Lahiri and J. Higginbotham (eds.) *Control and Grammar*. pp.109-147.

- Huang, C.-T. James. (1994) Verb Movement and Some Syntax-semantics Mismatches in Chinese. *Chinese Languages and Linguistics* 2, pp.587-613.
- Huang, C.-T. James. (1997) On Lexical Structure and Syntactic Projection. *Chinese Languages and Linguistics* 3, pp.45-89.
- Huang, C.-T. James. (2006) Resultatives and Unaccusatives: a Parametric View. 『中国語学』 253、 pp.1-43.
- Huang, C.-T. James. (2015) On Syntactic Analyticity and Parametric Theory. In: Li, Audrey. Simpson, Andrew and Dylan Tsai, Wei-Tien (eds.) *Chinese Syntax in a Cross-Linguistic Perspective*, pp.1-47. Oxford: Oxford University Press.
- Huang, C.-T. James, Li, Y.-H. Audrey, Li, Yafei. (2009) *The Syntax of Chinese*. Cambridge University Press (张和友(2013)译《汉语句法学》兴界图书出版公司)
- 黄正德 (2008) 「从“他的老师当得好”谈起」 『语言科学』 第7卷第3期、pp.225-241.
- 石村広 (2000) 「中国語結果構文の意味構造とヴォイス」 『中国語学』 247、pp.142-157.
- 石村広 (2011) 『中国語結果構文の研究－動詞連続構造の観点から－』 白帝社.
- Jackendoff, Ray S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- 加賀信広 (2007) 「結果構文と類型論パラメータ」 小野尚之 (編) 『結果構文研究の新視点』 ひつじ書房、pp.177-215.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版.
- 影山太郎 (2001) 『動詞の意味と構文』 大修館書店.
- 影山太郎 (2002) 「非対格構造の他動詞一意味と統語のインターフェイス」 伊藤たかね (編) 『文法理論：レキシコンと統語』 東京大学出版社、pp.119-145.
- 影山太郎 (2006) 「結果構文のタイポロジーに向けて」 『人文論究』 56 (2)、pp.45-61、関西学院大学.
- 岸本秀樹 (2005) 『統語構造と文法関係』 くろしお出版.
- 岸本秀樹 (2015) 『文法現象から捉える日本語』 開拓社.
- Kitagawa, Chisato, and Claudia Ross. (1982) Prenominal modification in Chinese and Japanese. *Linguistic Analysis* 9 (1), pp.19-53.
- 木村英樹 (1981) 「被動と『結果』」 『日本語と中国語の対照研究』 第5号、pp.27-46.
- 木村英樹 (2000) 「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」 『中国語学』 247号、pp.19-39.
- 木村英樹 (2004) 「北京话“给”字句扩展为被动句的语义动因」 刑福义主编『汉语被动表述问题研究新拓展』 华中师范大学出版社、pp.242-255.
- 邱林燕 (2017) 「中国語結果構文の構文構築と軽動詞併合」 『国際広報メディア・観光学ジャーナル』 第24号、pp.75-90.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店.
- Larson, Richard K. (1988) On the double object construction. *Linguistic Inquiry* 19. pp.335-391.
- Larson, Richard K. (1991) Promise and the Theory of Control. *Linguistic Inquiry* 22. pp.103-139.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. (1995) *Unaccusativity: At the*

- Syntax-Lexical Semantics Interface. Cambridge MA, MIT Press.
- Levinson, Stephen C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge: University Press. (安井稔・奥田夏子 (訳) (1990) 『英語語用論』研究社出版.)
- Li, Yafei. (1990) On V-V Compounds in Chinese. *Natural Language and Linguistic Theory* 8 (2), pp.177-207. Springer Netherlands.
- Li, Yafei. (1993) Structural Head and Aspectuality. *Language* 69 (3), pp.480-504.
- Li, Yafei. (1995) The Thematic Hierarchy and Causativity. *Natural Language & Linguistic Theory* 13, pp.255-282.
- Li, Yafei. (1999) Cross-componential causativity. *Natural Language and Linguistic Theory* 17, pp.445-497.
- Lin, Jimmy. (2004) *Event Structure and the Encoding of Arguments: The Syntax of the Mandarin and English VerbPhrase*. Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Lin, Tzong-Hong. Jonah. (2001) *Light Verb Syntax and the Theory of Phrase Structure*. Ph. D. Dissertation, University of California, Irvine.
- 刘月华 (1998) 『趋向补语通释』北京语言大学出版社.
- Mateu, Jaume. (2001) Small Clause Results Revisited, in N. Zhang (ed.), *ZAS Papers in Linguistics 26: Syntax of Predication*, Zentrum für Allgemeine Sprachwissenschaft, Berlin, pp.127-152.
- Mateu, Jaume. (2005) Arguing our way to the Direct Object Restriction on English resultatives. *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 8, pp.55-82.
- Mateu, Jaume and Gemma Rigau. (2002) A Minimalist Account of Conflation Process : Parametric Variation at the Lexicon-Syntax Interface, in A. Alexiadou (ed.), *Theoretical Approaches to Universals*, John Benjamins, Amsterdam, pp.211-236.
- 马志刚 (2013) 「局域非对称成分统治, 移位性特征和汉语保留宾语结构的再分析」『北京第二外国语学院学报』第 2 期 (总第 214 期)、pp.1-9
- 马志刚、章宜华 (2010) 「局域非对称成分统治, 词汇特征与保留宾语句式的夸语言差异」『现代外语 (季刊)』第 33 卷第 1 期、pp.1-11.
- Miyagawa Shigeru. (1989) *Syntax and Semantics 22: Structure and Case Marking in Japanese*. Academic Press.
- Miyagawa, Shigeru. (2007) Locality in Syntax and Floating Numeral Quantifiers. *Linguistic Inquiry* 38, pp.645 - 670.
- Nakamura, Norio. (1994) Psych-Verbs and the Experiencer Raising Hypothesis. *Proceedings of the 7th summer Conference 1993*, Tokyo Linguistics Forum, pp. 87-106.
- 中村典生 (1997) 「逆行的束縛再考」『つくば国際大学研究紀要』3、pp.191-208.
- 中村捷、金子義明、菊地朗 (2001) 『生成文法の新展開』研究社出版.
- Nishiyama, Kunio. (1998) V-V Compounds as Serialization. *Journal of East Asian Linguistics* 7, pp.175-217.
- Nishiyama, Kunio. (2008) V-V Compounds. Miyagawa, Shigeru and Saito, Mamoru (eds.), *Japanese Linguistics*. OXFORD University Press.

- 西山祐司編 (2013) 『名詞句の世界』 ひつじ書房.
- 小野尚之編 (2007) 『結果構文研究の新視点』 ひつじ書房.
- 小野尚之編 (2009) 『結果構文のタイプロジー』 ひつじ書房.
- 小野尚之 (2012) 「結果構文の意味論」 『ひつじ意味論講座 第2巻 構文と意味』 ひつじ書房、pp.89-106.
- 潘海华、韩景泉 (2005) 「显性非宾格动词结构的句法研究」 『语言研究』 第25卷第3期、pp.1-13.
- 潘海华、韩景泉 (2008) 「汉语保留宾语结构的句法生成机制」 『中国语文』 第6期 (总第327期)、pp.511-522.
- Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Radford, Andrew. (1997) *Syntax: A minimalist introduction*. Cambridge University Press.
- Rappaport Hovav, Malka and Bethel, Levin. (1999) A Reevaluation of the Direct Object Restriction on English Resultatives. unpublished ms. Bar Ilan University and Northwestern University, Ramat Gan, Israel and Evanston, IL. pp.1-25.
- Rappaport Hovav, Malka and Bethel, Levin. (2001) An Event Structure Account of English Resultatives. *Language* 77, pp.766-797.
- Ross, John Robert. (1986) *Infinite Syntax*. Ablex Publishing Corporation.
- Saito, Mamoru, T-H. Jonah Lin, and Keiko Murasugi. (2006) N'-ellipsis and the structure of noun phrases in Chinese and Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 17, pp.247-271.
- 沈力 (1993) 「关于汉语结果复合动词中参项结构的问题」 『语文研究』 第8期 (总第48期)、pp.12-21.
- 沈力 (2013) 「結果複合動詞に関する日中対照研究—CAUSE 顕在型と CAUSE 潜在型を中心に」 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』 ひつじ書房、pp.375-411.
- 沈阳、何建元、顾阳 (2001) 『生成语法理论与汉语语法研究』 黑龙江教育出版社.
- 沈阳、司马翎 (2010) 「句法结构标记“给”与动词结构的衍生关系」 『中国语文』 第3期 (总第336期) pp.222-237.
- 沈阳、Sybesma, Rint. (2012) 「作格动词的性质和作格结构的构造」 『世界汉语教学』 第26卷第3期、pp.306-321.
- 沈家煊 (2003) 「现代汉语“动补结构”的类型学考察」 『世界汉语教学』 第3期、pp.17-23.
- 沈家煊 (2004) 「动结式“追累”的语法和语义」 『宁夏大学学报』 06期、pp.32-34.
- 沈家煊 (2006) 「“王冕死了父亲”的生成方式」 『中国语文』 第4期、pp.291-300.
- 施春宏 (2005) 「动结式论元结构的整合过程及相关问题」 『世界汉语教学』 第1期、pp.5-21.
- 施春宏 (2006) 「动结式的配价阶层及其歧价现象」 『语言教学与研究』 第4期、pp.45-57.
- 施春宏 (2007) 「动结式致事的类型，语义性质及其句法表现」 『世界汉语教学』 第2期 (总第80期)、pp.21-39.
- 施春宏 (2013) 「再论动结式的配价阶层级及其歧价现象」 『语言教学与研究』 第5期、pp.65-74.
- 石毓智 (2003) 『现代汉语语法系统的建立—动补结构的产生及其影响』 北京语言大学出版

- 社.
- 宋文輝 (2007)『現代漢語動結式的認知研究』北京大學出版社.
- Simpson, Jane. (1983) Resultatives. In: L. Levin et al. (eds.) *Papers in Lexical-Functional Grammar*, pp.143-157. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- 杉岡洋子 (2002)「形容詞から派生する動詞の自他交替をめぐって」伊藤たかね(編)『文法理論：レキシコンと統語』東京大學出版社、pp.119-145.
- 孫晉文、伍雅清 (2003)「再論“領有名詞提升移位”」『語言科學』第2卷第6期、pp.46-52.
- 申亜敏 (2007)「中國語の結果複合動詞の項構造と語彙概念構造」『レキシコンフォーラム』3:195-229、ひつじ書房.
- 申亜敏 (2009)「中國語結果複合動詞の意味と構造」東京外國語大學博士論文.
- 申亜敏、望月圭子 (2009)「中國語の結果複合動詞－日本語の結果複合動詞・英語の結果構文との比較から」『結果構文のタイポロジー』ひつじ書房、pp.407-450.
- Sybesma, Rint. (1999) *The Mandarin VP*: Kluwer Academic Publishers.
- Sybesma, Rint、沈陽 (2006)「結果補語小句分析和小句的内部結構」『華中科技大學學報(社科版)』第41期、pp.40-46.
- Tang, Sze-Wing. (1997) The Parametric Approach to the Resultative Construction in Chinese and English. *UCI Working Papers in Linguistics* 3, pp.203-226.
- Tsujimura, Natsuko. (1989) Unaccusative Mismatches in Japanese. In: *Proceedings of the Annual Meeting of the Eastern States Conference on Linguistics*, pp.264-276.
- Tsujimura, Natsuko. (1994) Resultatives and Motion Verbs in Japanese. *Studies in the Linguistic Sciences* 24, pp.429-440.
- Washio, Ryuichi. (1997) Resultatives, compositionality and language variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6, pp.1-49.
- 王紅旗 (1995)「動結式述補結構配價研究」『現代漢語配價語法研究』沈陽、鄭定歐主編、北京大學出版社.
- 王玲玲 (2001)「漢語動結結構句法與語義研究」香港理工大學博士論文.
- 王奇 (2006)「“領主屬賓句”的語義特點與句法結構」『現代外語(季刊)』第29卷第3期、pp.230-238.
- 溫賓利、陳宗利 (2001)「領有名詞移位：基於MP的分析」『現代外語(季刊)』第24卷、pp.412-416.
- 徐杰 (1999)「兩種保留賓語句式及其相關句法理論問題」『當代語言學』第1卷第1期、pp.16-29.
- 徐杰 (2001)『普遍語法原則與漢語語法現象』北京大學出版社.
- 徐杰 (2005)「被動句式與非賓格句式的一致與差異」『現代中國語研究』第7期、pp.11-19.
- 徐杰 (2008)「領有名詞的提升移位與多項名詞性結構的切分方向」『當代語言學』第10卷第3期、pp.193-199.
- 山田義裕 (1998)「動作の様態動詞に見られる非対格性の交替について－結果の述語構文を中心に－」『The northern review』26、pp.13-44.
- 楊大然 (2008)「領有名詞短語分裂與漢語話題結構」『解放軍外國語學院學報』第31卷第3期、pp.17-23.
- 楊素英 (1999)「從非賓格動詞現象看語義與句法結構之間的關係」『當代語言學』第1卷

第1期、pp.30-43.

楊明 (2008)「他動詞型の結果構文における動補構造の研究－構文文法のアプローチによる中・日・英語の対照研究－」千葉大学博士学位論文.

于一楽 (2015)「中国語結果複合動詞の意味構造と項の具現化」『語彙意味論の新たな可能性を探って』開拓社、pp.102-129.

袁毓林 (2001)「述結式配价的控制—还原分析」『中国语文』第5期(总第284期)、pp.399-410.

张国宪 (1995)「现代汉语的动态形容词」『中国语文』第3期、pp. 221-229

张国宪 (2006)『现代汉语形容词功能与认知研究』商务印书馆.

朱德熙 (1982)『语法讲义』商务印书馆.

朱行帆 (2005)「轻动词和汉语不及物动词带宾语现象」『现代外语(季刊)』第28卷第3期、pp.221-231.